

---

# 超星恋憚インフィニティ-俺と少女のポータル-

珈琲豆Mk-?

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

超星恋憚インフィニティ - 俺と少女のポータブル -

### 【Nコード】

N0782V

### 【作者名】

珈琲豆Mk - ?

### 【あらすじ】

突然だが俺はリトルウィングに入社した。レベル200である俺の目的はただ一つ、女の子にモテまくること！奇想天外が織り成すハートフルラブ&コメディ、ここに見参！少年は今、星の海で恋をする。 注意、微エロです。

半分くらい嘘です。ファンタシースターポータブルの二次創作まったりとコメディやるんで、良かったら見ていってね！

## 第一話？・リトルウィング・（前書き）

（ちょうせいれんたん）又は（ファンタシースターハートフル）

超星恋憚インフィニティ・俺と少女のポータブル・

PSP02インフィニティの二次創作です。

なんかリクエストとかあれば受け付けます。こんなシーン、シチュエーション、ラブが見たい、という希望等あれば、是非感想下さい。作者はラッピー頭の上に阿呆なので、文章力は無いです。それではどうぞ、お楽しみ下さい。

## 第一話？・リトルウィング・

今日はリトルウィング入社日。

期待を膨らませて入社する俺の名前はアルト。アルト＝シュバイツァーだ。傲慢じゃないが、そんじょそこのガーディアンズなんかよりよっぽど実力があるつもりだ。

だから、こんなトコロに入社して厳しいミッションをこなして生活を過ごしていく、なんていう考え方は全くもって……無い！

俺くらいの技量があれば、依頼なんてハナから楽勝だからね。たとえ相手が未知の生物や太陽王だったとしても、間違いなく負けはしない。

では、何故入社したのか？

それは、勿論。

女の子にモテまくりたいからに決まってるじゃないか！

第一話・別に、黒髪クーデレ爆乳の悪夢を狩る剣士が俺の嫁でも構わんのだろう？ -

俺はエミリアとかいう女に言われるがままリトルウィングの社内へと入った。

近未来的な内装。見た感じ、少し機能性にとられすぎている感じもするが、まあいいだろ。

そんなこんなで、俺の目の前にいる少女エミリアが俺に話しかけてくる。

エミリア：

「へえ、あんたって、結構たくましい体つきしてるんだね」

アルト：

「まあな……これでもフリーでずっと戦ってきていたからな。お前

には

この数値が見えないと思うが、俺のレベルはすでに200だ。まあ、

俺の放つ巨大な衝撃波が○ラか○ラゾーマかと聞かれれば、確実に今は

メ〇だと言う程度ではあるがな」

他愛ない挨拶を済ませると、エミリアは俺の二の腕を指先でツンツンしてくる。

アルト：

「おつ、おい、やめろ馬鹿。ちょ、おまこれシャレにならんしょ！レベル200の俺が女の子にツンツンされて身もだえするとか、明日の

朝刊一面で恥さらしでしょ、やめろって！」

エミリア：

「ふ〜ん。女の子には耐性ないんだ。つんつん、ツンツン」

ちょ、ちょ、なんだこの女子は。女子と書いておなごと嫁。もとい読め。

いくら俺のガタイが良いと言っても、別に女に慣れているわけじゃない。確かに、モテるつもりでここに来ただけど、いきなり肉体的なスキンシップはあんまりにも早いというか、取り止めが無いというか、正式なお付き合いとかそーいうのがあるんじゃないやませ

んこと？

俺がしばらくエミリアとかいうはしたない女、はしたない女（大事なことなので（ry）にツンツンされていると、ようやく彼女は納得して俺を解放してくれた。

エミリア：

「そうだ、アルト……だっけ。あんたに頼みたい依頼があるんだけど」

アルト：

「何だ、俺は今恥ずかしい……もとい忙しい！ 用が無いならパートナーカード交換しませんか！？ ……じゃなくて、依頼だと？」

うん、と頷いたエミリア。

エミリア：

「うちにいるナギサって女の子が、今一人でミッションに行ってるんだけど

敵の数が多くてさばききれないらしいの。んでもって、今だけ大サービス

キャンペーン中で、依頼を手伝ってくれた殿方と一日だけデートしても

いいわよ権を発行してるっばいんだよ、だから、とりあえずおっさんのところで

挨拶してから　あ、ちょっと！」

それを聞いた瞬間、俺の身体はすでにトランスポートヘダッシュしていた。

アルト：

「エミリアさんありがとうございました！　俺、今ちょっとだけ感謝してます！」

それじゃ、ささっと片付けてくるんで、後の手続きとか宜しく！」

来た！　あんまりにも早すぎるチャンス到来に、俺の心がエターナルフォースブリザード！

とにかく、そのナギサって子がどんな子なのか、俺がじっくりとヒワイに眺めまくって判断してやろうじゃないの！

アルト：

「あ……」

じゃねえ、普通に行き先聞いてねえし、わかんねえし。



その後、俺はエミリアとかいう説明上手すぎる女に場所を聞きに戻った。場所はなんだったかな、そうだ『熱帯雨林の猪突獣』とかいうミッションだった！

熱帯雨林なので、それはもうあり得る、大いにあり得る。何がだ？ そんなことを聞くのか、じゃあ良く聞いているよ。

熱帯雨林は暑い、暑いとムラムラする、ナギサさん服をパタパタさせる、俺が「こういうところだと長期的に見て暑い格好はミッシェンの効率を悪くするからな……」とさりげなくナギサさんを気遣う姿勢を見せる。

そうするとナギサさんは「そうだな……一理ある」とか言って、やけに脱ぐのを躊躇っていた上着をちらちらと男の視線を気にしながら脱ぎ始める。

どうだ、暑いなとお互いに照れながら言いつつも、ナギサさんの肌着は汗をまとってびちつと張り付くんだ。こんなシチュエーションに紳士的な俺は仏頂面をしつつもチラ見する。

アルト：

「待ってるよ、俺のナギサさん。貴女のピュアハートを弄ぶのも時間の問題だ！

あーっはっはっはっはっはー！」

こうして俺は颯爽とミッションに行ったのである。愛と理想と僅かな工口を抱えて。

## 第一話？・リトルウィング 熱帯雨林・

アルト：

「ぬふうっ……………」

熱帯雨林。

俺はナギサさんという一人の天使に会った数秒後、気づけば顔にめり込んだ拳の跡をつけて突っ伏していたんだが……。

片膝をつく俺に、ナギサさんが物騒な顔つきで見下してくる。

今までのいきさつを簡単に説明すると、俺は熱帯雨林の中でナギサさんを発見した直後、急にナギサさんに不意打ちの攻撃をされた。

が、レベル200まで（マガ殺オンリーで）上げてしまった俺には、残念ながらナギサさんの攻撃が止まっているようにしか、見えなかった。仕方ないので、わざとぎりぎりで避けたふうに体勢を低くした俺は、あろうことか、ぬかるみに足を取られてしまい。

そのままナギサさんに倒れこんで、胸を揉みしだいてしまったというわけだ。とても柔らかくて、ふにゅと効果音が出たくらいだ。あわよくば一生揉んでいたかったが。

そうした理由で顔面パンチを食らい、今に至る。

ナギサ：

「お前が、依頼で来てくれたパートナーか。急なことですまない  
多少動揺しただけで悪気は無かったんだ。許してくれ」

アルト：

「お、俺は気にしていない。主人公補正という役得が早くもこんな  
ところで

いかされるとは思っていなかっただけに、俺はドキがムネムネし  
ているだけだ。

ヒットポイントは減っていない」

そういうと、ナギサさんは「そうか……」と少しだけぎこちない  
笑顔を見せてくれた。

うつむ、もしかしていきなり好感度が下がったというか、そうい  
うのか？ それとも、これはただの布石……？

とにかく、最大の目的（？）であるナギサさんの服を脱がせよう  
作戦はまだいけそうだ。上着を着ていてくれて本当に良かった。

俺とナギサさんは熱帯雨林の奥地に向けてモンスター討伐を開始  
した。確かに、周囲から出現するモンスターの数は今までよりも多

かった。

だが、所詮ボスモンスターはバグ・デツガなのだろう？ 多少いかつくてリアルならアイアンメイデンもびっくりの凄絶な死を遂げそうだが、今のレベル200の俺になら「〇ル・テツカアアー！――」とか叫んでいても余裕で倒せる相手だ。

っていうか、あのスーパーアーマーひどすぎじゃねえか。叩いても突進してくるとかマジで基地する五秒前でしよう。

ここで、俺とナギサさんの簡単な説明をしておこう。面倒な人達ばかりくく読み飛ばすといい。

俺はリトルウィングの傭兵になった。ナギサさんも同じである。俺の外見はジャッジメントコートという服を着て髪を逆立てている。髪の色は蒼だ。思わずジャッジメントですの！ とか言いたくなる衝動は全くもってございますん。

武器は色々使うが、ツインセイバーが多いかな。ワールドオブガーディアンをやや後ろに構えてブレードディストラクションの一点突破とかマジ胸熱。

ナギサさんはタイトル参照だ。主にケツとムネと目つきと色白がたまらん。黒いロングブーツと白いコートを着ている。ステイルハーツとかいう大剣を軽く扱うのだから、夜の大剣さばきもお手の物なんだろう。

出来れば是非、ご教授賜りたい。だが、手を繋ぐのも恥ずかしい俺は、果たしてこんなクリア・マインド的な境地まで辿り着けるのだろうか？

熱帯雨林の中を草木を分けて歩いてみると、俺の少し前を歩いているナギサさんが「ふー」と息を吐いて首元を緩くしている。どうやら、暑いようだ。

俺はすまし顔で言った。

アルト：

「こういうところだと長期的に見て暑い格好はミッシヨンの効率を悪くするからな……」

俺はあらかじめ用意しておいたテンプレートを口にした。よし、これでナギサさんの意中は俺のもの！

そうしたらナギサさんは俺に視線を当てて、

ナギサ：

「エミリアから教わった。こう言う時にふしだらな目をしている男性の前では、うかつに服を脱ぐなど。正直、ワイナールも似たような

目で見ていたが、確かに危険な目つきだと今は悟った。だから脱がない」

な、なんですってー！？

エミリアめ、あの今、忌々しい女め！ 俺の行動を先読みして先手を打っていたとでも言うのか。

俺のナギサさん熱帯雨林でバインバイン作戦は失敗に終わった。

ナギサ：

「何をそんなにしょげている。

お前は私が依頼に追加したサービスを聞いていなかったのか」

アルト：

「なん……だと……？ そ、それってもしかして」

ナギサさんは恥ずかしそうにコクリと頷いた。

そう、あの金髪女が言っていたナギサさんとの一日デート権である。上手く行けば、手を繋ぐことだって、もしかしたらめちゃうくちや仲良くなつて、私の初めてをくく的な展開になるかもしれない。

俺は、目の前にいるナギサさんにどうしようもなく胸がときときしはじめていた。

ナギサ：

「まで、来たぞ。敵の親玉が……」

アルト：

「ほう、来たか…… つて、ええええええええええ！？」

少し広間に出た熱帯雨林の中から、バグ・デツガが1.....2.....3.....約300体.....。

うむ、おかしいだろ。何なんだよこの数。ふざけてるだろ、絶対これ機械の処理能力追いついて無いよね？ P S U じゃ泥人形でしょこれ。いやがらせにも程があるだろう。俺が所詮どうたらとか言っただけなのかな？ それにしてもえぐい仕打ちに涙がぴよろろん。

さすがのナギサさんも、動揺を隠しきれないようだった。



アルト：

「まあ、つまりここは俺の出番ってことで、良いのかな」

俺はコートをふるがえしつつも前に出た。

ナギサ：

「やめろ、まずは確実に一体ずつ仕留めていくんだ！」

そんなに心配しなくても、俺は負けやしませんよ、ナギサさん。  
だつて俺はレベル200、これが学園都市とかなら神ってレベルじゃ  
ねえよ？

アルト：

「下がって下さいナギサさん。このボル・テッ……じゃない、  
バグ・デッガの群れを早々に蹴散らして、とっとと帰りましょう」

そして、俺とナギサさんのデートを始めるんだ。

俺はナノトランサーからツインセイバーを取り出し、軽い足取り  
で先手をきった。



## 第一話？ - 熱帯雨林 洞窟 -

アルト：

「クオオロスッ

ハリケEEEEEEEEン！！」

俺が技名を叫ぶと、バグ・デツカの集団が上空へ吹っ飛ぶ。林は割れて、大地に亀裂が走ると、既にバグ・デツカの数は100体ほど消滅していた。

まるで相手にならないな。それも当然だろう、レベル200である俺くらいになれば、技の攻撃力補正は大体、一般人のそれより300%上乘せ、Sランク程度では足止めもままならんさ。

アルト：

「どうですかナギサさん、今の見ていてくれましたか      ああッ！  
？」

ナギサ：

「くっ……………！」

良く見れば、ナギサさんは近くにいたポイズナスリリーの触手（ツル？）によって捕獲されていた。バグ・デツカの対処で油断してたんだろ。しょうがないな、俺が助けてやるとするか。

ナギサ：

「くっ……このお……ッ！！」

俺が助けてやるとするか。

ナギサ：

「や、やめろぉ……くそくそぉっ………！！！」

俺が、助けて……。

ナギサ：

「や、やめろぉ、どこを触っている……あっ……くう………！！！」

俺は……。

ナギサ：

「だ、だめだ……そんなところ……く、ふうん………はぁ………んッ  
！」

う、うむ、実になまめかしい光景に俺の目は奪われた。

詳しく俺の眼前で起こった状況を説明するところだ。

ナギサさん捕まる、ツルっぽい触手で縛られる、何故か胸の辺りを中心にツルが巻き付く、ナギサさんの服が毒液で部分的に溶かされる、ナギサさんの上着からツルが進入していく、不思議とナギサさんの呼吸が荒々しいものになっていく。

ナギサさん口元から涎を垂らす、今こころへんだ。

ナギサ：

「ふう……あつ……はああ……んああ……！！」

もはや、ナギサさんの声が何かの声にしか聞こえないが、これはどうすればいいんだ。

俺はその場で座り、あぐらをかいて悩む。

ナギサ：

「あっ……はぁ……んっ……くううんっ……！ わ、私は……も  
う……！」

ふゝむ、助けるべきか、助けないべきか。

ナギサ：

「も、もっ……んはぁん……んんんんうっ……！」

しかし、俺は……。

ナギサ：

「たっ、助けてくれえー！！！」

その瞬間、俺の中で忘れていた心が帰ってくる。そうだ、俺はなんて取り返しのつかないことを考えていたんだ。これじゃあ、ただのスケベエ……じゃないか……ッ！

アルト：

「待ってくれナギサさん！ 今助ける！！」

俺はツルだけを鮮やかに断ち切り、ナギサさんを地に降ろす。荒い息を吐いてその場でへたり込むナギサさんに、俺の下半身にある何かが超絶ナギサさんとのインフラストラクチャモードへの接続を考えていたので、必死に妄想を振り払う。あれだ、一方的なのは良くないと思う。

アルト：

「大丈夫かナギサさん……！」

ナギサ：

「はぁ……はぁ……だ、大丈夫だ。バグ・デツカは……？」

アルト：

「あ、そっちは片手間で終わりました。俺の特等席の邪魔を……」

じゃなくて、意外と大したこと無い相手だったんで」

そうか、と言ってからナギサさんがお礼を述べる。いや、むしろお礼を言いたいのはこっちの方ですとか、何でも無いです……。

アルト：

「とにかく、依頼はこれで終了なので戻りましょう」

ナギサ：

「すまない、こ、腰が上がらないんだ……悪いが、肩を貸してくれないか……？」

子犬みたいな瞳で見上げるナギサさんに、俺のインフラスト（以下省略）。

アルト：  
「お、おお、俺はレベル200だっだし、俺は大抵の人から見れば

そこそこ普通っぽい系の顔立ちでそれなりに悪くないと超絶思ってるんだが

い、いいいかんせん女子との交流とか、肩とか、ちょ、ちょっとレベル上げ足りてないんで、上手くこなせるかわかんないんデイスガ

宜しいんでしょうか……？」



ナギサ：

「……？ あ、ああ大丈夫だ、頼む……」

アルト：

「で、では……ごくり」

俺はそつとナギサさんの肩に手を回した。近くに寄ると、女の子っぽい独特の香りの中に、ほんの僅かに汗の匂いがして、何だか妙なりアルを感じてしまう。汗なのに良い香りな気がするのとは一体。

その上、ナギサさんの肌は白くて柔らかくて、軽く触れているだけでも感触がじかに伝わってくるような。時折吐き出す彼女の息が俺の首筋にかかる度に、何とも言えない高ぶりが俺を支配した。

アルト：

「しかし、あのバグ・デッカの数……一体どうなっているんでしょうね」

俺がそれとなくナギサさんに話しかけた、その直後。

ナギサ：

「アルト、危ないッ！！」

ッ！？

その言葉に気づいたとき、俺の背後から生き残っていたバグ・デツカが巨体を上げて突進してきていたのだ。

瞬きしていたのも束の間、俺を庇うように覆い被さったナギサさんにバグ・デツカの強烈な体当たりが炸裂し、俺とナギサさんは勢いに飲まれて近くにあった樹に背中から激突する。

アルト：

「ぐうつ……ッ！？」

鈍い感覚、締め付けられる内蔵の激しい傷みに、俺は思わず喉からこみ上げるような咳を吐いた。

ナギサ：

「うつ……」

だが、問題なのは俺じゃない、まともに直撃を受けたナギサさんは、苦痛に耐え切れずに意識を失ってしまった。

俺は、その瞬間、初めて自分が油断をしていたことの罪悪感に苛まれる。俺がしっかりしていれば、ナギサさんはこんなことにはならなかったのに　ッ！！

激昂したバグ・デツカは、獰猛な息吹を口から吐き出して、再び突進してくる。

アルト：

「くそっ、俺のせいだ！　ナギサさん、ナギサさん、返事をしてくれ！！」

俺とバグ・デツカの距離がぐんぐんと縮まっていく、が、突然予期しない事態が発生した。

アルト：

「何だ……地震！？　もしかして、急に崩落イベント発生ですか…

…！？」

周囲に地響きが鳴り、ナギサさんを支える俺の体も揺れる。

ドオオオオオオオオオ

！！！！

刹那、俺の立っていた地面が半分に裂ける。

アルト：

「えっ、まじかよ！？」

う、うわあああああああああッ！？」

地面が崩れてフツと足元の接地感が消える。俺とナギサさんは暗黒の沼と化した深淵の淵に虚しく飲み込まれていった。

まさか、こんなところでゲームオーバー？

冗談だろ、俺のリアルはまだ始まってすらいないんだぜ。

そう、簡単に、終わりのはずが。

な

。

第一話？ - 洞窟・昼 - （前書き）

**セウトオオオオオオオ！！！！！！！！**

## 第一話？ - 洞窟・昼 -

アルト：

「ここは……」

俺は真っ暗闇の中で目を覚ました。

完全な闇、というわけでもない。俺の頭上には、崩落したと思われる穴から太陽の日差しが線状に降り注いでいる。だが、相当高いところから落ちたんだろう、レベル200の俺の技量をもってしても、到底登れるような高さではなかった。

それどころか、ナギサさんと一緒にコレを登るなんてことは。

アルト：

「そ、そうだ、ナギサさん!？」

俺はナギサさんを探した。すると、少し離れたところでナギサさんが気を失っているのを発見した。

アルト：



「ナギサさん……ひどい怪我だ。そうか、さっきのバグ・デツカの一撃で……それに落ちた時にも結構な衝撃を受けているみたいだ」

俺はうつ伏せに倒れているナギサさんを介抱した。ナギサさんは苦しそうに呻きつつ、額から滲むような汗を流している。

アルト：

「と、とりあえず、応急処置をしないと……御免！」

俺はまず、ナギサさんが怪我をした背中に包帯を巻く為に、彼女の服を背中まで脱がすことにした。

その時、ナギサさんの瞳がゆっくりと開いた。

ナギサ：

「お、お前、何をしている………うつっ！」

アルト：

「あ、い、いや、違うんだ、クリボー（？）が勝手に！  
じゃなくて、すいません。今ナギサさんに応急手当するから、  
じっとしていてくれませんか」

自分の背中への痛みに気づいたナギサさんは、ためらいがちにそれを了承した。俺の手によって、ゆつくりとめくりあげられていくナギサさんの服。それに、露出された白磁のように透き通った肌。華奢な体つきは、彼女のくびれから背骨までくつきりと映し出している。

それを見た俺は、思わず感度が良さそうだなあとか口クでもないことを考えてしまう。いや、おかしいだろ俺！俺のせいでナギサさんは怪我をしたんじゃないか……！

でも　俺はごくりとツバを飲み下す。

健全な男なら目をそらせないほど、ナギサさんの背中には余りにも綺麗で瑞々しく、直に触ってみたくなるような肌をしていた。この腰先から背骨辺りまでにかけてゆつくりと指を這わせたりしたら、どんな声を上げてくれるんだろうと考えてしまっくらいだ。

……ああもう！　何を考えてるんだ、俺は！！

俺は思わず赤面しつつも、ナノトランサーから取り出した包帯と消毒液なんかその他諸々を使って、丁寧に手当てを施した後、ゆっくりと包帯を巻いていく。

アルト：

「ナ、ナギサさん、包帯が巻き辛いんだ。  
少し腰を浮かせてくれないか……？」

ナギサ：

「ん……そうだな。こ、このくらいで良いか……？」

唇を噛みしめながら、ナギサさんはゆっくりと自分の腰を浮かせた。

アルト：

「うん、大丈夫です、それくらいで………うつ！？」

俺は戦慄した。

ナギサ：

「……どうした……？」

アルト：

「……い、いえ、その、腰が……」

あれだ、俺は包帯を巻く為に、少し左斜め後ろ側から包帯を巻いていた。ナギサさんが腰を浮かせる。俺の脇腹付近にナギサさんの腰が近づく。俺の下半身に装備されたバルディッシュ（Sグレードスピア）にナギサさんの腰が意図せず触れてしまう。そういうことだ。

ナギサ：

「ん、巻き辛いか……？　もう少し、腰を浮かせた方がいいのか……？」

アルト：

「あ、いや、その……」

俺が戸惑っていると、ナギサさんは「んっ……」とか艶かしい声を帯びて、俺のバルディッシュ方面へ向けて勢力を拡大してくる。いかん、このままでは撃墜されてしまう。

たじろいつつも、何とか気にしない装いでナギサさんの背中に包

帯を巻いていく。包帯が身体を半周する度にナギサさんの柔らかい肌に触れて、俺は精神を高揚させる。

更に、ついっかかり力を入れすぎてしまい、意識せずともナギサさんの肌を爪先で掠めてしまう。

ナギサ：

「ううん……はあ……！！」

アルト：

「あつ、す、すいません……ッ！」

やばいやばい、つい勢いが余ってしまった！　だが、俺の動揺は  
その後の展開により更に加速する。

身をよじったナギサさんは、更に強く腰をずいずいと持ち上げる。  
すると、あるうことか俺の勢力が完全に封殺されてしまった。端的  
に言うと、ナギサさんのお尻によって俺のバルディッシュが以下省  
略。

だ、ダメだ！　これ以上事が進んでしまうと、襲いくる何かの予  
兆により俺のバルディッシュが完全に起動してしまう！

そんな見えない葛藤をしている俺に、ナギサさんは、

ナギサ：

「んっ……アルトお……た、頼む、早くしてくれえ……」

アルト：

「……………」

ズギユウウウウン。

俺は、あられもなく男の前で素肌をさらして上目遣いで熱い吐息を出して俺の名前を呼んでくるナギサさんにとどめを刺されてしまった。

俺のバルディッシュが戸○呂・弟なみの100%で起動を果たしてしまう。

逝くよ、バルディッシュ……。

イエッサー。

アルト：

「ナッ、ナギサさん　……………！」

俺は我慢の限界を迎えた。包帯を巻いている途中で、思わずナギサさんに両手を広げて

ナギサ：

「お、おい、アルト、どうした？　何をする！　や、やめろ……ッ……！」

アルト：

「ナギサさん　ぐあっ……！」

ガンッ！

気づけば、俺の頭の上にはどこから落ちてきたデカイ岩の塊がぶつかっていた。そのまま頭から崩れ落ちる。

歪む視界、驚いた表情で俺を見ているナギサさんの姿。

く、くそお、あと、ちょっとだったのに……！

俺は薄れゆく意識の中で想った。やっぱり神様は、こんな簡単に俺の妄想を叶えてくれるはずがない。

残念だな、俺に神様の恩恵があれば。

もっと。

……。



???：

『だめだよ、お兄ちゃん。ソーローは女の子から嫌われちゃうんだよ?』

曖昧な光の中で、どこから、少女の声が聞こえた。

お前は

誰だ

？

???：

『お兄ちゃんを守護する神様、だよ』

神  
そうか、神か。

なあ、あんたが神様って言うんなら。

どうしようもない俺の人生に 何を与えてくれるって  
言うんだい？

つまんない生き方しか出来なくて、大事な時に何も出来  
ない。

俺の為に。

???：

『お兄ちゃんに、誰にも手に入れることの出来ない力をあげる  
誰からも奪われることなく、誰もが憧れる力を』

いいのかい、そんな大事なモノもらっちゃって。

???：

「お兄ちゃんにしか使えない、大切な力だから」

そうかい、なら遠慮なくもらっちゃまうぞ。

俺の望む 力ってやつを 。

俺の心は、本当の暗闇の中へ深く沈んでいった。

## 第一話？ - 洞窟・夜 - （前書き）

背景色を緑に、文字を白くしました。見づらいつて方いましたら連絡下さい。

黒板っぽくて嫌だ、元の色が良いって意見でもオツケーです。

てきとーに書いてたら変な方向に話が……まあいいか（笑）

## 第一話？ - 洞窟・夜 -

あれから、どれくらいの日数が経過しただろうか。

洞窟へ落ちた俺とナギサさんは、リトルウィングからの救助が来てくれる事を願って、細々と飢えを凌ぐ生活を続けていた。ナノトランサーに収納していた食料も、もう底を尽きかけている。

だが、前にナギサさんを無理矢理襲おうとしたせいで、俺はすっかりナギサさんから警戒され、この数日はまともに会話も出来なかった。

ああ、ごめんよナギサさん。もうしませんから、マジで許してくれ……。

ナギサさんの怪我也大分落ち着いて、今は一人で包帯の取替えもしている。むしろ、このままだと俺ってもう用済み？

いや、いかんいかん！ まずはきっかけ作りだ！ いつ救助が来るかも分からないし、少しでもナギサさんとの距離を縮めなければ……！

アルト：

「ナ、ナギサさん……」

ナギサ：

「寄るな、ケダモノ」

……。

……ふつ。

どうやら俺は、完全にナギサさんに嫌われてしまったようだ。

確かに、それもしようがないのかもしれない。ナギサさんを助けるどころか、よこしまな目つきで見ていたせいで、今じゃこんな有様だ。とつとと敵を片付けて帰っていれば、ナギサさんからの好感度は普通にうなぎ上りだったはずなのに。

アルト：

「そ、それにしても良い天気ですねー！」

ナギサ：

「どこがだ。常に真っ暗だぞ」

……会話をミスった。俺も目の前が真っ暗になりそうだった。

くっそう、一週間も待つても救助が来ないし、これはもう完全に終わったか……？ 何か奇跡でも起きれば脱出できるのに、そんな安易な物事が……。

俺は、あの時どこから聞こえた少女の声を思い出していた。確かに少女は、俺に力をくれるとか言っていたはずだ。だったら、今の俺がこんなところで辛い思いをしているのはおかしい。それともあれは単純に俺の見た夢か幻だったのか？

この数日、俺はレベル200というものがいかに虚しいことか痛感していた。どれだけ力があっても、目の前でたった一人の傷ついた少女すら守れないなんて、そんな俺に価値なんてあるのか。

真っ暗闇の中で、近くで拾ってきた新しい枝を炎の中にくべる。オレンジ色のゆらめきを散らして、消えかかっていた炎はゆっくりと再燃する。

結局、俺自身もこの炎のように、誰かの助けが無いと消えてしまいうくらい弱い存在なんじゃないか。思わずそんな弱音を吐きそうになった。いや、もしかすると喋っていたのかもしれない、反対側にいたナギサさんが、俺のことを何とも言えない表情で見つめていた。



ナギサ：

「……少し、寒いな」

アルト：

「あつ、も、もう少し枝を持ってきます」

ナギサ：

「いや……」

そうじゃない、と続けてナギサさんは言葉にしていた。……どうしたんだろうか。もしかして、風邪でも引いたのか？ 確かに、ここは夜になると結構寒いし、もう体力的にも精神的にも限界を迎えそうだ。

ナギサさんは、何故か無表情でじつと俺のことを直視してくる。あれだ、俺に死の線でも見えるって言うのかい？ それとも点？

眼帯越しに両方の瞳で見つめてくるナギサさんに、俺はどうして良いのか分からず顔を紅潮させてそれを受け入れていた。しばらくそんな状態が続いていると、ナギサさんは小声で唇を動かした。

ナギサ：

「たまには、話でもしないか？」

まさか、突然ナギサさんの方から声をかけてくれるなんて、俺は急に意識させられたナギサさんとの不思議な距離感に、心臓が熱いビートを刻み始めた。

ナギサさんは目線と首の動きで、こっちに来い、と指示していた。俺は動揺を抑えつつも、ぎこちない足取りでナギサさんの隣に座る。

ナギサ：

「……近いぞ。もう少し離れてくれ」

アルト：

「うっ、すいませんつい」

人が一人分間に入れるくらいの距離を残して、俺とナギサさんは隣同士になった。二人して体育座りでくべられた炎を眺める。

ナギサ：

「いやなに、私も妙に人恋しくなってる……。さすがの私も、ここでずっと生活するのは苦だからな」

アルト：

「ナギサさん……」

ナギサ：

「以前の私もそうだった。他人と手を取り合わず常に自分の使命感に追われて日々を過ごしていた」

暗い洞窟の中で、ただ一つゆらゆらと時の流れを感じさせる炎が、俺とナギサさんの後ろに大きな影を生み出す。

そうか、ナギサさんにもそんな時期があったんだな。それはそうか、誰だって人それぞれの想いや抱えきれない悩みくらい、当然ある。それを考えてしまえば、俺は最初からナギサさんのことを色眼鏡でしか見ていなかったのかもしれない。

ナギサさんはなおも呟くように言葉を綴った。

ナギサ：

「そんな自分を色んな人間が支えようとしてくれた。私は、そんな人達が

いなかったら、今の自分はいなかったと思っているし、感謝もしている」

アルト：

「……どうして、俺にそんな話を？」

ナギサ：

「何故かな……私もお前も、孤独を愛する人間に感じてしまったからだ。」

いや、孤独が好きな人間なんてどこにもいやしないんだろう。自分だけの  
つじつま合わせをして、大事なものから少しでも距離を置こうとしている」

そう語るナギサさんの顔は、短い間だがずっと見てきた彼女の表情の中で、一番綺麗で、そしてとても輝いて見えた。本当に優しい人間って言うのは、こういう顔をするんだろうな。

ナギサ：

「それに……な」

アルト：

「……………」

ナギサさんは一拍を置いて、すうと息を吸い込む。彼女の唇から吐き出される小さな言葉の粒。

ナギサ：

「その……この間のことだけど、な。私は別に、そんなに怒って  
いたわけじゃない。ただ、なんて言うか……」

この間のつて、もしかして俺がナギサさんにしたことの話が……？

アルト：

「なんて言うか……？」

ナギサ：

「つまり、どうして良いのか分からなかったんだ。お前が、私に何  
らの

好意を抱いてくれていることは何となく察していた。けど、それ  
をどう

対処して良いのか分からなかったんだ」

アルト：

「ナギサ、さん……」

俺は馬鹿だ。この時、初めて自分のしたことが分かったような気が  
した。俺は、俺が勝手に自分の好きなナギサさんのイメージに、  
ナギサさんを当てはめていたんだ。好きって気持ちはどこかにあっ

たかもしれない、けれど、それは一目惚れどころか性欲であって、愛では無かったのかも。

ナギサ：

「けれど、お前がそうしていたことも、少しは分かるつもりだ。その……ワイナールが言っていたことなんだが、男性とは好きな女性と契りを交わしたいと考えるのだろうか？」

アルト：

「うっ……………」

残念ながら、否定できる要素が無い。当然、ナギサさんは可愛いスタイルも良いし、えっちなことを考えていなかったわけじゃない。むしろ俺のバルディッシュは（以下略）

俺は照れながら首を振った。

ナギサ：

「なら、お前は健全な男性だと言うことだろう。別にそれ自体は悪いことじゃないと思うが、急に襲いかかってくるのは勘弁してくれよ？」

私も不意打ちされると、つい防衛手段に興じてしまうからな」

アルト：

「はい……すいませんした」

ナギサ：

「ゴ、ゴホン。別に私はお前を責めたいわけじゃない……  
そんなに落ち込まないでくれ」

アルト：

「えっ、じゃあどうして俺に話を……？」

そう答えると、ナギサさんは瞳を閉じて、更によそよそしい咳を零した。僅かにだが、ほんのりと頬が桜色に染まっているような気がする。

ナギサ：

「だから、その……最初に言った一日デートとか、もし救助されなかったら

叶えられないかもしれないだろう？ 依頼として提示したのに、その要求を

果たせなければ、私は冒険者としてすら未熟だ」

アルト：

「っ、つまり……どういうことなんだってばよ」

ナギサさんは、空いていたはずの俺との距離を狭めてくる。手と足を器用にずらしながら、ナギサさんは俺の左腕らへんにピトッと自分の身体を寄せた。彼女の細い腕と俺の腕が軽く接触する。

ナギサ：

「わ、私は別に、お前のことを認めたわけではないぞッ……！  
ただ、男ほどではないにしろ、私にだってドキドキする時が  
無いわけじゃないんだ……」

そこまで聞いて、俺はようやく彼女の意図していることを理解した。……そうだ、確かに俺だって、死ぬ前に思い出くらい残しておきたい。しかも、それが自分の好きな相手ならなおのこと。

最初は、ナギサさんのことを、ただ可愛いとかえっちしたいみたいな風にしか見ていなかった。けど、その考え方も、この一週間で多少なりの変化があった。俺は本当に、本当にちよっとだけなのかもしれないけど、ナギサさんという女性がどんな人物なのか分かったような気がする。

アルト：

「だけど……俺で良いのか？俺はナギサさんの期待に答えられる  
ような、器の大きい人間じゃないかもしれないんだ」



ナギサ：

「大丈夫だ。短い期間だったが、私なりにお前が悪い人間じゃないと言っただけ十分わかったつもりだ。それに、その、私の事をそういう風に」

見てくれた人物は、お前が初めてだから……」

ナギサさんの瞳は、まるで切なく鳴り続けるオルゴールのようで、甘さと悲しさを同居させた色をして震えていた。だが、それと同時に俺の中で今まで自分の心に無かった感情が芽生え始めていた。

俺はナギサさんを助けたい。こんな暗闇の中で、彼女の優しい心の灯火を消えるのをただ待っているだけなんて、嫌だった。苦痛でしかなかった。自分の好きな人が助からない、そんな未来の、何が幸せって言うんだ。

けれど、それと同じくらい、今を大切にしたいと考えるナギサさんの気持ちも理解してあげたかった。

こんな複雑な気持ちになったのは生まれて初めてだった。

アルト：

「ナギサさん諦めないでくれ……。貴女の命は、そんな簡単に打ち棄て

られてしまうほど、軽いものじゃない。俺はナギサさんの、もっと色んなことが知りたいんだ」

ナギサ：

「アルト……」

アルト：

「俺、最初に会った時よりもずっと、ナギサさんのことが、その、あの、

あれだ、あれですよ……み、魅力的だなあ、とかなんか思っっちゃったり

なんかしちゃったりしてて……あ、あははははっ……！」

ナギサ：

「アルト……は、アレ、したことあるのか？」

アルト：

「え、えっと……ジョークの流れとかじゃないですよ。その、キ、キスの

話とか、そういうのですか……？」

ナギサさんは花の咲いたつぼみの様に、一気に頬を紅潮させた。恐らくビンゴだったんだろう。

俺は首を横に振った。今まで女の子と仲睦まじく会話したことすら無かったのに、そんな進展した関係があるはずもない。すると、ナギサさんは「そうか……」と呟いた後、俺の心情を肯定するような言葉を放った。

ナギサ：

「そ、その……。なんか、アルトが、キ……。じゃなくて、接吻をしてくれたら、私はもうちょっと頑張れそうな気がするんだ。自分でも

良く分らないが、多分……」

アルト：

「ナ、ナギサさん……！」

俺は、どうしても目の前にいる女性のことがいとおしくて堪らなかった。今すぐにでも、思いっきり抱きしめて彼女の体温を確かめたい。

ナギサさんは、俺に視線を向けてからゆっくりと瞳を伏せた。未だ桜満開の頬をこちらに寄せて、ナギサさんは軽く唇をすぼめた。彼女の柔らかそうな肉感が、今にも伝わってきそうだ。

洞窟の中に映し出された男女の影が動く。男の両腕がゆっくりと女性の肩を抱くようにあてがわれる。その時、ひときわ彩りを増した繊細な炎が、二人の前でゆらめいた。

ナギサ：

「アルト……………んっ……………」

炎の勢いが落ち着いた頃、俺はナギサさんの唇にキスをしていた。

当てるだけの軽いキス。

ちゅっ……………と二人の唇の隙間で艶かしい音がした。とろけてしま  
いそうな感覚に身を委ねて、俺はナギサさんとの初めての口づけに  
陶醉した。

時間だけが、ただ過ぎていく。

俺とナギサさんは、その後も洞窟の中でひたすらに救助を待った。

繋がれた細い指先の温かさを、ずっと感じながら  
。

## 第二話？ - 洞窟・朝 - （前書き）

良かったらお気に入り登録してって下さい（笑）

しっかしまあ、この主人公は……なんなんだろうね！

## 第二話？ - 洞窟・朝 -

あれから、夜が明けた。

天井の隙間から漏れる光が唯一、俺とナギサさんに時間を教えてくれた。

その日は、ずっと朝が来るまで、二人で手を繋いで眠っていた。どこかで繋がりを保っていたかったのか、俺とナギサさんの心は絶望の渦中にあつたが、それでも僅かな希望を信じていた。

俺が起きた時には、既にナギサさんはその場を離れていて、少し遠くにある通路の中で薪を集めて戻ってきたところだった。

ナギサ：

「遅いぞ。もうとつくに昼くらいだ。もっとも、正確な時間は分からないのだがな」

そう言つて、くすりと微笑んだナギサさんは床に薪を積み上げる。

ナギサ：

「しかし、昨日はうなされなかったんだな」

アルト：

「ん……どうのことですか？」

ナギサさんの不可解な発言に首を捻る。確かにこの一週間、精神的に厳しかったが、俺はうなされていたのか。

ナギサ：

「いや、最初の頃は隅で眠っているアルトの方から、何やらシュツ……シュツという何かを擦るような音と苦しそうに呻く声が

聞こえていたのだが……まあ、無事で何よりだ」

うつ。聞こえていたのか。あれは……あれなんですよ。もう、察してくれとしか。

俺はナギサさんと視線が合う。ナギサさんは表情が薄く、最初の頃は俺に敵意を向けていたのかと思っていたが、慣れてくるとそれが普通の表情なんだという実感を持った。



そんなナギサさんが、何の疑いも無く覗き込んでくるもんだから、もうね、もうね……。

ナギサ：

「大丈夫なのか？　もし、体調が優れないようだったら言ってくれ。アルトが最初に包帯を巻いてくれたように、今度は私がお前の痛い部分を

擦つてやるから」

アルト：

「え？ てっ、手口……」

「？ ！？」

だあああああああああッ！！！！！！！！

すいませんでしたすいませんでしたごめんなさい申し訳ございませんでしたっ！ 俺は白状します！ 実はナギサさんに内緒でこっそりと俺の性剣エルシディオン（自称Sグレードセイバー）をしょいでました！ 日課でした！ ナギサさんのオパーイを想像しながらハアハア言わせてました本当にごめんなさいありがとうございますとうございまして気持ち良すぎました！ ばかばか！ 俺、死ねばいいのに、死ねばいいのに！

俺は灰になり、完全にその場でノックダウンした。ああ……なん

て清々しい気分なんだ……今なら燃え尽きたジ〇ーの気持ちが分かる気がするぜ……。

ナギサ：

「本当に大丈夫なのか？

どうしても体調が優れないと言うのならば

」

アルト：

「い、いや大丈夫大丈夫！ 全然健康です！

むしろ健康すぎて困っちゃうくらいです！！」

そうか、と納得するナギサさん。散々迷惑かけた上に妄想したナギサさんに白い情熱をぶちまけるとかホント色んな意味で世話になりつつゴメンナサイ……。もしも来世で会えたら、その時は思いきり笑ってやってください……。

なんてことをやっている場合じゃなかった。救助が来ない以上、今日も脱出口を探さなければ。

だが、もう一週間も探しているんだ。もしかしたら、本当に駄目なのかもしれない。これがリアルなんだ。人生、そう都合良くは出来ていない。その時はおとなしく、俺とナギサさんで残りの人生を語り合おうじゃないか。

いや、でも正直もう食料もないし、限界に近いんだが……。

アルト：

「ナギサさん」

ナギサ：

「ん、どうした」

アルト：

「俺たち……ここに閉じ込められてもう一週間ですよね……」

ナギサ：

「そうだが……？」

アルト：

「ってことは、つまり、いつ死ぬか分からないってことに他ならないと思うんです」

間を置いた沈黙。ごくりと唾を飲む俺の様子に、ナギサさんもそれとなく気づいたらしい。

ナギサ：

「う……何だ、単刀直入に言え」

アルト：

「も、もう一度俺とキスして下さい……………」

今度こそ風の音も聞こえないような無音の沈黙。やっちゃまった。

つい、ナギサさんの顔を見ていたらあの時の感触を思い出して……。

さすがのナギサさんも顔を赤くさせて、ふて腐れたように俺をジ  
ト目で凝視してくる。

ナギサ：

「本当に単刀直入だな……………全く」

アルト：

「でもしたいんです！　お願いします！　チューさせて下さい……！」

俺は、俺も知らない内に熱い涙を流していた。これじゃ駄々をこ  
ねるそこのガキだ。でもそれ以上に俺はナギサさんとキスがした  
いんだよおお！！

呆れた表情で溜息を吐いたナギサさんは、やれやれと言って俺の  
前まで近づいてきた。

ナギサ：

「ま、全く……本当にしょうがないヤツだな。昨日は私の事を  
安い人間じゃないと言っていた割に、良く言う」

アルト：

「す、すいません……」

ナギサ：

「本当に、もう一度だけだぞ……？」

いよっしゃああ！！ 俺はナギサさんの慈悲に自分への情けなさ  
を感じつつも、再びあのとろけるような感覚に酔いしれることに高  
まる希望を抱いていた。

アルト：

「ナ、ナギサさん……！」

ナギサ：

「アルト……」

俺とナギサさんの距離が近づいていく、唇と唇がお互いの間を埋

めようとして……。

その時、

????:

「……何やってるんだ？　こんなところで」

突然、ふいに声が聞こえた。

アルト：

「だっ、誰だ！（俺とナギサさんの邪魔をしたヤツは！）」

そこにゆっくりと姿を現した影の正体は　。

**第二話？・洞窟 熱帯雨林・昼・（前書き）**

レベル200（笑）の主人公になりそうだ（笑）  
まあ多分、セーフかアウトで言えば

（＾　＾）　セフセフ！！

でしょう！知らんけど！

## 第二話？ - 洞窟 熱帯雨林・昼 -

ナギサ：

「ユート……！ どうしてここに」

即座に俺の身体を引き剥がしたナギサさんは、目の前に出現したツンツン頭の民族衣装っぱいのを着た少年に向かって挨拶をしていた。しかも親しげという。どういうことなんだぜ。

ユート：

「お前達こそ、どうしてここにいるんだ？ ここは、ボク達カーシュ族の人間しか出入り出来ないはずの場所なのに」

アルト：

「ほう……」

俺とナギサさんは、このユートとかいう少年の後について、移動を開始した。まさか、こんな形で脱出できる可能性があるとは思ってもしなかったぜ。

洞窟を歩きながら、俺とナギサさんはユートの話を聞いてい



た。

どうやら、ここは以前にカーシュ族が使用していた秘密の抜け穴らしい。複雑に入り組んだ地形の中で特定の箇所に通路を見えなくする『まじない』をかけ、出口への道を封じていたんだ。まったくなあ、それじゃいくら探しても出られないわけだ。

よくよく考えてみれば、この熱帯雨林はクロウ・ドッグ地方だし、カーシュ族という先住民が暮らしていたことも知っていたのに、俺としたことが迂闊だった。

まあ、そのおかげでナギサさんと親密になれたんだけど、な。

俺は自分の中でこっそりと育んでいるナギサさんとの愛を妄想して、優越感に浸っていた。

いや！ 今はそんな場合じゃない！ 何故かと言うとだな！

俺は少し前を歩いているナギサさんとユートに尋常ならざる視線を向けた。

ナギサ：

「いや……しかし、本当に良かった……  
もう助からないかと思っていたんだ」

ユート：

「ごめんナギサ。この洞窟はボクの知っている長老の  
先代の先代の先代くらいに使ってた場所なんだ。ボクも良く  
知らなかったんだよ」

ナギサ：

「ユートのせいではない。私の未熟さがいけなかったのだ。  
これからはもっともつと強くならなければな」

ユート：

「おう！ 修行なら手伝うぞ！

一緒にやろうやろう！」

……と、言うことだ。

いや、おかしいだろ、あのナギサさんの表情。なんか久しぶりに  
彼氏と再会した時みたいな緩んだ顔してさ。ユートってやつも、な  
にナギサさんと親しく話してるんだよ。修行だと？ そんなの昨日、  
俺がナギサさんと先日の夜にギアナ高地で（どこだ？）……してま  
せんよね。すいません妄想でした。

とにかく、折角ナギサさんと仲良くなったって言うのに、いけし  
ゃあしやあと現われたどこのダークブリンガーの骨とも分かん男

（俺より年下っぽいが）に、ナギサさんと俺の仲を引き裂かれてたまるか！

アルト：

「あら、奥さん！……じゃなかった、おい、ユートとやら」

ユート：

「……ん？ どうしたんだ、ボクに用でもあるのか？」

アルト：

「馬鹿、声が大きい！ ナギサさんに聞こえたらどうするんだ！  
こつ言つ時はな、ひそひそひそ〜って耳に息吹きかけるんだよ  
分かってんのかテメエ、このタコ」

ユート：

「タコ……??????」

アルト：

「うるさい！ だから静かにしろって！ 超絶、俺とお前で内密かつ  
濃厚な男の話があるんだが、別に後ろの穴を開通させるとか  
そついつ話じゃない、落ち着いて聞きたまえ」

ユート：

「????? お、おう……?」

俺はユートの肩に手を乗せて交渉を始めた。

アルト：

「……悪いことは言わん。ナギサさんだけはやめておけ」

ユート：

「どういうことだ??？」

アルト：

「彼女はな、俺と甘い一週間を過ごして分かったんだが、夜になると妙にそわそわし出して『アルトお……アルトお……』と切なく俺の名前を

呼ぶ。何故だが、分かるか？」

ユート：

「甘い……プリンのようなものか？」

アルト：

「お前の推測力が仇になったな……その通りだ。ナギサさんは、無敗の

超絶プレイヤースキルを兼ね備えた夜にそびえる俺の戦斧メテオ・クラッシュ

（Sグレードアックス）じゃないと、満足できない体になっちまったのさ……」

ユート：

「……つまり、ボクじゃ修行の相手にならないってことなのか？」

アルト：

「ふつ、俺も余り自分の強さをひけらかしたくないんだが……ま、なにせ俺は神様の恩恵を授かった生きる屍（？）のような存在だからな。」

お前が驚くのも無理は無い。昨日の紳士的だった俺がナギサさんにした

夜の妙技の数々……教えてやろうか？」

ナギサ：

「ああ……そうだな。是非とも教えてくれ」

アルト：

「ふふつ、そうだろうそうだろう。まあそう焦るな。俺みたいなレベル200で

顔もそこそこイケメン風味の男になりたいんなら、まずは器量と優しさ

忍耐力が必要になる、そこで今日は俺からお前に女が思わずナブラれたくなる

テクニクを少し紹介しよう、良く聞いているよ、まずは、そつと彼女の顎に触れる。この時、彼女が上目遣いかそうでないかで自分に対する

愛情度を測るんだ、上目遣いの場合はゴーサインだ、彼女は

お前に恋をしている、まっ、昨日のナギサさんはまさしくそれだったな、

それどころか待ちきれないと言わんばかりに、口元からいやらしく唾液を垂らして、俺にすすってもらうのを待ちわびている、身も心も俺に

委ねたナギサさんは『もう我慢できないのアルト君……早くうん……』と

声を高らかに上げて俺に男の喜びを伝えてくる、その時どうすればいいか？

決まっている、こちらでも彼女に女の喜びを教えてやるのさ、  
女の喜びと言うのは常に絶対的なカリスマを有した男性にしか与  
えることの

できない行為だ、それを満足させてやるには彼女の唇に  
そつとキスをする、特に昨日のナギサさんは余りにも超絶カッコ  
イイ俺の

魅力に当てられて、自分から貪りつくような口づけを求めた、俺は  
思ったね、俺がここまでステキだとナギサさんのような女性も  
夜になればたちまちふしだらな女になると……まあ、それは仕方  
ないさ、

ヒトは誰しも欲望に身を背けられないもの、俺という伝説が彼女  
の淫乱な

部分を解き放つのは必然であり、俺もまた彼女の甘いくぐもった  
声を

聞きながらそれを受け入れた、更にナギサさんはあまつさえそれ  
では

満足できないと自身のはちきれんばかりの果実を慰めるように  
激しく揉みしだき、果ては俺の下半身に永久付与された

白濁属性120%の封印ノダチ（Sグレードソード）を解放しよ  
うと、

ゆっくりと自分の白くて細い指先を俺の身体に  
掠めるようにそつと……………おああッ!?!?」

ドガバギヤアアアアアアン!!

その瞬間、俺の脳みそは振動し、気づけば逆さまの世界と激しい  
痛みの中で、物凄い形相をしたナギサさんの超絶パンチを食らって

フルボッコにされていた。

俺は顔面に青い痣を作られて、そのまま地面に陥没する。わなわなと震えた声でナギサさんが俺に話しかけてきた。

ナギサ：

「ばっ、馬鹿者おおっつ！！！！！！！！！！」

誰もそんなことをしていない！ 大体なんだ『アルト君』とか！  
私がいつ、そんな風にお前のことを呼んだ！」

アルト：

「ず、ずびばぜん……呼んでませんでぢだ……完全に俺の間違いで  
じだ……」

っていうか、全部聞いてだんですな……」

ナギサ：

「当たり前だ！ そんなデカイ声で叫ばれて気づかないヤツがどこ  
にいる！」

全く……勝手にヒトの過去を捏造して……お前はワイナールよりも  
手がつけれん相手だな……」

アルト：

「お褒めに預がりコーエーです……ぐぼあっ……」

ああ、なんて痛くて気持ちいいんだ……こんな感覚初めてだ。も

しかして俺は、変な人間になっちまったのか？　俺は、ナギサさん……ナギサさん……！！

俺がナギサさんに足で蹴られていると、何故か俺の前で床に伏せる別の影が。

ナギサ：

「ん、ユート……どうしたんだ？」

アルト：

「何だ、お前もこの感覚を味わってみたいのか……中々に心地よいぞ。得も言われぬ快感が全身を駆け巡ッ……！！」

ナギサ：

「お前は黙っている」

アルト：

「ずびばぜん……」

俺は執拗にナギサさんの華麗な足で踏みつけられた。だが、ユートはそれでも微動だにしない。

ユート：



「アルト……いや、師匠!!」

アルト：

「はいい??」

ユート：

「ボクを鍛えてくれ! ボクは、もっともって修行して強くなりたいんだ!!!」

アルト：

「ひょっ? もしかしてお前、マジで俺が修行してると……」

ようやく攻撃を止めてくれたナギサさんは、俺に向かって妖艶に口元を歪める。……良かった、このまま踏まれていれば、俺は別の意味で果てていただろう……。

ナギサ：

「良かったな、どうやらお前に舎弟が出来たようだぞ?」

アルト：

「まじっすか……」

という理由でユートは、今日から俺の弟子になった。どうしてこうなったか自分でも全くもって分からないが、とにかくそういうこ

とだ。

こうしてユートが加わり、俺とナギサさんの長く険しく甘くほのかな洞窟生活から脱出したのであった。

## 第二話？ - 熱帯雨林 リトルウィング - (前書き)

最初は何にも考えて無かつたんですけど、とりあえず変な方向にストリーの方針が固まってきました。改めて説明しますが、この作品はラブコメ&エロコメです。苦手な方は退出を、OKな方は良ければお付き合下さい。

あと、今後もオリキャラを出していく予定ですが、二次創作でオリキャラがデカイ顔するのは苦手って方は教えてください。なるべく検討の方向にもって行きます。

とは言っても、作者は力量不足なので、どこまでのことを出来るかわかりませんが……とにかくエロくすればいい、どっちかと言うと甘酸っぱいのが良いなど、色々なご意見お待ちしております。

ようゝよに敬礼！(ゝゝゝ)

## 第二話？ - 熱帯雨林 リトルウィング -

やっとのことで、俺とナギサさんはリトルウィングへと戻ってきた。

途中、洞窟を出た時に感じた太陽の日差しを、俺は一生忘れないだろう。

事務所に入ると、最初に見た金髪女の顔が見えた。

エミリア：

「ナギサー！ もぉ、心配してたんだよ、おかえり！」

ナギサ：

「ああ……悪かったな。ユートのおかげで無事だった。心配をかけたな」

アルト：

「おい、その金髪女。じゃなくてエミリアさん。俺のことは無視ですかー!？」

そう言って、やっと気づいたように俺を見る。

エミリア：

「あんた誰だっけ？」

アルト：

「アルトだ！ アルト〓シュバイツァー！」

エミリア：

「ああ。新しく入社した新人クンね。うんうん、いたねそっぴや」

アルト：

「忘れるなよ……ん？」

何だろうか。何やら、俺の足元に変な違和感が。

????：

「大丈夫だよ、お兄ちゃん！

わたしはずっとお兄ちゃんのことを心配してたから！」

アルト：

「……誰だ？」

俺の真下には、小さな女の子がいた。いや、幼女とでも言うべき

か。可愛くてほんわかとした丸っこいイメージにふさわしい感じの、ロリっ子だ。

????:

「誰ってオメエ、そいつぁアルト、お前の妹だヨ」

アルト:

「はいいいい？」

遠くの事務机に足をかけているオッサンが俺に声をかけてきた。いや、知っている。何度か目にしたことがある。エミリアの親父で、名前は確かクラウチ・ミューラー。ここの管理を請け負っている責任者というわけだ。

髪の毛が目元まで伸びていて、だらしない印象がある。いやらしい口元は、まるでいつかの俺を見ているようだ。俺にもあんな時代があったんだな。

だが……俺に妹がいたとはどういうことだ？ 俺は家族いないし、そんなの知らないんだが。

それで俺はピンと来た。

つまり、これは俺がナギサさんを助けたことに対するプレゼントなんだと。このオッサン、妹をプレゼントしてくれるとは、思い切ったことするじゃないか。まあ、多分パートナーマシナリーなんだろうな。

俺は嬉々として少女を眺めた。

アルト：

「……………」

????：

「どうしたのお兄ちゃん？」

無え。

い、いや、すまない。説明しないとまずいよな。

まず、この少女は俺の妹らしい。俺の三分の一くらいしかない外見に、銀髪ツインテールで両サイドに黄色いリボンをしている。更に瞳は澄み渡るようなブルーの輝きに、真っ黒の肩紐ワンピース。

これだけだと普通に見えるんだが、少女にはまず、指が無かった。

無いというより、丸い？ ついでに足も丸い、つか素足かよ。端的に言っと、マスコットの様な感じが。

まあ、とにかくこれでコイツが人間じゃないことは確信した。だが、キャストっぽくも無い。かと言ってモンスターかと聞かれれば、そんなことはあり得ないだろう。幼女のモンスターとか俺得すぎて困るからな。

アルト：

「……で？」

クラウチ：

「あん？」

アルト：

「コイツの名前は何て言うんですか？」

エミリア：

「ちょっと、アルト。あんたお兄ちゃんなのに  
どうして名前知らないのさ！」

エミリアが怒って俺に指をさしてくる。そんなこと言われても知らねーよ。



ナギサ：

「全くだな。妹の名前くらい覚えておかないとな……で、エミリア、ここはどこだったか？」

エミリア：

「リトルウィングですう！！！」

クラウド；

「で、名前は何て言うんだい？ お嬢ちゃん」

???：

「ん〜ん。まだ名前ないの。だからお兄ちゃんが付けてくれるって」

アルト：

「はiiiiiiiiiiiiiiiiiiii?????」

コイツは一体、何を言ってるんだ。俺の頭がおかしいのか、コイツがおかしいのか。我輩は幼女である名前はまだないってか。草生やすぞコノヤロー。

だが、何故か飛んできた言葉は俺の記憶に順ずる回答ではなく、

クラウド：

「おい、名前が無いんだと！ 早く名付けてヤレよ！」

エミリア：

「そーだそーだ！ 暴力反対ー！」

ナギサ：

「その通りだな。アルト、お前というヤツは……」

ユート：

「兄弟は大切にするものなんだぞ！」

何で俺フルボッコにされてんの？ 何の魔力？ っつか、因果律がおかしいだろ！ こういう物理法則が適用されたら、こんな結論に落ち着くんだよ！！

俺はさつきからじいじと見つめてくる少女の視線に耐え切れず、ゆっくりと目を合わせた。なんか、捨て猫を見つけた時のような気分だが、その割にはやたらと嬉しそうなのは何故なんだ？

アルト：

「なあ、少女。なんか名前を付ける参考になるものとか無いのかよ、自分の身近な要素でさ」

???：

「うーん……一応あるけど、聞いていいの？」

アルト：

「聞かなきゃ話になんないだろ？ 俺は別にレベル200だし  
幼女のこと嫌いじゃないんだが、いかんせん今の状況は圧倒的に  
不利なんです！ 具体的に言っと、このまま俺が幼女に名前を  
付けないと、きっと明日から無職になっちまうくらいに！」

そうなんだと他人事のように呟く幼女。

???：

「えつと……じゃ、言うね？」

わたしはダークファルスの精神を介して生まれた存在で  
その定義もほぼ同様の枠組みなの、分かった？」

アルト：

「……………分かる……………わけねーだろ！ このハゲ！」

???：

「あつ痛い！ 痛いようお兄ちゃん！」

わたしはハゲてないし、そもそもお兄ちゃんの役に立つ為に  
生まれた神様のような存在なのに！」

アルト：

「あつ？ 神様……………だと？」

目の前で頭をさする幼女は、何事も無かったかのように綺麗な微笑みを見せた。

一体全体どういふことなんだぜ？

この幼女は何者なのか、UNオーエン的な発想のまま、俺は呆然と幼女を見つめたまま立ち尽くしていた。

## 第二話？・リトルウィング昼 夜・（前書き）

もうやだこの主人公（笑）

しかし、幼女を書くのは楽しいですね。

ああそうだ。幼女の名付け親募集。

由来やエピソードなど交わる部分があればなおよし、無くても良いネーミングなら歓迎です。

特に何も無ければ、作者が勝手に付けます（笑）  
期限は知らぬ！ てきとーで（、、）

## 第二話？・リトルウィング昼 夜・

幼女：

「へっへっへっ、おにいちゃんとおく  
一緒に部屋だあ」

アルト：

「……全く、あのオツチャンもエミリアやユート……  
それどころかナギサさんまで、この幼女が俺の妹だって  
信じちまうなんて」

色々と事を終えて部屋に戻ってくると、既に時間は夜になっていた。

幼女は俺の部屋に入ってくると、すぐさまボフンとベッドに飛び込んだ。枕の匂いを嗅いでお兄ちゃんの香りがするううとか言っ  
てやがる。やめるんだ幼女、でなければ今すぐ俺の部屋が鼻血でレッ  
ドカラーに変更されてしまうことになるぞ。

まあ、これがお兄ちゃんの香りだけで本当に良かった。もしこれ  
で俺の榴弾銃・ジェノサイドバンカー（Sグレードグレネード）を  
幼女に見せつけて『洗ってない犬（獣）の臭いがする……』とか言  
わしめた時には、即座に俺の白フォトンが暴発するだろう。……あ  
れ、でもあの武器って射程短かったような。

俺が、幼女の指と口で俺のピーをピーさせる妄想をしていると、急に飛び上がった幼女が俺に向かって膨れた顔して睨み始めた。

幼女：

「むう……お兄ちゃんのえっち」

アルト：

「ぬわにいいい！ 幼女、もしかしてお前……俺の心が読めるのか！？」

驚いた俺に、大きな返事で「うん！」と答える幼女。おいおい、まじかよ……それじゃ俺が寝る前にナニで何をしようとしているのか、モロバレじゃないか。

幼女：

「うん、モロバレだよ。つというかお兄ちゃんは煩惱が強すぎ！お兄ちゃん、事務所に居たとき、ずっとナギサさんの胸ばかり見て

妄想してたでしょ！」

アルト：

「そ、そんなコトまで分かるのか！」

幼女：

「これはお兄ちゃんの顔に書いてあっただけで  
心を読んだわけじゃないもん！　だって、お兄ちゃんの思考って  
何もしてないのに、どんどんわたしの中に注ぎ込まれてくるんだ  
もん……」

注ぎ込まれて、という単語に俺の脳内は加速を始める。

幼女：

「ほら！　またえつちなこと考えてるでしょ！  
もおゝやだなあお兄ちゃんは。でも、お兄ちゃんは健全な男の子  
だし  
これくらいしょうがないよね」

アルト：

「ふふつ、幼女は話が分かるな……お兄ちゃんは鼻高々だぞ」

幼女：

「もし、お兄ちゃんが良かったらあゝ……私の大事なトコ見せてあげても  
いいんだよ？」

アルト：

「なっえつちよくあwせdrftgyふじこlp:@:」！?!  
？」



俺は思わず仰け反って床にブリッジしてしまう。しかも勢い余って鼻血が一線ドピュッと噴射。

幼女：

「キャハハハハ！ 冗談だよお兄ちゃん！ わたし、お兄ちゃんの心が読めるんだもん。すぐにえっちなことソーゾーしちゃうけど本当に手を出せるほど勇気ないもんね？」

アルト：

「ぐっ……汚いなさすが幼女汚い」

俺が鼻血を拭って立ち上がると、幼女もポフツとファンシーな効果音を出してベッドから降りた。

幼女：

「そろそろ本題に入るよ、お兄ちゃん。

さっき説明した通り、わたしはダークファルスの存在から作られた少女……言わば第二のダークファルスなの」

アルト：

「ダークファルスって、なんか封印されちゃったあれだろ？ 千年に一度しか現われない存在で、SEEDの親玉みたいなヤツ。

大いなる悪意がどうちゃらって」

幼女：

「うん、そんなところ。今、世界に深刻な悪影響が発生しているの」

アルト：

「悪影響？」

幼女：

「ナギサと一緒に戦ったとき見たでしょ？」

普通では考えられない数のバグ・デッガの大群」

アルト：

「ああ、あれってストーリーに関係してたのか。冗談抜きでレベル200の俺の見せ場だけかと思ってたぞ」

幼女：

「予定変更したの。というより、これ後付け設定だから！」

アルト：

「ふーん、もしかしてそこらへんって気にしちゃうの？」

幼女：

「ダメ絶対！世界の核心に触れると物語（と作者）の終焉が訪れちゃう！」

アルト：

「そうか、そりやまずいな。じゃ、話を戻そう。で、

幼女は第二のダークファルスなんだな？ それってどういうこと？ コイツって同時に何体も出現するわけ？」

幼女：

「そこが問題なの！ 数ヶ月前から、特定の超常現象が引き起こされて

同じ時間軸に存在するグーラル太陽系の並行世界がリンクしちゃったの。

つまり、一つの世界に同じ要素が幾つも存在するってわけなの」

アルト：

「ほう、それはアレか？ 今はまだ大丈夫的なアレだけど

何かの前触れがあるともう一人のナギサさんが世界に存在しちゃうたり

とかする的なアレのか？」

幼女：

「うん、そうだけど……お兄ちゃん今、一人増えたら

『じゃ、片方は俺がもらって行きますね^^』とか考えたでしょ

！」

アルト：

「すいませんでした！ でも、あれだよな。そういうのって、何度も起きちゃうと、世界が消滅するとかって良くある映画だよな」

幼女：

「そうそう。なわけ、ひっじょおにまずいの！

だから！ これからはお兄ちゃんと二人で、世界の問題を解決する為に、わたしが現われたの！」

幼女は身振り手振りで、悲惨な光景を説明した。それは、さながら模型で戦争映画を演出する子供のようだった。子供じゃなかった幼女だった。

アルト：

「ああ、なるほどな。だから俺に力をくれるとか言ってたわけか。で、何で俺なんだ？ 俺じゃないとダメな理由が分からないんだが……ハッ、もしや！」

幼女：

「そっだよ、お兄ちゃん。お兄ちゃんがとびつきりエロいからわたしはお兄ちゃんを選んだんだよ。……って、全然違うもん！心を讀ませて誘導するお兄ちゃん頭いいね！」

アルト：

「あっはっは、そうだろう。お兄ちゃんは秀才なのだ。で、何でなんだぜ？」

幼女：

「うん、まずは手順を踏んで世界の理を説明するね。今のグーラル太陽系が絶望的な危機に瀕しているのは、この世界に存在するフォトンの許容量が問題なの」

アルト：

「フォトンの許容量？ 一定以上世界にフォトンが溜まるとまずいって言うことか？」

幼女：

「そう、世界の物事は全てフォトンが総括して、管理している。  
で、  
最近色んなことがあったでしょ？ イルミナス事件やマガハラ騒  
動とか。  
世界に無数に存在するはずのフォトンがバランスを崩し始めてい  
るの」

アルト：

「ふ〜ん……（鼻くそ圧縮中）」

幼女：

「そこで、そのフォトンの還元をすることが出来る特殊体質なのが  
お兄ちゃんなの！ どういうわけか知らないけど、お兄ちゃんの  
体は

大いなる光の意思の欠片を受け継いでいるから……」

アルト：

「でも、おかしいよな」

幼女：

「えっ？ どういうことお兄ちゃん？」

アルト：

「いや、俺が大いなる光だって言うのはレベル200である俺の  
カリスマが当然の判断をした結果のタマブツだから別にいいんだ  
が、

幼女はダークファルスなんだろ？ 悪意の存在そのものがヒトに  
介入して問題ないのか？」

幼女：

「……すごいねお兄ちゃん。どうやら貴方はわたしの考えていた以上の存在かもしれないよ。ご明察の通り、本来ならわたしは大いなる光の存在と相反する者……実際にはお兄ちゃんとわたしが触れ合っているだけで世界は歪むはずなんだよ」

アルト：

「でも、それでもせざるを得ない理由があるって言うんだろ？  
んでもって、俺じゃなきゃ出来ないときたら、俺がやるしかないよな。」

まあ、幼女の頼みだからな。男なら瞬獄殺コースだったが」

幼女：

「うん……やっぱり、お兄ちゃんを頼って良かった。  
これならわたし、お兄ちゃんに全てを委ねてもいい」

俺はまたも鼻血を噴き出した。ダメでしょ幼女。俺に全てを委ねちゃったら俺と幼女の中にある夜のチケット料金がすごい金額になるんだぜ。それに俺は幼女にリードされてみたいしな。

幼女：

「……読んでるからね？」

さすがの幼女も、俺の妄想にはついて行けず頬を紅潮させた。膨れている顔も可愛いな、ちゃんとここまで読んでおけよ？

アルト：

「ふふつ、幼女は素直で可愛いな。俺は幼女の味方だからな。

幼女の望みは叶えてやるさ。ところで、俺に与えられた力って言うのは

具体的にどう行使すればいいんだ？」

幼女：

「……う、うん。えっとね、今この世界の裏側に回った闇のフォトンの

影響力が、世界の理を圧迫しているの。それを解決するには、わたしとか

他の人、SEEDなんかから集めた闇のフォトンをお兄ちゃんの体内に

吸収して、それを願い事という形で具現化すればいいんだよ。ただし、

急激なフォトンの使用は崩壊の要因になるから、一日一回くらいが限度だよ。

それ以上は控えておいてね。約束だよ」

アルト：

「ああ、分かった、俺と幼女の約束だ。その願い事って言うのはどんな願いでも叶えられるのか？」

幼女：

「ううん。使用したフォトンの量とかにもよるけど、最終的にはお兄ちゃんの想像力　世界を変えたいと願う心によって決定するよ。」

だから、お兄ちゃんが叶えたいと思わない事柄や、無茶な要望は通らないから、注意してね」

アルト：

「分かった。じゃあ、今日はまだ使えるってことか？」

幼女：

「うん、わたしの中に蓄積された闇フォトンを消化してね。でも何かそんなに叶えたい願い事があるの？」

アルト：

「ふっ、当然だ。そんな力を手に入れてしまっっては使わざるを得ないだろう？」

幼女：

「お兄ちゃん……」

幼女は俺の姿をまじまじと見つめている。

願い事、か。俺は窓の向こうを眺めて宇宙空間を覗く。



夢は叶わないものだと思っていた。自分は他者に必要とされない存在だと感じていた。

だが、もしこんな俺に願いを叶えるチャンスを与えてくれるのなら。

俺は、この目の前にいる小さな神様に、魂だつて捧げるつもりだ。

大きく息を吸って、俺は幼女と視線を合わせた。

アルト：

「俺の叶えたい願い……俺は」

『俺とナギサさんの』

』

## 第二話？・リトルウイング夜 朝・（前書き）

これから先は、闇のフォトンの反応があるまでリトルウイングのメンバーと騒動ありの依頼をこなしつつ、反応があれば本編に戻る感じになります。

良ければこれからも拝読お願いします。

幼女の名付け親募集、まだやってます！宜しく！

## 第二話？・リトルウィング夜 朝・

アルト：

「俺は」

そこまで口にした時、部屋のベルが鳴り響いた。どうやら来客のようだ。俺はドアを開ける為に、ロックを解除しに行こうとする、が。

ナギサ：

「アルト……開けなくていい。」

そのまま黙って聞いてくれないか？」

アルト：

「ナ、ナギサさん……？」

スピーカー越しに聞こえる少女の声は、間違いなくナギサさんのものだった。しかし、いつもより声のトーンが若干低いような気がする。

ナギサ：

「その、な……あの時のことなんだが……いや、自分でも何を考えているんだって思うんだが、す、少しアルトと、その、話をしたくて……な」

アルト：

「ナギサさん……」

ナギサ：

「ハッキリ言うとな……お前が私のことを好きだと言ってくれたこと、とても嬉しく思っている」

俺は驚き、ごくりと唾を飲み込む。

ナギサ：

「私は昔からずっと戦闘ばかりだったし、自分でも本当につまらない女だって自覚はある。だけど、最近色んな出会いがあつて

色んな経験をして 色んな物事を知った。

勿論アルト、お前のこともな……」

何を言ってるんだナギサさん！ 俺は、洞窟の中で目にしたナギサさんの本当の一面を知っている。貴女がつまらない人間のはずがない！ だって……俺に人を好きになる気持ち教えてくれたのは、ナギサさん、貴女じゃないか……！

俺が困惑していると、続けて彼女の声が聞こえてくる。

ナギサ：

「私は、その……もし、もしもアルトが良ければ……  
お前が私のことを一人の女性として見てくれるのなら、私もお前を  
一人の男性として見ていきたい」

彼女の真つ直ぐな言葉に、俺は何も言うことが出来ず立ち尽くしていた。俺の人生は今まで誰とも女の子と楽しく打ち解けあうことなどなかった。

けど、この瞬間ドア越しに、俺という一人の男の姿を、ナギサさんは見てくれている。大したこともしてやれない、肝心な時に何も出来なかった俺を、好きだと言ってくれている。

もう俺には、そのことだけで十分嬉しかった。自分の目頭から熱いものが込み上げてくるのが分かる。

ナギサ：

「今すぐに答えなくてもいい。けど、いつかアルトの決心がついた

ら、

その時はアルト　お前の気持ちを聞かせて欲しい。  
話はそれだけだ……すまない……」

アルト：

「ナギサさん……ッ！」

俺は咄嗟に手を伸ばしていた。しかし、ナギサさんは俺の意思に反してその場から離れて走り去っていく。靴底を叩く足音だけが俺の耳を震えさせていた。

幼女：

「……追いかけていないの？」

後ろからひょっこり幼女が声をかけてくる。

アルト：

「ああ、いいんだ。それよりも、俺は今ので  
更に決心を固めたんだ」

俺は幼女と視線を合わせた。

アルト：

「俺の願い……」

俺とナギサさんの      この一週間で起きた記憶を、洞窟の中であった

出来事の記憶だけを、抹消してくれ！」

幼女：

「お兄ちゃん……本気なの？」

俺は黙って頷いた。さすがの幼女も心配して俺の様子をうかがってくる。だが、俺は落ち着いて、ゆっくりと今の自分の心境を語り始めた。

アルト：

「俺……ずっと考えてたんだ。どうやったら、ナギサさんに幸せになってもらえるかってさ」

幼女：

「お兄ちゃん……でも、わたしナギサの心を読んだんだよ。ほんのちよっぴりだけど、恋のフォトンが心の中に集まっていた。自分のことを女として見てくれる、明るくて前向きなお兄ちゃんのこと」



好きだったんだよ」

幼女に俺の心は見透かされていた。俺のためらう気持ちが伝わっているのか、幼女は俺の心を撫でるように、優しく慰めてくる。でも……、

アルト：

「でもな……違うんだよ。それじゃ駄目なんだよ」

幼女：

「どうして？ お兄ちゃんもナギサのことが好きなんですよ？ ヒトって男と女の関係だと恋をするものなんじゃないの？」

アルト：

「幼女……よつと」

幼女：

「わっ！ な、何するのお兄ちゃん！？」

俺は幼女を抱きかかえると、窓から映る宇宙空間を見せてやった。幼女の身体は俺が思っていたよりも軽くて、俺は落ちないように幼女の身体をしっかりと支えた。

アルト：

「なあ幼女、この太陽系には数え切れないほど幾つもの星がある。みんなそれぞれに輝いてて、でも交わることはない。」

俺は、この星の数だけ出会いがあると思うんだ。俺と幼女が会ったのも

そんな星霊の導きなのかもしれない」

幼女：

「お兄ちゃんの心が読めないよ……。お兄ちゃんは  
何を考えてるの？」

アルト：

「幼女、俺はわがままなことなのかも知れないけど、  
もう一度ナギサさんとの出会いをやり直したいと思っている。  
何でだか、分かるか？」

幼女：

「分かんないよ……。さっきまであんなに簡単に  
お兄ちゃんの心が読めてたのに。今度は暗闇に包まれているみた  
いに

全然見えなくなっちゃった……」

アルト：

「俺はさ、いくら成り行きだと言っても、あんな形で  
ナギサさんのことを好きになるのは、反則だと思ってるんだ。  
いくら運命にやり直しが効かないものだとしても、俺はもう一度、  
ナギサさんを素直な心で見つめたい。偶然出会って、偶然ケンカ  
して、

偶然 彼女を好きになる。そんな出会いじゃなきゃ運命って言

えないだろ？

俺の勝手だと分かっていても、今度は何の縛りもなく、俺はナギサさんの

心を見つけて、好きになりたい。彼女にも、そうあって欲しいんだ」

幼女；

「何となくけど……お兄ちゃんの心が分かったような気がする」

幼女と俺は、宇宙で輝く星々を眺めた。燦然と輝く小さな光。だけど、俺はいつかこの無数の光の中から、本物の彼女の心を探したいんだ。

幼女：

「願い事、それを叶えるのも念じるのもお兄ちゃんだよ

頭の中でフォトンを集中するイメージを持って、自分の叶えたい願い事を約束するの。ただし、注意してね。ヒトの心と記憶は、世界に流れる

フォトンと強い繋がりを持つてる。二人の中で、それが忘れられない記憶だった

としたら、いつかそれが呼び起こされる可能性もあるから」

アルト：

「分かった。ありがとな、幼女」

俺が笑うと、幼女もにつこりと微笑んでくれた。次はどういう運命になるか分からない。それでも、俺はいつでも真っ直ぐな気持ちで、前に進みたいから

俺の想いは眩い光のフォトンとともに世界を飲み込んだ。

- Now Loading -

洞窟から戻って、久々にぐっすりと安らぐベッドの上で眠ることが出来た。俺はレベル200なのにも関わらず、気さくに幼女へ小さな布団を用意してやると、今度はお兄ちゃんと一緒に布団じやなきや嫌だみたいなわがまを言い始めた。

全く、さすがの俺でも幼女と一緒に寝るとは困ったものだ。まあ、それは良いとして、これからは幼女と俺の冒険が始まりつつもゆったりとした日常でリトルウィングのメンバーと楽しくやってくつもりだ。

だが、問題はそこじゃない。そこじゃないんだ！

アルト：

「ううっ……ぐすん」

幼女：

「お兄ちゃん、まだ泣いてるの？  
いい加減食事中なんだから泣きやもうよ」

俺と幼女は、リトルウィングの喫茶店で一緒にランチをしていた。だが、どうにも俺の涙は止まることを知らない。幼女は、そんな俺と見ながら、旗の立った料理をスプーンで食べていく。

幼女：

「まあ、でも仕方ないよね。あの煩惱全開のお兄ちゃんが  
洞窟でナギサと二人きりになっても、全く手を出せなかったんだ  
もんね」

アルト：

「く、くっそ〜あんなに可愛い女の子前にしておきながら、一人で  
してただけとは……俺のトライデント・クラッシャー（Sグレー  
ドスパア）が  
錆付くぜ……」



クラウチ：

「おいアルトよあ……いくら妹だからって限度ってモンがあるンじゃネエのか？」

ユート：

「兄弟は大切にするんだぞ！」

アルト：

「いや、してねーから……」

俺がみんなと会話をしていると、一人遅れて喫茶店に入ってきた少女の姿があった。その人のことを俺は知っている。勢い余ったまま依頼を受けて、洞窟の中で一週間も遭難して、グツとくるようなシチュエーションなのにも関わらず手を出すことが出来なかった。

その人の名前は

ナギサ：

「おはよう」

アルト：

「お、おはようございます……」

今日も、いつものように綺麗な黒髪をした少女は、俺の前を通り過ぎていった。ああ、ナギサさん、手は出せなかったけども、やっぱり可愛いなあ。

いつか、あんな可愛い女の子と恋人になりたいぜ　　！

時は流れていく、俺の人生は、まだ始まったばかりなのかも知れない。



### 第三話？・リトルウィング ショッピングモール・

俺の名前はアルト。アルト＝シユバイツァーだ。リトルウィングの傭兵として入社して、早くも10日が経過した。超絶イケメン風味の快男児とは、俺のことだな。

ひょんなことからダークファルスの生まれ変わりだとか言う変な幼女が俺の元にやって来て、俺の力が無いと世界が崩壊するとか物騒なことを言い出してきた。全く、おかしなもんだよな。いくら幼女の頼みとは言え、まさかレベル200の俺が世界の平和を護るだなんて、やれやれ、世も末ってヤツなのかね。

ま、そんなことは正直、俺にとっちゃどうでも良い話。敵が来たら迎え撃てばいいし、運命なんて自分の手で切り開くものさ。誰のモンでもない、俺自身の為にな。今の俺には、それよりもっと大事なコトがあるんだ。

世界平和より大事なモノ？ そんなもんあるのかって？

馬鹿言つなよ、たとえ明日世界が滅亡したり、いつも通ってたお気に入り料理屋が閉店したり、意味もなくナギサさんが俺の目の前で脱ぎ出したりしたって……いや、最後のは重要だな。

とにかく、回りの事なんて俺には関係ないの！ 一日三食の食事

と、寢床さえありゃあ俺はいいんだから！

じゃ、何が目的かって？　へっ、待ってました！　そりゃ勿論、世界中の女の子とイチヤイチャして、グラール太陽系に俺だけのハーレムを作る！　これっきゃないっしょ！

ま、安心しろよ。ちゃんと幼女の頼みも聞いてやつからよ。それじゃ行くぜ！

- Now Loading -

俺とリトルウィングのメンバーは、クラッド6コロニー内部にあるショッピングモールへとやってきていた。丁度、今日は依頼が入ってこなかったもので、みんなでショッピングへ行くのに都合の良い日だったからだ。

が、それはいい。それはいいが。

アルト

「どうして、俺が荷物持ちなんだ！」

エミリア

「だってあんた、男でしょ？」

ナギサ

「それに、力持ちなんだろう？」

アルト

「ぐっ、そりゃ、そうだけだよ……」

しかし、この荷物の量は多すぎるんじゃないの？ 明らかに俺の両手にぶら下がってる20個くらいの買い物袋見てこれ以上持てなさそうだと分かるだろ。

アルト

「少しはユートにも持たせ……」

ユート

「し、師匠……ッ！」

既にユートの両手には40や50はあるだろう買物袋の山により、顔すら見えなくなっていた。明らかに女性陣の反応は俺よりもユートに傾いている。

アルト

「ええい、邪魔だっ！ よこせっ！ 俺が持つー！」

幼女

「さっすがお兄ちゃんだね。頼りになるう〜」

幼女は俺の周りをくるくると飛びながら、面白そうに俺の様子を見ていた。

アルト

「うるさいっ！ 大体、何で俺が幼女の買い物に付き合わなけりやならんのだー！」

エミリア

「アニキでしょ！ 幼女ちゃん、一着しか服持ってないし靴だって無いんだから！ 素足の妹を見て可哀想だと思わないの！？」

アルト

「いや、ふざけんな！ 良く見る、今コイツ空飛んでんだぞ！？ 足だって飾りみたいな形して、何が靴……」

見直すと、幼女は地面をペタペタと歩いていた。数メートルしか

歩いていないはずなのに、幼女の足裏は何故か真っ黒に汚れている。

幼女

「お兄ちゃんひどい……でもいいの。わたし、お兄ちゃんのこと信頼してるから……」

集まる視線。どう考えても、俺のせいってわけね。

アルト

「だあゝもう！ 分かったよ！  
とっとと買い物済ませて帰ろうぜ！！」

エミリア

「買い物が終わったらみんなでボウリングでも行こうよ！  
それ終わったら外食してかえろ！」

ユート

「おう！ プリン食べ放題でいいぞ！」

ナギサ

「フッ……私の腕前はすごいぞ。ピン一つ倒さずに後ろの穴に通すことが出来るのだ」

エミリア

「それ、ガーターじゃない……？」

アルト

「ガーターでピンを後ろの穴に通す腕前だと……？」

それって女王様の                    じゃ……」

などと談笑を繰り返していると、幼女が服の裾を引っ張ってきた。

アルト

「どうした幼女、聖水タイムか？」

幼女

「違うもん。気をつけて、お兄ちゃん。」

ショッピングモールのどこかで、急激に闇のフォトンの影響力が高まつて……何かの前触れだよ」

アルト

「ほう……買い物ばかりで飽き飽きしていたところだ。」

ストレス解消代わりにはなりそうだな。具体的にはどういう形で現われるんだ？」

幼女

「うん、今回の異変はレベル1くらいの危険度だと思ってくれているよ。」

レベル1の被害は闇のフォトンが無機物に吸収されて発動するケースだね」

アルト

「つまり、置物やパンツが襲ってくるようなポルターガイストに近い

現象が闇のフォトンの影響で発生するということか」

幼女

「うん、それと今日の願い事、まだ一つだけ叶えられるから大事に使ってね」

アルト

「ああ、任せておけ」

とにかく、闇のフォトンが発動するまでは様子見ということらしい。俺と皆は予定通り幼女の服やらを買いに店へと向かった。

第三話？・ショッピングモール 下着売り場・（前書き）

どっついうシチュエーションだよ！



### 第三話？ - ショッピングモール 下着売り場 -

幼女

「ねえ、見てみてお兄ちゃん！  
どう？ これ似合う？」

アルト

「ほう、派手だな。しかし幼女にブーツは似合万のでは無いか？  
というか、その軟体動物的な足で何でブーツがジャストフィット  
するのだ」

俺が幼女の履いているブーツを引つpegすと、次に用意していた  
サンダルを手渡す。ラッピーの絵柄がついた赤いサンダルだ。

アルト

「ほら。幼女にはこっちの方が似合う。ブーツが履けるんなら  
サンダルも履けるだろ」

幼女は新しいサンダルを着けると、ひとしきり靴をかかとでトン  
トンと叩く。すると、気に入ってくれたのか一回転してはしゃぎ始  
めた。まあ、とにかくこれで俺が悪者扱いされることは無くなった  
な。

アルト

「しかし、ユートや、それにエミリア、ナギサさんまで……  
一体どこにいったんだ？」

幼女

「あつ、見つけた！ あつちにいるよ！」

見ると、何やらユートは少女二人に女物の衣装を何種類も試着させられていた。ドレスを着て放心しているユートの勇姿が視界に映る。我が弟子ながら、不憫というか、羨ましいというか……。

ユート

「た、助けてくれ師匠……ッ！」

エミリア

「動いちゃだめ、ユート！」

「うんうん、我ながら筋の良いコーディネートだっ」

ナギサ

「うむ……中々に似合っているぞ」

アルト

「ほお、ユートの社交界デビューも近そうだな  
せつかなら下着も女物にすればいいんじゃないか？」

エミリア

「下着……？　そっだ、下着だ……」

ユート

「あ、あんまりだ……師匠ッ」

アルト

「まあそっしょげな、後で俺がプリン美味しい店を教えてやる  
う。」

「……あれ？」

振り返ると、何故か周囲からエミリアの姿だけが無くなっていた。  
一体、どこへ行ったのか。そうか、しまった……今日の聖水タイム  
は幼女ではなくエミリア女史の方であったか。

失敗に舌打ちしていると、幼女が俺の裾を引っ張ってくる。

幼女

「お兄ちゃん。エミリアと一緒にいって行ってあげて」

アルト

「何だと……良いのか、俺がそんなところまで行ってしまっ」

幼女

「うん。何かあるかもしれないから」

アルト

「よし分かった。彼女の源泉は俺が汲み取る」

幼女

「お兄ちゃん何も分かってないよ……」

俺は幼女の意味に従い、エミリアの秘密の庭を暴くため後を追った。しかし早いな。ついさっきまで近くに居たと思ったのに、もう姿が見えない。一体どこに行ったと言うんだ。

婦人服コーナーを抜けて、俺は女性モノの下着売り場に来ていた。純白から花柄まで色とりどりに揃えられたブラジャーやパンツの宝庫に、自分の居場所を見失ってしまう。むしろ、今日からここが俺の居場所でも良い。

とりあえず、周囲を通り過ぎていくヒトに奇異の目で見られながらも、マネキンに試着されたブラジャーを力任せにいたぶってみる。気のせいかマネキンが泣いているように見えた。

アルト

「違う……俺は何をやっているんだ。エミリアを探しに来たんじゃないのか!」

気を確かに持って、今度こそエミリアを探しに行く。全く、近場のトイレで済ませると、肝心のシーンが見られなくなる（？）じゃないか。そんなことをぶつぶつ考えながら何故か俺は試着室のレースに手を掛けて、それをシャツと開いていた。その時だ。

???

「きゃんっ！」

アルト

「おわっ、何だ!？」

俺は驚いて正面を見上げると、そこにはピンク色のブラジャーを試着していた金髪の少女がいた。いつもの赤い服にトレードマークの羽付きヘッドフォンが無かったが、間違いないそれはエミリアだった。

セットものの下着を試着していたようで上着どころかスカートも、そつと床に折りたたまれ、もう既に彼女の裸体を包むものは、薄い生地で出来たブラジャーとパンツのみとなっていた。

エミリア

「こらっ、馬鹿ッ！ 恥ずかしいから早く閉めて!」

アルト

「う、す、すまん！　あまりにレアな光景だったので、つい！」

俺は咄嗟にレースを戻そうと手にかかる。しかし、その瞬間、俺の心の中で研ぎ澄まされた、ぴくりと痛む一線が駆け巡った。

アルト

（ぐっ……な、何だ……もしかして、闇のフォトンの予兆か……？）

そんなことを言っていたのも束の間だった。突然、俺の立っていた地面が激しく揺れ始め、店に陳列されていた什器がガシャンガシャンと床に倒れる。次第に地響きは大きくなっていき、周囲のヒト達も悲鳴を上げて逃げ出し始めていた。

アルト

「くそっ、油断していた……！　敵は、敵はどこだ！？」

エミリア

「アルトッ、あれを見て！」

レースで身を隠したエミリアが指をさす方向に沿って、俺は上を向いた。

アルト

「何イ……これが、敵……!？」

そこには、空中に浮かぶおびただしい数のパンツの群れが存在していた。

第三話？ - 下着売り場 試着室 - (前書き)

なあにこれえ。



### 第三話？ - 下着売り場 試着室 -

アルト

「クソッ、何だこいつら……ッ！」

ふわふわと宙を舞うパンツの群れは、微弱な闇のフォトンを形成して、こちらを威嚇していた。俺が警戒を強めようとしていた矢先、先手を打ってパンツが俺に降り注いできた！

多重に襲い来るパンツの群れ。いくら不可抗力とは言え、半端にパンツを切り裂いてしまったら傷物になって弁償させられる可能性がある。こう言う時に顔を出す自分の貧乏性を恨みつつも、俺は近くに落ちていた銀色の長い棒を拾う。

アルト

「ええい、こなくそお！」

乱暴に振り回した銀の棒は、パンツをことごとく叩き落す。だが、それ以上に数の勝るパンツは、次々に襲いかかってくる。油断して体勢を崩してしまった俺は、思いつきエミリアのいる試着室の方へへと倒れ込んでしまった。

だが、壁にぶつからず何かしらのクッションが俺の反動を軽減した。効果がいまひとつなのは愛嬌として、これは間違いなくエミリアの胸だった。そう感じる感触が確かにあった。

エミリア

「ぎゃあああ！　こらあ、どこ触ってんのよ！！」

アルト

「ち、違うんだ。足を崩してしまっ  
て！  
今離すから……！！！」

エミリア

「~~~~ツ！！　し、しし尻を揉んでどうするのさ！！  
も~~~~馬鹿えっちスケベ変態！！！」

アルト

「あだっあだだだっ！　だ、だから不可抗力だってば……ツ！  
おはあ……！！！」

試着室の外側から受ける衝撃によって、俺とエミリアは盛大に足を滑らせてしまう。何とか、エミリアに被害が出ないよう彼女の身体を受け止めて、俺は背中から倒れた……までは良かったのだが、  
あるうことか俺とエミリアの位置が微妙にずれ始める。

最終的な位置づけとしては、俺はエミリアの股の間に顔面を挟まれるという結果で落ち着いた。

エミリア

「ぎいいいやああー！！ アルトおー！！！」

ふざけてないで、早く離れなさいよお！」

アルト

「ふっ、ふざけてなんかねーよ！ つーか、エミリア、股で挟むな！  
気持ち良いから早く離せっ！ 呼吸が出来なくて辛い……ッ！」

もちもちとした感触のエミリア特製三角地帯の柔らかく包みでノックダウン寸前になっていると、俺の心の中に幼女の声が届いてきた。

幼女

「お兄ちゃん聞こえる？ ……って、何でお兄ちゃんの  
心の中はそんなに興奮したフォトンで満たされているの？」

アルト

「い、いやっ、プロレスでこういう技かけられるなら、俺いつでも  
死んでいいなとか、そういうんじゃないかな……！」

幼女

「……？ お兄ちゃん、こっちはナギサとユートが客や店員さんの

非難を

させてるから、そっちはお兄ちゃん達でお願い！』

アルト

『ああ、分かった……ッ！　だが、具体的にはどうすりゃ解決するんだ？

願い事っつーのは万能じゃねえんだろ？』

幼女

『お兄ちゃんが直接、闇のフォトンの影響力を持つモノに対してそれを解決するための願いを伝えないと、解決しないよ！

だけど、今回は異変レベル1だし、物相手ならお兄ちゃんの武器に願い事を付与して、物理的に破壊することが出来るよ』

アルト

『そうか……しかし、異変ってのはたくさん出現するモンなのか？  
あのパンツの群れを全部叩き落すのは骨だぞ』

幼女

『うっん、今回の異変で発言している闇のフォトンは一つだけ。  
つまりどこかに、それを操っている本体がいるはず。それを見つけてだして

倒せば、異変は収まるはずだよ』

幼女との会話を終えた俺は、早速闇のフォトンの中心を探そうと首を動かす。が、よく考えると未だにエミリアの足で挟まれて動けない俺の頭がそこにあった。いやあ、ピンクの下着も中々に心地よいものだなあ、スーハースーハー！。

エミリア

「いい加減に……離してっ！」

アルト

「ぐほおあっ！」

などとやっている、案の定エミリアに殴られた。何とかエミリアの三角地帯から脱出することはできたものの、今もなお外側からパンツ郡の激しい攻撃に、俺とエミリアは動けないでいた。

しかし、何故パンツだったのだろうか。闇のフォトンが具現化するのなら、もっと優秀な素体があったはずだ。それをしないとなると、異変というのが、そもそも『闇のフォトンの影響を受けやすいもの』にしか、憑依しないのか……？

だとしたら、パンツである理由がどこにあるはずだ。

アルト

「エミリアッ！ お前、パンツについて何か知っていないか？」

エミリア

「……何その発言。あからさまにイヤラシイこと考えてませんか？」

アルト

「いやっ、そんなことは無いッ！ 恐らく、パンツで異変が起こったのも

パンツが由来する理由があるはずなんだっ！」

エミリア

「……ッ！ も、もしかして……！」

アルト

「何だ、何か知って」

突如、俺の世界を光が覆った。眩しさを腕で隠すと、視界の先には黄金色に輝くパンツが、エミリアの股にある三角地帯から放たれていた。

第三話？ - 試着室 下着売り場 - (前書き)

もはや言葉は必要ないのかもしれない。自分の中でくすぶる想いが、  
本当の意味で自分自身の生きる道標を示してくれるのだから。

……意味分らん(笑)

### 第三話？ - 試着室 下着売り場 -

アルト

「こ、これは……ッ！」

閃光が終息を向かえた頃、俺は腕を降ろしてその真実を見た。エミリアの三角地帯から放たれる黄金の輝き、それは試着していたピンク下着の更に奥地、エミリアが指先でめくった部分に見える、縞柄のパンツであつた。

しまパン。卓越した賢者でさえもその深層意識を翻弄され、巧みな技術とデザインを施されたパンツの虜にされてしまうほど、恐ろしく膨大な魔力を蓄えた神器の一種である。

太陽系に進出して以降、発展を遂げたものの一つだが、短い年数の中でも一際に崇高な賢者達の手により崇められ、絶えず進化し続けてきたのだ。それが今、エミリアという少女の三角地帯の中心に奉納されている。

だが……愛しき者の手で大切にされてきた縞々パンツが何故、闇のフォトンの影響を持つに至ったのだろうか。俺は動揺を抑えてエミリアに質疑した。



アルト

「エ、エミリア……その、し、しししまままパンツは、いったあー！ー！？」

エミリア

「うるさいっ！　しまパンしまパン言うなあー！！」

俺がエミリアに殴られて悶絶していると、縞パンは再びピンクパンツの領域へと推し戻されていった。

アルト

「エミリア……もしかしてお前ッ、縞パンが嫌いなのか……！？」

エミリア

「う~~~~ッ！　だ、だって……こんなの全然可愛く無いし、履いてても

馬鹿にされるだけだもん……！」

アルト

「そ、そんなことは無い！　縞パンはいいぞ！　そのしましまで虜に出来る男がいるのも事実なんだぞッ！」

エミリア

「信じてない！　信じてないモンッ！　だってみんな、結局は同じことしかしないんだよ……！」

アルト

「同じこと……?」

エミリア

「そうだよッ！ あたしが気に入って履いてる縞パンなのに、リトルウィングにやって来たヤツはいつだってそうだった……みんな、あの坂道を利用してカメラのアングルを変えて……一日一回はスカートの中を覗いてくるんだッ！ それでやっと分かったの……。みんな、あたしのことに興味があるんじゃないかって縞パンにしか目が無いんだって……」

アルト

「エ、エミリア……さん……ッ！」

エミリア

「だから、あたしは縞パンを捨てようとした……。次に入社して来たリトルウィングの新人が、いつでも覗きに來られるように、もっと綺麗な

パンツを履いて待ち構えようって……！」

俺とエミリアの間に何とも言えない沈黙が訪れた。むしろ、何言ってるんだお前？ と疑問をあらわにしたかったが、変なシリアス路線に走られてしまったので、硬直せざるを得なかった。

しかし、エミリアはそんなことを考えていたのか。なるほど、それでエミリアの意思に反して、縞パンは闇のフォトンの影響を受け

たのか。

アルト

「……！ エミリア、危ないッ！」

エミリア

「えっ、こら、アルトお！」

振り返ると、パンツが一斉に襲い掛かってくるのが見えた。謝りながらもエミリアを抱きかかえた俺は試着室を飛び出し、店の中を逃げ回る。

エミリア

「イヤああああ！ 離してえ！！ こんな格好で外を連れ回されるなんて

恥ずかしくて死んじゃいそうだよぉ〜！！！」

アルト

「痛い、痛たたたた！！ 分かった、俺の服を貸してやるから少し落ち着いてくれ！ ほらっ！」

俺は上着を脱いで、エミリアにかけてやった。

エミリア

「くんくん……汗臭くは無い、か。でもちよつと生暖かい……」

アルト

「今さっきまで着てたんだからしょうがないだろ！ 嫌ならこのまま下着姿で駆け回りたいのか！？」

エミリア

「うっっ分かったわよ！」

追いかけてくるパンツ群は、器用に近くにあつた置物やマネキンやらを投げつけてくる。それを回避しつつ、どこか安全な場所を探す。

すると、俺の腕に納まっていたエミリアが、小さな声で言葉を綴る。

エミリア

「……どうせあんたも、縞パンにしか興味無いんでしょ。

男はみんなそうだよ。紳士みたいな顔して、自分が満足したいだけなんだ」

アルト

「エミリア、俺の話を聞いてくれ」

エミリア

「……何よ」

アルト

「確かに、俺は縞パンも好きだ。けどな、縞パンを履きこなせるのだって

一つの才能なんじゃないかと、俺は思っている。だってそうだろう？

縞パンはお前だったからお前を選んだし、お前だって縞パンに惹かれて

縞パンを選んだんだろ？　なら、それで良いじゃないか」

エミリアは口籠っていた。自分自身でも、縞パンの想いに答えられるだけの自信が無いのだろう。今まで長い間に一緒に過ごしてきた縞パンに、どんな心を伝えれば良いのか迷っている。

アルト

「……よし、分かった。俺が全てを終わらせてやるよ」

エミリア

「……えっ？」

俺は決心した。エミリアに本物の縞パンの心を伝える為にも、俺はやらなくちゃいけない。

そうと決まれば善は急げだ。俺は必死になって、避難場所を探し始めた。

第三話？ - 下着売り場 ショッピングモール - (前書き)

縞パンがゲシュタルト崩壊(、(エ)、)

第三話終了です。さーて次回は何をやるかな！

### 第三話？ - 下着売り場 ショッピングモール -

エミリア

「アルト、何か秘策があるの……ッ？」

俺はエミリアを抱えて、まずは隠れられるような場所を探した。試着室は狭すぎて辛いし、何より俺の何かが辛いし、コイツ痩せてる割には太股の周りが随分ムチムチっとしていて……。

俺は勢い余って、太股を指先でふにんふにんと、

エミリア

「するな、バカッ!!」

アルト

「あだっ!!」

変な漫才をしていると、正面からもパンツ群が現われる。どうやら挟み撃ちということらしい。さて、どうする俺……。



ナギサ

「アルト、こっちだッ!」

アルト

「ナギサさんっ!」

俺は事態を收拾させて駆けつけてくれたナギサさんに合図されて、  
そっちの方向に逃げる。ユートと幼女も、その後ろをついていた。  
数を増すパンツの群れからひたすらに逃げる。

アルト

「ナギサさん、みんな……すまない助かる!」

ナギサ

「フッ……仲間は生涯大事にするものらしいからな。  
そ、それよりもだな……ゴホン」

ユート

「ゴホン」

幼女

「ごほんっ」

アルト

「……?」

エミリア

「……ゴホン」

みんなの視線がどこに向かっているのかと俺も目先を変えると、そこには下着姿で服だけ覆った状態で、かつ柔肌をがちりと俺の腕で握られて懷で紅潮しているエミリアさんセブンティーンの光景が。

アルト

「……………あ、い、いや、違うんだ、これはだな……………！」

ナギサ

「フッ、分かっているさ、貴様も男だ。どうやら、ついに歯止めが効かなくなったようだな。どうせ何かの手違いとか調子の良いことを言って試着室に侵入してしまったあげく、エミリアの身体を好き放題に弄んだのであるう？」

幼女

「さいてー」

ユート

「サイテー」

アルト

「なっ、お、おかしいだろ！ あれは、たまたま偶然で……………」

ナギサ

「ほう、やはり事実だったのか。手がつけれんな？  
怖くなかったか、エミリア」

エミリア

「……すごい怖かった」

アルト

「ちょ、おまつ……！」

幼女

「色欲魔」

ユート

「……シ、シキヨクマー？」

アルト

「おいっ！ 幼女もさっきからユートに変なことを  
教えてるんじゃない！！ 俺はただ、エミリアを助けようとして  
……」

ナギサ

「助けようとして、色々触っちゃったんだな？」

アルト

「そうそう……って、違うわ……！」

幼女

「うわー……さすが変態」

ユート

「そうだヘンタイだ。ヘンタイヘンタイ」

アルト

「だあああああ！！」

やめろおおおおおう！！！！」

雄たけびを上げる俺。た、確かにちよつと触っちゃったし気持ちよかつたりしちゃったりしたけど、この仕打ちはあるまりにもひどいんじゃないですか！ ああでも、あの三角地帯の思い出は一生忘れることは無いだろうな……。

エミリア

「こらっ！ またなんかイヤラシイ想像してるな？」

提案があるんなら早く言いなさいよっ！ あたしだって、いつまでも

こんな格好で、は、恥ずかしいんだからねっ！」

そうだった案があるんだった。雑念しすぎて、すっかり失念していた。

アルト

「そうだ……闇のフォトンの根源になっているのは、エミリアの履いている縞パンだったんだ。そして、その影響を絶つ方法は……一つしかない！」

幼女

「……そっか、しまパンから見えるのは嫉妬の炎……  
エミリアに棄てられそうになったことで、防衛手段が働いてしまったんだね」

アルト

「そういうことだ。大事にされていたはずの縞パンは突然自分が棄てられそうになった。だから、闇のフォトンの力を借りてでも、それを止めようとしていたんだ」

エミリア

「そっ、だったんだ……」

エミリアは自分の下半身を覗きこんでいる。そこには、確かに彼女が長年時を重ねてきた大事なパートナーの姿があるんだろう。いきなり棄てられることになったら、俺だって嫌だ。

アルト

「ちよつと意地悪な判断かも知れないが、縞パンを闇のフォトンから解放するには、エミリアの愛情の心が縞パンに伝わらなきゃいけない。」

それを明確な形で伝えるには、今エミリアが試着しているピンク

の下着を

破壊すればいいんだ！　そうすることで、縞パンは納得してくれるはずだ」

エミリア

「……そっか、あたしが嫌がったことで、この子はそんな風に悲しさを

感じていたんだ。ごめんね、気づいて上げられなくて、今までずっと大事に

してきたのに、あたしって自分勝手だよね……！」

俺はエミリアに向かって優しく微笑んだ。いたいけな彼女の瞳が濡れているのが分かる。

アルト

「エミリアがそう想っているなら、その心は間違いなく縞パンに伝わっているさ。さあ、そうと決まったら、これで全てを終わらせよう。」

ナギサさん、ユート、幼女！　頼む、時間を稼いでくれ！」

俺はエミリアを降ろした。しゅるりと衣擦れの音が走り、桃色の淡い生地だけが一人の少女を包み込んでいた。華奢な身体は未だに未熟な部分を残しているが、確かに女性の香りがした。綺麗で白い肌、無垢な瞳、真っ直ぐな想い、それら全てを内包して、エミリア

という少女はそこにいるのだ。

素肌を見られて緊張しているのか、エミリアの頬は今までに無いくらい真っ赤に染まり、もじもじと太股を擦り合わせている。指先も恥ずかしさを散らすうとしているのか、両手の指を絡ませつつ、僅かな吐息が肩を上下させている。

俺はこれから、彼女の一部分を切らなきゃいけない。

繊細な心だけでは生きてはいけない、だが、それ以上に思い出というものは、人の心により強く残っていくもの。縞パンが彼女と必要としているということは、まだそれは彼女にとって無くてはならない大切な要素なのだろう。

だから俺は、彼女を繋ぎ合わせる思い出を、心のフォトンで繋ぎたい。夢と夢と繋ぐ力、それこそがフォトンの本当の力なのだと信じて。

俺はナノトランサーからセイバーを取り出した。彼女の肌を傷つけないよう、一瞬でピンクの下着だけを断ち切れればいい。

セイバーも俺の気持ちに呼応するかのようになり、ブウンブウンと輝きを増していく。

アルト

「エミリア。俺は、縞パンもエミリアの一部だと思ってる。

俺はエミリアのこと好意的に思うし、縞パンがあったからこそエミリアの新しい一面を見られたんだと思う」

エミリア

「アルト……」

アルト

「行くぞエミリア、次にお前が目を開いたときには生まれ変わった新しい自分があるんだ。そのことに気づく人間だけが

人生に潤いをもたらし続けるんだ」

エミリア

「アルト……お願い」

アルト

「はああああ……フォトン・リンク粒子回路・接続！」

セイバーの外面を白い光が覆った。全てを包み込むような淡くて優しい光の奔流。

それを、俺はエミリアに向けて放った。



次の瞬間。

セイバーは少女の下着を切り裂いていた。

- N o w   L o a d i n g -

アルト

「おい、ユート、幼女！ お前ら食いすぎだぞ！」

ユート

「だってプリンだぞプリン！！ 食べ放題なのに食べないなんて損じゃないか師匠！」

アルト

「食べ放題じゃねえ！ 俺のおごりだつつの！！」

ああ…… ロクな依頼こなして無かったからメセタが空っぽだよ……」

幼女

「お兄ちゃんも食べなよ。プリンだけじゃなくて他のデザートも結構イケるよ。はい、ナギサ、あ〜ん」

ナギサ

「……あむっ……もぐもぐ。フム、成る程、確かにこれは美味しい。今度買い物に来た時も是非寄って行こう。勿論、アルトのおごりでな」

アルト

「ま、まじっすか……」

俺はゾンビのように呆然と歩いて、店内の床に仰向けに倒れる。

ああ、シャン・デ・リヤの光が余りにも眩しすぎるぜ……ん？

気づけば、俺の視界は埋まっていた。何色かって？ そりゃあ、あれだ。何て言うか、今まで見たことの無い光景というか、ついさつきも似たような光景があったような……。

エミリア

「アルト、どうして床で寝てるの？」

アルト

「あ、いや……す、すまん。見るつもり無かったんだが、その、中身、見てしまった……悪い」

今度は嘘じゃない。本当に見るつもりが無かったんだ。けれど、エミリアはくすつと笑って口にした。

エミリア

「そのさ……ありがとねアルト」

アルト

「えっ？」

エミリア

「なんか、今までと違う新しい考え方が出来るようになったんだ。それに、縞パンを履いてるあたしのことを好きだって言ってくれたのは

アルトが初めてだしね……だから」

アルト

「だから……？」

エミリア

「今度から、見たくなったらいつでも見せてあげるね。は、恥ずかしいけど、新人にはサービスしないとね………！」

アルト

「な、何と言つことでしょう………！」

さすがにレベル200の俺でも、これは恥ずかしすぎるでしょう。

俺は耳まで赤くしながら、上を仰いだ。

俺の瞳に映った先には確かに、エミリアという少女の履いている  
縞パンが。

俺の世界の色を変えていた。

#### 第四話？・リトルウィング・昼・（前書き）

8月18日発売のPSP021の設定資料集が待ち遠しいぜ。エミリアとナギサが描かれた描き下ろしミニポスター付きだ。しっかしナギサさんのおっぱいバインバイン。エミリアのフトモモも負けてないぜ。

幼女の名付け親募集中、どんどん感想残してね！

#### 第四話？ - リトルウィング・昼 -

アルト

「チエルシーさん、そんな…… よしてくれ。俺には心に決めたヒトがいるんだよ。だから……」

チエルシー

「ウフフツ、ソナノ、私達の間柄には関係ナイネー。さあ、もつと

お姉さんに心を委ねるのヨー」

アルト

「あつ、だ、ダメだ…… チエルシーさん…… うあああ！！」

エミリア

「…… 何やってるの」

突然、目の前にやって来たエミリアに振り向く俺とチエルシーさん。ちなみに、俺の隣に居るチエルシーさんとはリトルウィングの受付嬢で、ウェーブのかかった長い緑髪と、寛容な性格を映し出すような美しい容姿に派手なドレスの似合う女性だ。カタコトの表現で喋るヒトで、上司であるクラウチのオッサンのことをシャツチヨサンと呼んでいる。

チエルシー

「ドシタノ、エミリア？ あつ、分かったヨー！ ワタシが新人のシャッチョサン独り占めしてるカラ、嫉妬してるのネー」

エミリア

「うっ、ち、違うもん！ だって、あたしはアルトが迷惑してないかなって

心配になっただけだし、その……！」

アルト

「ほお……レベル200の俺でも関心することがあるなと思ったらエミリア女史は俺とデートしに来ていたのか……これは失礼おげぶっ！？」

エミリア

「調子に乗るな……！」

俺の顔面に綺麗な拳の跡が形成される。エミリアの顔面パンチも、最近では中々に心地よくなってきた感じだ。これ以上癖になると別の境地が開けそうなので困りものだが。

エミリア

「って言うか……アルトとチエルシーって、そんな関係だったんだ……  
てつきり、あたしはさ……もしもし」

アルト

「そんな関係？ 何を言ってるんだエミリアは」

エミリア

「えっ……だ、だって、心に決めたヒトがどうのって……」

チエルシー

「エミリア、もっと奥の方を覗いてヨ」

促されるままエミリアは遠くを見た。まあ、別にそんなに驚いてもらわなくてもいいんだが……。目の前に巨大なスクリーンモニターに表示される2D対戦型格闘ゲームの画面があるだけなんだけ。というか、もっと奥の方を覗いてという言葉に意味深な何かを言及したい俺のマイハート。

チエルシー

「アルト、もう怒ったヨ！ ワタシを本気にさせるとどうなるか  
思い知らせてアゲル！！」

アルト

「さすがチエルシーさん、その熱意には関心しますが、俺の使う  
ガールに勝てますか？ またソニック◯ムで葬ってあげますよ」

チエルシー

「ソナナニ甘く見てると、足元すくわれるヨー。ワタシが本気を出  
した

○ガに勝てるハズが無いノヨ！ 塩クレテヤル！」



俺とチエルシーさんはカウントダウンの合図と同時に激しい攻防を始めた。さすがチエルシーさん……既に俺の攻撃パターンは見切っているというわけか……読みが深くて手ごわいぜ。ガードの硬直時間を見誤ると一気に持っていかれそうだ。

ゲームに夢中になっていると、エミリアが突然叫び出した。

エミリア

「ちがぁあう！ もぉ〜二人とも何で遊んでるのさ！ もっと社員として

しっかり働こうよ！」

アルト

「そんなこと……ッ！ 言われても 危ねえ！ 依頼が入ってクッ！

来ないんじゃないだろチッ！」

チエルシー

「ソウヨー。エミリアもさっきまでスヤスヤ眠っていたじゃないノ！。

寝る子は育つって言うケドモ、お昼まで寝るのは身体が鈍るのヨ？」

エミリア

「うつ……だつて。昨日アルトの部屋でさ、みんなずっとトラン  
プやってて

遅くまで起きてたんだもん。アルトは眠くないの？」

アルト

「……幼女はいつもヌイグルミを抱えて眠るんだが、昨日はあろう  
ことか

俺のジョイスティックを握りながら眠ってしまつてな……。見事  
な操作技術に

耐えられなかった俺は、あれから一睡も出来なかった」

エミリア

「じよいすていく……？」

アルト

「そうだ。だから俺は考えた。今日の夜は幼女にジョイスティックを  
握らせつつも前屈みになると、幼女が寝惚けて俺の胸にある操作  
ボタンも

連打してコンボしてくれるんじゃないかと気が気でない」

チエルシー

「新しいシャツチョサンは、もう少し妹を大事にシテあげた方が  
良いと思うネー」

アルト

（やっぱ妹なのか……）

鳴り響く打撃音が終了すると、次は第二ラウンドに移行した。僅

差ではあつたが俺の勝ちである。ふつチエルシーさん。俺を動揺させてミスを誘おうとしているな。まあ、もしも俺のジョイスティックがチエルシーさんに捌かれる様なことがあれば、俺は一瞬で敗北に陥るだろうな。しかし、綺麗なお姉さんに接待されて手慰みなんで、それなんて（略）

アルト

「しかし……確かにこう依頼が入って来ないと暇だよな。クラウチのオッサンなんかクラッド6の賭博施設区域まで散歩に行っちゃまったぞ。

ありゃあ夜まで帰って来ないな」

チエルシー

「それでも、シャツチヨサンは色々と仕事の疲れもあるカラそつとシテあげて欲しいのヨー。でも、こんな時に限って依頼とか来客とかあつたりシテネー」

エミリア

「来客かあゝ。言えば、最近あいつの顔を見ないなあ」

アルト

「あいつ……？ コレか？」

エミリア

「違う！ 小指を立てるな！

一応、あれでもあたしの友達なんだよ。ちよつと性格キツくて男ッ気ないのが玉に瑕なんだけ」

???

「誰の性格がキツいんですか」

その時、後ろの方から声が聞こえた。エミリアと同じくらいの年頃の少女ヴォイスに聞こえる。俺はチエルシーさんとの対戦の最中、ちらと後ろに目を泳がせると、そこには茶色の髪の毛を綺麗に伸ばした少女が直立していた。頭に乗っかっているミ・カンの葉っぱみたいなアクセサリーと青を基調としたガーディアンズ制服が特徴的だった。

アルト

「あっ！ ルミア、ルミアじゃないか!!」

ルミア

「えっ……アルトさん！？ お、お久しぶりです!」

俺は久しぶりの少女との再会に歓喜した。

エミリア

「何……あんたたち、もしかして顔見知りなの?」

アルト

「あ、ああ……以前ちょっとな。そうだな、あれはいつの頃だったかな」

俺は後ろに立っているルミアという少女との思い出に身を馳せた。

第四話？ - 惑星パルム・ホルテス・シティ - (前書き)

ルミアの黒ブルマとガーターは公式設定です。

#### 第四話？ - 惑星パルム・ホルテス・シティ -

アルト

「ふう……腹減ったなあ」

ここは惑星パルムのホルテス・シティという場所。フリーの傭兵として活動をしている俺は、特に依頼もアテも無く鼻歌交じりにホルテス・シティの街並みを歩いていた。

俺は悩んでいた。そろそろ資金的にも厳しくなってきたので、ここらでドカツと大きな依頼でもこなして、一山当てておきたかったからだ。おかげで最近はずっと食料にもありつけず、ピザ屋でパンの耳をもらって空腹を凌ぐ毎日を繰り返していた。

むしろ、そろそろ俺も身を固めようかなと考える時もある。出来れば、今と同じような環境で生活したいが、太陽系警察組織は教養が無いので論外、ガーディアンズも良いが、あまり形式にこだわった場所も自分には苦痛だ。もっと気楽に、仕事に集中できる企業がいい。

だが、そうなってくると力しか脳の無い仕事場で、むさいオッサン共が徘徊するようなモンスターハウスになるが……なるべくならそういうところは、ご遠慮したい。もっと新鮮な場所で、華やかな女子がいて、そんでもって俺にトキめいちゃうようなコがいれば

言うこと無しなんだが。

うゝむ、そうだなあ。どんな娘がいたら嬉しいだろうか。ちょっとしゃばりだけど天然なところが可愛い子。普段は寡黙で目つきが悪いけど意外と優しい子。色んな妄想が出来て困ってしまうな。

後は、あれだな。生真面目だけど家庭的で妹のような子とかも…。

アルト

「む……うわっ！」

俺は横切ろうとした路地裏から急にヒトの気配を感じる。が、気づいたときには既にヒト　少女と正面から激突していた。

ぶにゅん。

???

「おつと旦那、ゴメンよっ！」

アルト



「あつ、おい……って何だと!？」

俺にぶつかってきた少女の外見は、毛先の乱暴な赤髪短髪で、頭には望遠鏡みたいなものを着けていた。小柄な体格で元々肩出しの服に裾を縛ったヘソだしルックで上半身の素肌率が高い、更にショートパンツ。加えて小生意気な表情。しかし、俺が受けた衝撃はそこでは無かった。

巨乳。

少女を表す全ての条件が一つの結論によって覆される。むしろそれ以外が飾りに見えてしまうくらいにボインボインのバインバインでズバボボーンだった。無邪気そうな外見……恐らく年齢は11か12と言う印象だ。

……が、しかし、その胸はおかしいだろ、反則だろ。思いっきり谷間が見えるんだが、何食って生活してたらその年でそんなに豊かに実るんだよ。この少女……あわよくばもう一度ぶつかるところから始めませんか!？」

アルト

「お、おっぱあ  
」

???

「ゴメンよー！」

俺は変な単語を口走ろうとしたが、もう少女は俺の前から走り去っていた。どうやら、急いでいたようだ。まあ、そういうこともあるだろう。誰かに追われていたりとか。

……追われて？　そこまで思考を巡らせると、今度は別の女の子の声が路地裏から聞こえた。

???

「きゃあああー！！！」

またもや正面から激突。今度はクッションになるものが無かったせいか、衝撃で少女は体ごと吹っ飛ばされた。床に尻餅について背中を擦る少女だったが、あろうことかパカッと開脚してくれたスカートの中から、黒色のブルマが露見されてしまった。

というか……ガーターだと！？

この少女は幼さの残る外見に似合わず、黒色のブルマにガーター

ベルトらしき物を装備していた。予想外の展開に俺の瞳孔がガン開きになる、

だが、ここでブルマ&ガーターに釘付けになっていると、そのまま平手打ちを食らって即終了。フラグは木っ端微塵に打ち砕かれ、俺は主人公としての道程を捨て去る事になるだろう。どうせ捨てるなら、別の何かがいい。

とにかく、感づかれない内に手を差し伸べ、彼女との好感度をアップさせよう。

……む？ クッション？

アルト

「絶壁………？」

???

「誰が無い乳ですかぁー!!」

ふいに浮かんだ一言が仇になっただけ、俺は右頬に鋭いストリートパンチをもらった。ゴリツという骨の軋む音と一緒に、俺の身体は捻じ曲がって地面に陥没した。

完全にノックアウトされた俺をよそに、立ち上がった少女は高らかに口を開いた。

ルミア

「私の名前はルミア。ガーディアンズ所属のルミア・ウェーバーです！」

女性を汚す不埒者は、すべからく成敗しますよ！！  
分かりましたか？ 名も知らないお兄さん」

アルト

「き、肝に銘じよう。ところで、もしかしてさっきの女の子を追っていたのか？」

ルミア

「ええ。そのつもりでしたが、貴方のおかげでまんまと逃げられてしまったようですけどね」

むむう、半分は俺のせいじゃないだろうよ。

ルミア

「とにかく、彼女は食い逃げ及び窃盗の常習犯で、捕まえないといけない対象なんです。分かったらガーディアンズの邪魔をしないで頂けますか？ それでは」

アルト

「まあ、待て」

俺はルミア嬢の腕を掴んだ。

ルミア

「何ですか……一体。逆上した腹いせでもするおつもりですか？  
それならば」

アルト

「いや、俺にも手伝わせてくれ」

ルミア

「……突然、何を言い出すかと思ったら。却下です。これはあくまでも

ガーディアンズに依頼された任務なんです。部外者は余計な口を挟まないで下さいますか？」

アルト

「フツ……まあ、そう硬いこと言うなよ。俺は手伝うだけだし、別に報酬もいらな<sup>い</sup>。フリーで傭兵やってるから、実力なら問題は無いぜ」

ルミア

「……どうあってもついて来る気ですか。はあ……分かりました。

では、くれぐれも足手まといにならないようにして下さいね」

アルト

「さすがガーディアンズ。物分りがいいな。おっと、俺の名前はアルト。」

アルト・シュバイツァーだ、宜しく頼むぞ」

ルミア

「そうですか……シュバイツァーさん」

アルト

「アルトでいいぞ」

ルミア

「……宜しく願いしますね、シュバイツァーさん」

アルト

「中々にぜつぺ いや、鉄壁だな。まあ、とにかく探すか。その窃盗食い逃げ女とやらを！」

こうして、俺とルミアの出会い、一人の少女を捕まえるという任務と共に始まった。

何？ どうして俺がこの依頼に参加したかだと？ それはもう決まってるじゃないか。

もう一度あの子に会って、あのオツパイを触りたい！ それだけが、俺の中で芽生えた闘志を燃やす唯一の燃料だった。

ルミア

「ところでシュバイツァーさん。財布とか盗まれてませんよね？」

アルト

「……思いつきり盗まりました」

訂正。俺の目的は二つ。彼女のおっぱいと、俺の財布を取り戻すことだ。

#### 第四話？ - ホルテス・シティ ラグ・シュリアス - (前書き)

急激なネタバレですが、ラナリーはそのうちガーディアンズに入社、ルミアの部下になって準ヒロインとしてリトルウィングに再登場します（笑）



#### 第四話？ - ホルテス・シティ ラグ・シュリアス -

まず、被害のあった店を巡回して情報を仕入れることにした俺とルミアは、ホルテス・シティにある商店街区域を歩いていた。彼女がどこへ行ったか分からない以上、店先で隠れて狙い打ちする手段を取らざるを得ないだろう。

アルト

「で、さっきの女の子の名前は何て言うんだ？」

ルミア

「彼女の名前はラナリー・ココフです。ガーディアンズの中でも借金滞納で各社のメセタ貸しから苦情が出ているワレリー・ココフという

男性の孫娘らしいですね。別の傭兵企業や何でも屋が借金の取立てに

積極的になっているそうですが、未だに逃走経路に主だった目処がついて

いません。孫娘のラナリーは祖父の悪い部分を継承している、と予測します」

アルト

「ほく成る程ね。しっかりこのスクリーン画像でも分かるが」

ルミア

「死んで下さい」

アルト

「すみませんでした！」

何故俺の考えが分かったし。しっかし柔らかそうな胸だなあ、こ  
う触ると押した分だけ食い込みそうな胸だと、どうしても隣に居る  
ルミアの胸元が寂しそうで同情してしまう。いや、そういうニーズ  
もありということなのか。

ルミアが凄いい形相で睨んでくるので、俺はやむなく妄想を断念。  
街中を歩き続ける。

俺とルミアは、ホルテス・シティの商業区にある【ラグ・シュリ  
アス】という名称の料理店に立ち寄った。店員の話聞けば、ラナ  
リーは大体この時間の前後に現われるらしい。が、変装が得意らし  
く、中々見つけられないそうだ。

俺とルミアは事前に用意しておいた帽子と眼鏡をかけて簡単な変  
装をした後、来店する客を徹底的に詮索する作戦だ。ともすれば、  
普通に食事を楽しんで一般人に溶け込まなければいけない。そこで、  
俺とルミアは丸いテーブルの椅子に腰掛けて、ゆっくりとメニュー  
表に目を流した。

注文した軽いオードブルやらメインが運ばれてくる。それを舌で  
味わいつつ、俺は女の子との食事を楽しんだ。むしろ、こんな形で  
女の子と一緒に食事が出来るなんて思ってもいなかったぜ。

これが恋人同士なら「ふふっ、お口の回りが汚れていますよ」と  
か言って、舐め取ってくれるんだろうけど、残念ながらそんな関係  
は無い。せつかなので口元を汚して待機してみるが、完全に無視  
されてしまった。

アルト

「しかし、何故ガーディアンズがラナリーを追っているんだ？  
食い逃げや窃盗の類なら、おとなしく太陽系警察に任せればいい  
のに。」

聞いたただけだと、そんなに深い事情があるようには見えないんだ  
が……」

かちやりと食器を置いて、丁寧<sup>に</sup>口を拭くルミア。

ルミア

「それは、今回の問題にラナリー以外の人物が関係していると  
思われるからです」

アルト

「大きな影なのか？」

ルミア

「いえ、組織的なモノではありません。ラナリーは普段、窃盗と言っても服だとか、生活的に不足している類を盗むことしかしていなかった

のですが、最近になってもっと大きな……そう、金銭的価値のあるモノに着手し始めたんです」

アルト

「急にラナリーが方向性を変えたと言う話にはなんらかの？」

ルミア

「それはまだはっきりと分かりません。ただ、一部の被害に遭われた店では

その時にラナリーの他にも巨体の男を目撃したということです」

アルト

「ほづ……これが写真か」

ルミア

「ええ。彼の名はバドウ・メルダム。元々太陽系警察官だった人物で、何らかの

理由で退職。その後はフレリー・ココフと裏で金品の取引の他にヒト狩りの

仕事を行っていた話も。ヒューマンとビーストのハーフでプラスの能力は

失われていますが、人並みはずれた腕力の持ち主らしいです。――時期

ガーディアンズに逮捕されて牢に入れられていたんですが、最近になって彼は

脱走したんです」

アルト

「ほお、成る程なあ。それでラナリーと協力しているバドウの捜査が目的って

ワケか。しかし大丈夫なのか？ 女の子一人が、そんな巨漢相手に立ち向かうだなんて」

ルミア

「失礼ですね。私は実戦も数多くこなしていますし、フォトンの扱いにも

長けています。この程度の相手に遅れを取るはありません。

お兄ちゃん

程では無いにしろ、私だって……！」

アルト

「お兄ちゃん？ いや、ルミア、ルミア・ウェーバーか。どこかで聞いたことが

あるような。結構に有名だったような……」

ルミア

「お兄ちゃんを知らないんですか！？ ガーディアンの英雄

イーサン・ウェーバーですよ！」

その言葉を聞いて、店内に居た客がざわめきを起こし始めた。小聲でイーサンの英雄の妹だのと話が漏れている。俺は即座にルミアの口元に手を押し当てた。

アルト

「ここだと話が大きくなる。もしかしたら、変装しているラナリーがいるかも知れないんだぞ。それに、もしここにルミアの言うバドウトやらが

いれば、俺達は奇襲を受けるかも知れない」

こくこくと承諾をしたルミアの口から手を離すと、申し訳ありませんと謝罪の言葉を述べてきた。いやあ、折角だから謝罪の代わりに肉体的なサービスとかでも全然いいんだけど、とは言えない。

ん……何だあれは？

俺は視線だけを後ろに送って、人垣の奥に目を凝らした。しかし、相手がそれに気づいたようで、俺が外見の目星を付ける前に、その人物はヒトの流れに消えていった。

アルト

「悪いルミア。ちょっと一発抜いて……じゃない、用を足しに行ってくる」

それだけ告げて、俺は足早に席を立った。ぽかんと見つめるルミアをよそに、俺は人垣を掻き分けてさっきの人物を探した。全容は

分からなかったが、赤色の後ろ髪が尾を引いていたのだけは確認できた。恐らく、あれはラナリーに違いない。

だが、左右を見渡してみても、席に付いている客や、男連れの客、果ては店員などにも赤い髪をした女性はいない。最初に会ったラナリーの身長は140cmだった。厚底やらタケ・ウマなんかで背丈のカバーなんていくらでも出来る。

加えて変装の名人と言うのなら、俺にラナリーを特定する秘策は一つしかない。

俺は知らない振りをして通り過ぎようとしている髪留めをした赤髪の女性に近づいて

ぽにゅん。ふにふに。

俺は女性の胸を揉んだ。

ラナリー

「……あう……ッ！」

アルト

「フフッ、見つけたぞラナリー・ココフ」

弾き出される妖美なくぐもり声。隠し切れない豊満なバスト。俺は変装したラナリーの柔肌をまさぐって彼女を発見することに成功したのだった。



第四話？ - ホルテス・シティ ラゲ・シュリアス - (後書き)

パート分けだけで目的を達成する主人公の性欲に脱帽するわ(笑)

#### 第四話？・ラグ・シュリアス・昼・（前書き）

だから、行き当たりばったりでフラグを立てるから関係が悪化する  
んだと何度言えば（ry

#### 第四話？・ラグ・シュリアス・昼・

アルト

「さあ、観念しろラナリー・ココフ。近くにはさっきの  
ガーディアンズもいる。大人しくお縄で縛られるべきだな」

ラナリー

「あう……ボクとしたことが迂闊だったね。まさか、旦那が  
ここまで鼻が良かったなんてね。あのトンチキ女一人だけなら  
煙に撒けると思ったんだけどなあ」

ラナリーは心底残念そうに気を落とす。以外だな。年頃の少女な  
らもう少し抵抗するかと思ったんだが中々に聞き分けが良い。おま  
けにもう一度おっぱいも触れたし、言うことなしだな！

早速ルミアを呼ばうと、俺は名残惜しいがラナリーの胸元から手  
を離そうとする。

が。

ラナリー

「ねえ、ボクの胸触り心地良いでしょ？ もう少し触ってたくない  
……？」

アルト

「何イ……良いのかお前、俺にそんなことさせて……。俺の指先はゴッドハンド

のようなものだが、そんな表情で俺のことを愛らしく見つめられては

ラナリーの指先周辺にある俺のメテオカノン（Sグレードレーザーカノン）が

充填完了し、もはやお前が痛いと言っても揉むのを止めないほどに熱く

なっって押し倒してしまうんだが……！」

俺の理性は天秤にかけられ、重く揺れ動いている。肩出しの服装はただでさえ男を魅了して止まないのに、小柄な体型に小さな衣装では耐え切れないほど、彼女のバストは流麗な曲線を描いており、双丘の麓を越えた先にある谷間が、俺の精神を過剰に狙撃してくる。

その上、重なるようにそつと上から自分の手を置いたラナリーは、俺にわざと揉ませるように、じわじわと力を込めてくる。服越しでも食い込む指先、破裂しそうな俺の心臓。

いかん。

このままではヤヴァイ。何がヤヴァイ？ 俺の精神は言うまでも無く、これを超えると確実に18という超えられないはずの壁を突

破してしまう。そうなのは何かの存続すら危うい。

それに、俺はルミアと協力をしたばかりじゃないか。いくら動機が不純でも、破って良いことと悪いことがあるはずだ……！

俺は誘惑を振り切り、ラナリーの胸から手を離そうとした、その瞬間。

ラナリー

「きゃあああ！！ このヒト痴漢です！ 誰か助け むぐっ

！」

アルト

「お、おいやめろBAKA！ れれれ冷静になれ！ お前だって変装を

していると言っても、見つかったらひとたまりも無いんだぞ！

お前は

窃盗罪、俺は痴漢罪で二人は○リキュア犯罪者だなんて、アホか！  
プ○キュアするなら同性でやれ！」

俺はラナリーの口を押さえて、何とか事なきを得た。ふう、危ねえ。寿命と俺の（略）が縮まるところだったぜ。後者は縮まっても良いだと？ ふざけるんじゃないやせん。

現状を理解してくれたようで、とりあえず落ち着いてくれたようだ。さて、問題はここからだ。俺としてはすぐさマルミアに差し出して、良いんだが、出来れば可愛い子は放っておけない。出来れば、ラナリーから事情を聞いて、和平的に交渉したいものだ。

ラナリーはふてくされた顔で、俺を上目遣いで見上げてきた。何なんだろうか、こいつは生来の男をときめかせる能力でも持っているんだろうか。

ラナリー

「……ボクをこれからどうするの？ ガーディアンズに差し出すの？ それとも、ボクの美貌に惚れて一日中　　して　　にするつもりなの？」

アルト

「ふ、ふざけないで下さい！　ラナリーさんそれ以上コメが加速すると

世界のフォトンがバランスを崩しますよ！？　お兄ちゃんの本気です。

本気で貴女の将来を心配してるんで、そんなことしたいな〜とか思っても

絶対にしません！　正確に言うと、どっちでも無くて、純粹生粹生一本で

ラナリーさんを助けたいと思っておりますわ！　あつ、生一本つて勘違い

なさらないで下さいね！？」

ラナリー

「何でオカマ声なの……。もしかしてボクのこと味方してくれるつもり？」

アルト

「恐らく、その通りでございますわ」

何をやってるんだ、俺は。だが、ラナリーは何故か啞然として俺を見つめている。フッ、そんなに見つめるなよ。いくら俺が超絶イケメン風味の男だと言っても、貴女のような少女に熱視線を送られては、さすがに照れてしまうではないか。

すると、ラナリーは何を思ったのか、急にほくそ笑んだ（こっさり見た）かと思うと、急に瞳をうるうるし初めて涙を流し始めた。

ラナリー

「うええええん……。お兄ちゃん。ホントはね、ボクはバドゥって悪い男のヒトに脅迫されているの……。だって、そうしないとボクの

身内を殺した後、ボクを

にしてマワすって……！」

アルト

「……………」

俺は決めた。

ラナリーを助ける。そんな不屈きモノは俺がグラールの海に沈めてくれるわ。塵も残さぬよう滅殺し、きやつめを二度と 社会に出れないように、下半身のCグレード装備をウエポンブレイクして進ぜよう。

アルト

「分かった。今日から俺はラナリーの味方だ！  
困ったことがあったら言ってくれ。何でも力になるからな！」

ラナリー

「うん、ありがとうお兄ちゃん！！」

……安い男ね」

アルト

「何か言ったか？」

ラナリー

「ううんっ、何でもない！　じゃあ、早くこんなトコ出てボクと一緒に繁華街でデートでもしようよっ！」

アルト

「おお、それはいいな。だが、とりあえずルミアのところへ挨拶に行く。ずっと放置していたしな」



ラナリー

「えっ！？　ど、どうしてお兄ちゃん？  
ボクといるのがそんなに嫌……？」

アルト

「い、いやそんなことは無いぞ！　俺はルミアを説得して  
みようと思う。何たってルミアは英雄、イーサン・ウェーバーの  
妹らしいからな！」

イーサン、という言葉聞いた辺りから、ラナリーの表情に著しい変化があったのを俺は見逃さなかった。だが、すぐに笑顔に戻ったのを見て安心した。もしかしてこの子はイーサンが苦手なのかな？　だとしたら、余りこの話題は出さないようにしよう。

しかし、今のラナリーはルミアのところへ行くのを拒んでいるようだ。無理も無いか。いくら脅迫されてやっていたとは言え、多少の罪は免れない。加えて、ルミアは初対面だが頑固者っぽい印象があったからな。強引にでも連行する可能性が皆無とはいい切れない。

と思ったが、ラナリーの答えは先程とは違っていた。

ラナリー

「いいよ、ボクはお兄ちゃんのことを信用する。」

だからボクをその妹さんのところに連れてって」

アルト

「ああ、分かった。任せておけ」

ひとまず話がまとまったので、俺はラナリーと一緒にルミアの元へ戻ることにした。

#### 第四話？・ラグ・シリアス 廃工場・（前書き）

ふうむ、無駄にシリアスでめんどくさいな（´、`）

ところで、ナギサさんの一日デートの記憶はいつ頃戻るのだろうか。

そして、皆様にお話です。

活動報告でも載せているのですが、この作品の一部をノクターンノベルズに投稿しようと考えています。もしソツチ系みたいって方いましたら連絡下さい。連絡方法は何でもいいです。頑張ってエロくします（笑）

第四話？ - ラゲ・シュリアス 廃工場 -

ルミア

「……信用できません」

ですよー。

俺はラナリーと一緒にルミアの元へ戻ったが、案の定受け入れてくれなかった。ラナリーのことを舐めるように見回して疑っている。舐めるのなら任せてください。ぺろぺろ。

ルミア

「まず、それならどうして最初に私から逃げたんですか？  
わざわざ逃げなくても、ちゃんと説明すれば納得したのに……」

アルト

「……それは一概にも何とも言えない俺がいるが、ルミアの言うことも

分かる。もっと相手に理解してもらう方法があったんじゃないかな？」

ラナリー

「だって……怖かったからさ。ボクのことを追いかけてる時の形相が昔近所にいたうるさいニューマンのオバサンにそっくりだったん

だよ」

ルミア

「お、おぼっ……！」

アルト

「待ってくださいルミア。ほかあ、貴女も十分に素敵だと思う次第です！」

必死でルミアをなだめる俺。これ以上この会話を続けると危険そうなので、話題を戻そう。

アルト

「頼む、ルミア！ ラナリーは根っからの悪じゃないんだ！ レベル200の俺が頭を下げることに免じて、信用してやってはもらえないか？ その代わり、ラナリーはバドウの居場所を知っているらしい。彼女に案内してもらえば、事件は解決するはずだ！」

ルミア

「誰がルミアですか。はあ……分かりました。ただし、ラナリーさん。」

私はまだ貴女のことを信じたわけではありません。監視の目は常にあるものと思って覚悟して下さいね」

ラナリー

「うん、分かったよ。ありがとね、お兄ちゃん！ おばさん！」

ルミア

「……………」

アルト

「安心しろ。俺はルミアのこと悪くないと思うぜ、うん」

俺はルミアの肩に手を置いて慰めた。とにかく、ラナリーが言うには近くのホルテス・シティ工業区の廃工場で部下数人と休憩をしているらしい。ラナリーに案内されるまま、俺とルミアはひたすらにシティの道を進んでいった。

道中。

今日は中々涼しいなどと考えていたら、何かポウンと柔らかい音がして、俺は自分の右腕に捕まっている少女を見た。

ラナリー

「お兄ちゃん。ボク、ちょっと怖くなってきたからお兄ちゃんの腕に捕まっついていい？」

アルト

「あ、ああ……………うむ……………しかしルミアが」

ルミア

「別に私は関係ありませんよ。信用されているようで何よりじゃないですか？」

アルト

「はは……」

さつきから俺の右腕は彼女の両腕に押さえられ、ラナリーの巨峰が俺の腕を圧迫してくる。い、いや他意はない。無いはずだ。呼吸を整えつつも、俺は下半身に無意識を集中させ（？）精神を落ち着かせた。

すると、ルミアが逆方向から小声で話を持ち出してきた。

ルミア

「……シュバイツァーさん」

アルト

「だから、アルトだと何度イエア」

ルミア

「あの子の話を本当に信用しているんですか？  
私には、どうもまだ隠し事をしている気がしてならないのですが」

アルト

「確かに。隠し事の一つはあるかも知れないな。しかし、ラナリーに

頼る以外足取りを掴む方法が無かったのも事実だ。ここは大人しく彼女について行ってみよう」

ルミア

「……分かりました」

そうして着いたホルテス・シティの廃工場。鉄線の柵を越えて中を覗くと、ラナリーの情報通り、中には数人のゴロツキと、その中心にいかつい顔をした男が太いホイールを椅子にして座っていた。

ラナリー

「あれがバドウだよ……。ね、すごいワルに見えるでしょ？  
ボクはいつつ、あんなヤツに脅されていたんだ……」

アルト

「成る程。確かに筋肉隆々と言った感じだな。まあ、下半身のモノは俺の足元にも及ばないだろうがな」

ルミア

「余計なこと言わないで下さい。はあ……何でこんな下品なヒトと一緒に行動しているんだろう……」

アルト



「下品で悪かったな。で、どうする?」

ラナリー

「この廃工場には裏口があるんだよ。そこから侵入して  
一気に畳み掛けるんだ」

俺とルミアは首を振った。早速行動だ。

裏口へと回った俺達は、未だ呑気に休息しているヤツらの隙を付  
いて勢い良く扉を開け放った。

突然の出来事に、バドウの部下たちがハツとした顔で振り向く。

そして、その表情の中には、バドウの姿もあった。

バドウ

「何だ、貴様らは」

ルミア

「ガーディアンズです! おとなしく観念して捕まりなさい!」

その言葉を、バドウは鼻で笑った。続いて、部下が口を開く。

部下 A

「な、なんだデメエらは！？」

部下 B

「ラ、ラナリー！

貴様、裏切りやがったなあ！？」

ラナリー

「.....」

アルト

「こんな美少女を弄んでいた癖に、何を戯けたことを.....！

そこまでだ！ 卑猥な夜の亡者ども、俺が掻っ捌いてくれるわ！

！」

俺達は散開して手下と戦闘に入った。とは言っても、たかだか即席で仕上げた寄せ集めの雑魚相手に、俺が手間どうはらずも無く、攻めるだけの単調な攻撃を軽くいなししてみね打ちをする簡単なお仕事だった。

バタバタと手下どもが倒れていく。ふっ、ざまあないな。

気づけば、ほとんどの部下は床に倒れていた。

よし、これ以後は

ルミア

「きゃああああ！！！」

突然、遠くから悲鳴が聞こえた。ルミアの声だ。

アルト

「ルミア！？ どうし  
」

見ると、両腕を手下どもに押さえられている彼女の姿があった。  
そして、そのすぐ近くにはバドウの姿が。

バドウ

「その手並みは見事だ。だが、ツメが甘かったなア」

アルト

「クソッ、まだ手下が残っていたのか……!?」

ラナリー

「……それは違うね」

アルト

「何……ラナリー、お前……!」

ラナリーはかつかつと工場の中を歩いて、バドウの正面に立つ。すると、あるうことがラナリーはバドウの真横に立って、俺の方向にハンドガン突きつけてきた。

ルミア

「ほ、ほら、だから言ったんです……信用できないって!」

アルト

「む、むう……こりゃ参ったな……」

くすくすと妖艶に笑う赤髪の少女。ラナリー、お前は本当に俺たちを裏切ったのか? 嘘だと言ってくれよラナリー!

混乱する頭の中、目の前に対峙する敵の姿が俺をあざ笑っているような気がした。

#### 第四話？ - 廃工場 -

アルト

「クソッ……ラナリー何故だ！ 何故、俺たちの敵に回る！  
お前はそのバドウってヤツが憎いんだろう！」

ラナリー

「あははっ、旦那、もしかしてまだそんなことを信じちゃってるの？  
お・ば・か・さ・ん」

アルト

「なにイ……！」

俺の前でハンドガンを向けるラナリー。手下に捕まえられたルミ  
アも苦虫を噛み潰したような表情をしている。俺の疑問を解消した  
のは、巨体の男……バドウだった。

バドウ

「グハハッ、初めから彼女は、お前たちに協力するつもりなど  
無かったのだよ。それが分からん男だから、二流だと言うのだ」

アルト

「ふざけるな！ 俺はラナリーのことを見てきた！ 目の前で  
困っていると言ったんだ！ 助けるに決まってるだろ……！」

バドウ

「グフフフツ……アーツハツハツハツハ！」

面白い、面白いぞ少年！！ お前の存在は実に滑稽だ。もはやカゴの中の鳥などとは形容できんくらいにな！！」

俺は怒りに任せて、次の言葉を放とうとした瞬間

ルミア

「あっ……！！」

アルト

「……ッ！」

バドウは、ラナリーの唇を奪っていた。彼女自身も、目を伏せてそれを受け入れている。巨体と少女の身長差は大きく、ラナリーは出来る限りの背伸びをしていた。

アルト

「ラナリー……お前は……！」

ラナリー

「ふふん……旦那あ、もしかしてボクのこと好きだったの？」

冗談言わないでよ。何でボクがアンタみたいなダサイ男を好きにならなきゃいけないのさ」

クスツと微笑んだラナリーは、手に持っていた何かの装置を起動させる。途端、俺の周辺を境目にしてフォトンの重力磁場が発生した。ずっしりと身体に重く押し掛かる重力に、俺は耐え切れず片足を付いた。

アルト

「な、何だ……これは……」

バドウ

「そいつは最新式の重力発生装置だ。フォトンを動力にして周辺区域にあるフォトンの粒子に負荷をかけるのさ。はははっ、どうだ。すごいだろう。最も、これはまだほんの小手調べさ！ つえええええい！！」

バドウがラナリーの手から装置を奪い、スイッチを捻る。すると、目に見えて周囲の空間が歪んでいくのが分かる。俺自身も圧力に耐え切れずに地べたとご挨拶してしまう羽目に。

このままでは、俺もルミアもバドウという男の汚い陰謀によって消されてしまう。くそっ、ラナリー、お前は本当の本当に、俺たち

を裏切るつもりで騙していたのか？ それとも、こんな安い夢のよ  
うな思考をした俺が間違ってるって言うのか……？

ラナリー

「地面と抱き合う気分はどうだい？ さあ、バドウの親分！  
あんな小汚らしいヤツなんか、とつと倒しちゃってよ!!」

バドウ

「グハハッ、そうだな……。だが、その前にだ。ラナリー、少し話が  
違うんじゃないのか？」

ラナリー

「……………ッ！」

急にラナリーの表情が青ざめる。聞かれたくない話だったのか、  
ラナリーはすぐに笑顔を取り戻して弁解する。

ラナリー

「ち、違っただッ!! この女はルミア・ウエーバー！  
あの英雄イーサンの妹だって言うんだ！ こんなヤツなら十分  
ガーディアンズとの取引交渉に使えるだろ？ 身代金を要求して  
トンスラすれば、もう安い金品なんか盗まなくていいんだよ！」

バドウ



「おい、ラナリーよお……」

バドゥはその太い腕でラナリーの服を引っ張り、無理矢理体ごと引き寄せた。彼女の口から苦しげな声が漏れる。

バドゥ

「何勘違いしてやがるんだ？ お前をあのワレリー・ココフから『買った』のは俺だ。お前にはこの俺に付き従う義務があるんだよ。」

生きていく為の金を出してやったのは俺だ。だから、俺の意に沿わない行動はできないんだよ？ 分かってんのかぁ！！」

ドゴオッ！！

ラナリー

「ぐぁ……かふっ……！！」

ラナリーの脇腹に男の拳が炸裂する。十分に加減した一撃だったのだろうが、見ての通りだ。元々体格の小さなラナリーには相当の痛手だったに違いないだろう。嗚咽を走らせ、脇腹を必死に押さえ

ている。

アルト

「クソッ……バドウ貴様ア……やめろぉー!!」

バドウ

「フン、負け犬が吼えた所で、このフォトン重力発生装置からは脱出できぬよ。おとなしく引ッ込んでいろ!」

ルミア

「アルトさん!!」

俺はバドウに蹴りを打ち込まれ悶絶した。くそっ……いつもなら、こんなヤツ相手にするのなんか問題じゃないはずなのに……。

ラナリー

「だ、旦那……!」

バドウ

「おっとラナリー。お前は余所見をしている暇は無いはずだぞ? どういうことが、分かっているはずだよなあ……?」

ラナリー

「……ッ！ は、はい……」

何だ？ 一体ラナリーに何をさせようって言うんだ？

まさか……。

ラナリー

「バドウ様、ボクは主人の命令に逆らった愚か者です……  
せめてもの償いに、バドウ様にご奉仕をさせて下さい……」

アルト

「お、おい……ッ！」

俺の言葉に耳も貸さず、ラナリーは自分の着ていた服を脱ぎ始めた。しゅるりと服の落ちる音がして、ラナリーは下着だけの姿になった。

バドウ

「フン、いいぞ。奉仕のやり方は分かっているな？」

ラナリー

「はい……」

ラナリーはバドウの足元にしゃがみ込んで、カチャカチャとバドウのズボンを脱がし始めた。

アルト

「や、やめろラナリー！！ お前がそんなことをしたって何の解決にもならないんだ！ 自分の心に嘘をつくな！ 自分の信じるものだけを信じる！」

俺は出来る限りの声で叫んだ。だが、今のラナリーに俺の声は届かなかった。

くそっ……今の俺じゃラナリーの心を動かすことは出来ない……！  
！ 落ち着け、落ち着くんだ。まずはルミアを救出し、その後にはラナリーをバドウの元から解放する。何か方法があるはずだ。何か……！

だが、どうすればいい？ 俺は動けないし、ルミアは手下に押さえられている。まずはルミアに、今の状況を打破する策を与えないことには……！

俺は闇雲に廃工場の中を見回した。何か無いかと考えたからだ。

アルト

「……………あれは……………！」

あつたぞ。現状を破る方法が……………！

だとしてもチャンスは1回。確実に成功させる他は無い……………！

俺は廃工場の中で輝く未来の鍵に目を光らせた。

#### 第四話？ - 廃工場・昼 - (前書き)

本日も閲覧いただき誠にありがとうございます。

えー、ノクターンノベルズの方でこの作品の外伝を投稿しました。

タイトルは

『超星恋憚インフィニティ外伝 - 俺と少女の夜のポータブル - 』です。

R18です。もし興味ある方いれば是非お読み下さい。

もう少し話数が溜まったら、ツイッターで宣伝しようかなあ。

#### 第四話？ - 廃工場・昼 -

俺は廃工場の中に置かれているソレに目線を当てた。

ホイールだ。

とは言っても、バドウの座っていたホイールじゃない。ここにホイールがあると言うことは、近くにホイールの置き場がある可能性が高いってことだ。

案の定、それは近くにあった。ルミアの捕まっている横側に、平積みされたホイールの山が出来上がっていた。あれを崩せば、多少の時間稼ぎくらいは出来るだろう。

アルト

（後は、俺の腕がこの重力下でどれだけ動くかだが……）

俺はゆっくりと右腕に力を込めた。見えない壁に押し出されるように、腕が俺の意思に反して下がろうとするが、それでも思いつきり力を入れれば、辛うじて動作一回分くらいは出来そうだ。

なら、問題は無い。

俺は懷をまさぐり、何とか中から物を取り出した。三つに分かれた先端、銀色のメッキが施された小さな獲物。さつきラグ・シユリアスで密かに奪取してきたフォークだ。これを山になっているホイールの一番下に思いっきりブチ当てて空気を抜けば、その勢いで瓦解するという訳だ。

が、言うは易し行なうは難しと良くあるが、これがまさにそうで、今から俺がやろうとしていることは、目隠した状態で綱渡りをするのに等しい行為なのである。何せ、こんなちっぽけな武器で、あの分厚いホイールに穴を開けろって言うんだからな。

やってやれないことは無いはずだ。そう自分に言い聞かせて、俺はフォークを持つ手にグイッと力を込める。幸いにして手下は抵抗するルミアの相手をしているし、バドウはラナリーに氣を取られている。やるなら今しかない。

ここでやれなきゃ、俺もルミアもミッションに失敗してジ・エンドだ。残機が一つしかないリアルでこれに失敗すれば、後はただ死が待つのみだ。バドウの性格からすれば、俺は斬殺死体でルミアは下劣な男共の扱う市場流通に回されて一巻の終わりだろう。

歪む磁場の中、獲物の先端をホイールに向けて光らせる。正確に位置を定めて、はずさないように、慎重に軸を合わせて……。照準



がピタリと、山積みされたホイールの下段に収まった。

よし、今だ……！

俺は持てる限りの力を振り絞ってホイールへとフォークを投げつけた。軌道は見事な直線を描いて、ホイールへと突き刺さった。だが、ブスリと刺さっただけで、そこから勢い良く空気が抜けることは無かった。

浅かったのだ。やはり、こんな状態じゃいつもの半分の力も出なかった。しかし、希望が無いわけでもない。事実、穴の開いた箇所から徐々に空気が漏れ出していくのが、ホイールの全形が変化していく様子から見て取れる。

肝心なのは、ラナリーがバドウへの奉仕をする前に現状打破しなけりゃいけないってことだ。確かに彼女は裏切ったし、こうして危機に瀕しているのもラナリーのせいかもしれない。だけど、それでも俺は、ラナリーの中に残された心の欠片を信じたかった。

俺自身にヒトを見る目があるのかどうかは分からない。だが、これだけは分かる。ラナリーは好きであいつに従っているわけじゃない。好きでやっているやつが……あんな悲しそうな目をするはずが無い。

バドウ

「見ているか少年。これがお前と俺にある器の差だよ。お前は指をくわえて見ることにしか出来ないのだ。何なら、少しでも重力を弱くして寂しい情事をさせてやってもいいんだぞ!? がははっ

!!!

……さて、お前たちもそろそろ退屈しているだろう。そのルミアとかいう

女に、男の良さでも教えてやれ」

ルミア

「ちょ、ちよつと……!!

いやっ、やめて! 離しなさい! 失礼ですよ、貴方達!!」

手下A & B

「へっへっへっへ……!!」

アルト

「クソッ……ルミア……!!」

こっちだ、こっちを見てくれ! 俺はルミアに出来る限り強い視線を送った。段々と乱暴になり始めた手下どもに抵抗するルミアは、ようやく俺の視線に気づいてくれたようで、俺の瞳と重なった。

俺はゆっくりと視線を変え、横にあるホイールの一番下、少しずつ空気が抜けて、あと僅かで倒れ掛かってきそうなホイールの山を示した。

どうやら、ルミアは俺の意思に気づいてくれたようだ。こくりと頷いて、ルミアの表情に熱が灯った。

ルミア

「ふふ……皆さんも随分と溜まってらっしゃるのでしょうか？  
良ければ私も皆さんに優しい気持ちになってもらいたいです。  
いいですね……？」

ルミアは甘い表情で述べると、そつと男の胸元に手を這わした。  
そして、それは徐々に降りてセイバーを握っている男の手に触れた。

226

ルミア

「こんなものは私と皆さんの間柄には必要ないですよ……。  
だって、これからセイバーよりももっと逞しい皆さんの武器で  
楽しませてくれるんですもの……」

手下 A

「へ、へへっ……！ 分かってるじゃねえか、姉ちゃんよお」

手下 B

「そうそう、バドウの親分は全然ラナリーを貸してくれねえし、ず  
うっと

溜まりっぱなしだったんだよ」

ルミア

「ふふっ、そうですか。では私の身体も満足させて下さるのですね？」

手下A

「そりゃあ間違いないねな！ ああ久しぶりだぜ、こんなに媚びた女の身体を  
食べられるのはよ……」

手下B

「うわああああ！！ おれえ、おれアもう我慢できねえよ！ 自分  
でも

しばらく抜いてないもんだからさああ！！」

ルミア

「……そうですか、でも」

ルミアは突然、男の手にあつたセイバーを奪った。

ルミア

「抜くのは、別の何かですけどねッ！」

セイバーがホイールに向かって放たれる。それは見事にフォークの刺さったホイールに命中し、その衝撃でホイールが破裂、バランスの崩れたホイールの山はヒトを押し潰すように雪崩を発生させた。

手下 A & B

「う、うわあああああああ！！！！」

手下達はホイールの海に流されていった。ルミアは事前に察知していたので、何とかそれを掻い潜って脱出してくる。

ルミア

「アルトさん、大丈夫ですか！！」

アルト

「だ、大丈夫だ。だが、俺に近づかないほうがいい。ルミアも重力の餌食になるぞ……！」

ルミア

「ありがとうございます。おかげで何とか……」

アルト

「気にするな。そ、それよりもですね。ゴホン」

ルミア

「……………」

アルト

「ル、ルミアさんって、意外と経験豊富なのでございましょうか……？」

ルミア

「……なっ！　ち、違いますよ……！　あれはその、痴漢撃退用のアレンジ対処法なだけで……その、私はまだ、誰ともしたことが無いって言うか、あのですね……」

アルト

「す、すまん……！　最後の方が良く聞き取れなかったんだが何て言っただ……！？」

ルミア

「べ、別に何も言ってませんよ！　それよりも……！」

俺はホイールの瓦礫に目を凝らした。そう、バドゥとの決着はまだついていない。俺は再び、握る拳に力を込めた。

**第四話？ - 廃工場・夜 - (前書き)**

長くなっちゃった(´、；)  
とりあえず四話終了です。

次回はどうすんべかね(笑)

幼女の名付け親絶賛募集中！

#### 第四話？ - 廃工場・夜 -

俺とルミアはホイールの瓦礫を眺めた。手下達は直下の位置にいた為、もう気絶しているだろうが、バドゥはこれを回避して、瓦礫の上に立っていたのだ。

バドゥ

「ぐうつ……！ やるな少年……俺としたことが、中々に驚きを隠せなかったぞ……！ む、重力発生装置が……」

バドゥは辺りを散策し始めた。それに次いで俺も周囲を見渡すと、工場内の隅に飛ばされたフォトン重力発生装置が転がっているのが見つかった。更に、その近くにはラナリーが横たわっていた。

アルト

「ラナリー……！」

ラナリー

「うつ……うつ……！」

俺は精一杯声を上げてラナリーの名前を呼ぶと、ラナリーの意識



が僅かにだが戻ったようだ。重いまぶたを動かして、ラナリーはた  
るんとした疲労困憊の目を開いた。

アルト

「ラナリー頼む！ 重力発生装置を解除してくれ！！  
お前だけが頼りなんだ！！」

ラナリー

「重力発生装置……あつ」

ラナリーも、近くに落ちている物に気づいたようだ。後は、それ  
を回収してスイッチを切ってくれば……！

バドゥ

「やめろラナリー！ 貴様、ワレリー・ココフの居場所が分からなく  
なってもいいのかア！！」

ラナリー

「……！ おじい……ちゃん」

バドゥ

「がははっ……そうだ。俺が知っている。俺だけが、ワレリーのいる  
場所を知っているのだ。お前には俺に従うしか方法は無い。でな  
ければ

お前はもう、一生ヤツには会えないのだぞ!!」

ラナリーは動揺していた。焦点の定まらない目を見ているだけで分かる。それ程に、彼女にとってワレリーという人物が大事なのだと言っことを教えていた。

だが、疑問も残る。

ワレリーから孫娘を『買った』というバドゥ。それでも未だにワレリーを信じ続けているラナリー。もしワレリーという人物が、本当の意思でラナリーを手放した訳では無いのなら、いささか未来にも希望が持てる。

なら、やることは決まっている。ラナリーを助けるんだ。一人だけ残されて、未だに希望を求めて生き続けている彼女を、俺は……!

アルト

「ラナリー駄目だ!! ヤツの言うことに耳を貸すな! でなきゃ、お前は一生ずる賢い人間のまま生きていかなきゃならないんだぞ!!」

ラナリー

「うつつ……だ、旦那……!」

バドウ

「ラナリー！ 俺の言う事を聞け！  
ワレリーと会えなくなってもいいのか！」

くそつ、駄目だ！！

今の俺の言葉は、完全にバドウの狂言に圧されている。何か、何かもう一つ、後押しできるだけの何かがあれば……！

そんな俺の心情を汲み取ったかのように言葉を発したのは、ルミアだった。

ルミア

「ラナリー！」

ラナリー

「……ッ！ ルミア……」

ルミア

「貴女はそれでいいの！？ 他人の下で媚びへつらって生きるだけの人生で！」

何も考えず生きるのは確かに楽な人生かもしれない。だけど、自分自身が

本当に生きたいって気持ちがあれば、それだけで目の前の状況は変わっていくものなのよ！ 私だって昔はお兄ちゃんに甘えて過ごしてた。

でもね、それでもヒトは自分だけの道を探さないといけない！  
それは、

他人には出来ないことなのよ！ もし……もしも貴女のお爺ちゃん  
が本当に

ラナリーの気持ちを想っていたのなら、それは貴女自身に自分で  
生きることを

教えたかったからなのよ！！」

ラナリー

「お爺ちゃん……！」

ルミア

「いつまでも甘えてないで！！ そんなんで貴女の好きなお爺ちゃん  
が

喜ぶはずが無いでしょう……！ だから、貴女には自分の行動で  
生きる

権利があるのよ！ 例え貴女が自分の自由に出来ないコトがあつ  
ても、貴女の

魂が奪われたわけじゃないのよ！！」

ラナリー

「……ボクの……魂……！？」

ラナリーは確かに揺らいでいた。誰かの言葉にじゃない。自分自身にだ。

アルト

「頑張れラナリー！」

ラナリー

「……………旦那」

アルト

「自分に負けるな！ 俺はいつでも馬鹿でロクな人生を歩んできていないが、

いつも自分の信念にだけは嘘をつかなかった！ 他者を想う気持ちが残って

いるのなら、俺に出来てお前に出来ないはずがない！！」

バドウ

「その汚ねえ言葉を……………やめねえかア！！！」

アルト

「……………ぐあっ！！！」

俺の腕に、バドウの放ったハンドガンが命中した。

ラナリー

「旦那……………！ くっ……………ボクは……………！！」

ラナリーは地面を這いながら、一歩ずつ重力発生装置に近づいた。  
あと少し、あと少しで、ラナリーは装置を手にする。

バドウ

「ラナリーイイイイ！！！」

逆上したバドウは、ラナリー目がけてハンドガンの弾を放っていた。スローモーションのような世界。ボウウンと音がして銃口からフォトンの弾丸が発射される。それは確実にラナリーを捉えていた。

だが

バドウ

「な、何だとオ」

アルト

「ルッ……ルミアアア……！！！」

身を乗り出したルミアの背中にはフォトンの弾丸が命中していた。

ルミアは、身を挺してラナリーを守ったのだ。

ラナリーは弾かれたように歩を進めた。重力装置が彼女の手に渡り、機能を停止させる。

俺の周囲から、重力が霞んでいった。

アルト

「ルミア……ラナリー……！」

ラナリー

「旦那、ルミア……ボクは……！！」

バドゥ

「ラアアアナリイイイイ！！！！！！！！」

その時、雄たけびのような弾劾絶叫が廃工場の中に木霊した。

バドウ

「貴様ア、これからどういう事になるのか、覚悟しておけよ……！！俺は絶対に許さん……ルミア、貴様もだぁー！！！！」

ルミア

「くっ……！！」

ルミアは、バドウの計り知れない怒りにたじろいだ。そしてバドウは、俺の方を見た。

バドウ

「それから少年……名は何と言ったか」

アルト

「フン、アルトだ。アルト＝シュバイツァー。お前に教えてやるには惜しい名前だがな」

バドウ

「俺は貴様のことを生かしておくつもりは無い。次に会ったら確実に息の根を止めてやる。覚悟しておくがいい！！」

それだけ口にする、バドウは手下達を置いて廃工場から去っていった。



何事も無かったように静寂に満ちる廃工場。事の終わりを感じて、俺はルミアに近づいて行った。

アルト

「ルミア……！」

横たわって苦しい息をするルミアに、そっと手を差し伸べる。

ルミア

「はぁ……はぁ……ア、アルトさん。私、立派でしたよね」

アルト

「ああ、お前は立派だった。俺は今まで色んなガーディアンズを見てきたが、お前はその中でも一番立派だと思う……！」

ルミア

「本当、良かった……。これで私もお兄ちゃんに近づけたのかな……」

アルト

「十分さ。お前もガーディアンズの英雄だと、俺は思うよ」

俺は英雄になった英雄の妹の肩を抱いて、廃工場の外に出た。

- N o w   L o a d i n g -

気づけば、辺りはすっかり夕焼けに満ちていた。こりやそろそろどっかの宿泊施設でも探してチェックインしとかないな。などと考えつつ、俺はルミアをおぶって歩いていた。

241

ルミア

「重くないですか、私……」

アルト

「俺は今までも重い荷物や美食家<sup>グルメ</sup>の為に狩猟したディ・ラガンの細切れを抱えたりもしたが、人生の中でこれほど軽い思ったものはない」

ルミア

「そうですか……」

ルミアは俺の耳元の近くで安著の息を吐いた。やめてください、女の子に息吹きかけられるとか、今すぐにでも俺のダブルアギト（Sグレードダブルセイバー）が獲物を求めて起動しそうになるだろ。

あつ、いや別にダブルセイバーと言っても、俺が両刀使いという意味ではない。

アルト

「そついや、廃工場の中から急にアルトさんとか言い出したな」

ルミア

「……別にそれは良いじゃないですか。もう面倒になっただけです」

アルト

「フッ、そうか……。ルミアは案外優しくて良い女なんだな」

ルミア

「……えっ」

なんて会話をしていると、少し後ろから気まずそうに着いてくる少女、ラナリーが口を開いた。

ラナリー

「あの……ボクはこれから……どうすれば……」

アルト

「さっきルミアが言っただろ？ お前を束縛するものは去った。だから、これからはお前が自分の意思で行動するんだよ」

ラナリー

「でもボクは、旦那にも迷惑をかけたし……ルミアにも。ボクが居ても良い居場所なんて……」

ラナリーがしょげていると、ルミアが名案を閃いたような顔をしていた。

ルミア

「なら、私のいるガーディアンズに入らない？ 多少の罪があっても、あそこの

人達はそれを受け入れてくれるヒトばかりだから」

ラナリー

「でも……」

アルト

「入隊すればどうだ。ガーディアンズに入ることの良いきっかけが

出来る

かもしれんぞ」

ルミア

「アルトさんもどうですか？ フリーの傭兵でまだ行くアテも無いんでしょう？」

ガーディアンズなら歓迎しますよ」

アルト

「いや……俺は遠慮しておくよ。堅苦しいところは苦手だしな。ラナリー。ルミアは決して悪いようにはしないはずだ。それに、仕事のデキる女の子とか俺は格好良いし可愛いと思うけどな」

ラナリー

「……………ぴくっ」

ルミア

「……………ぴくっ」

何だ？ 急に二人の様子が……。

ルミア

「ゴ、ゴホン。あれですね、ガーディアンズの入隊試験はかなり厳しいですよ？ 貴女でクリアーできるかどうか……」

ラナリー

「そんなのボクならできるよ！　ボクは決めた。ガーディアンズに入る。」

そしたら旦那はボクのこと可愛いと思ってくれるよね？」

アルト

「ああ、勿論だ」

ルミア

「ア、アルトさん……ッ！　いけません！　まだ、ラナリーを信用するのは早いです！　まだ何か隠しているかもしれないよ  
！！」

ラナリー

「うっわー、その言い方。本当に昔近くに住んでたニューマンのオバサン

そっくりで、ちょっと気持ち悪いわぁー！　ね、旦那、若い子の方が

瑞々しくて可愛いよねっ！？」

アルト

「あ、ああ……？」

ルミア

「……ッ！　アルトさん！　早くラナリーから財布を返してもらって下さい！！　ラグ・シユリアスでの代金、誰が出したと思ってるんですか！」

アルト

「わっ、こら暴れるな！　傷口が広がるぞ！  
ラナリーもやめろ！　引っ付くな！　もー、どうなってるんだこ

れー！！！」

俺は暴れるルミアとラナリーに挟まれながら、長く続く帰りの道程に思いを馳せた。結局、事件は解決したものの、最初の目的であるバドウの捕獲には失敗してしまった。

あいつはこれからも、俺やルミア……そしてラナリーを狙ってくるだろう。

今後のことに予断は許されないと感じるも、俺はその中で唯一実った新しい希望を嬉しいと感じて、いつしか心が温かい気持ちになっていた。

- Now loading -

ルミア

「……と、言うわけなんです」

エミリア

「ふ~~~~~ん」

過去の記憶からリトルウィングへと戻った俺は、何故か一部始終を聞いて不機嫌になるエミリアに疑問符を浮かべた。

アルト

「チエルシーさん、エミリアのヤツどうしたんだ？」

チエルシー

「ウーン、アルトはもっと勘の良い方かと思ってたんダケド、ソコナコトは

無かったみたいネ」

アルト

「えっ……？」

チエルシー

「恋のライバルが出来たってことヨ」

アルト

「な、ちょ、えっ……！？」

俺はチエルシーさんの言葉にふいを突かれてしまった。3ラウン



ド目1勝1敗の大勝負。気づけば俺はチエルシーさんのベ○が放つサイコ○ラッシャーによって、KO負けにされてしまっていた。

チエルシー

「フフ、ヤッタネ。コレで前回の負けは帳消しヨー！  
勝負に甘えは許されないのヨー！」

アルト

「く、くっそー！！」

チエルシーさん、もう1回！ もう1回だ！」

チエルシー

「何度やつても同じことネー！」

再び新たなラウンドが開始された。どうやら、ルミアとエミリアの方も何故か会話が激化し始めたようだ。

こんな感じで、今日も依頼の無い平和な一日がリトルウィングで過ぎていった。

## キャラクター設定？

【超星恋憚インフィニティ・俺と少女のポータブル】

【キャラクター設定？】

【登場人物の紹介】

オリジナル  
主人公

・名前〓アルト・シュバイツァー

・種族〓ヒューマン

・性別〓男

・年齢〓18歳

・身長〓179 x m

・体重〓66 k g

・服装〓ジャツジメントコート・その他

・特徴〓髪型（短髪・ライトブルー）・瞳（色・エメラルドグリーン）

・性格〓冷静沈着・人情家・基本的に温厚な常識人

・設定〓本作品の主人公。落ち着いた性格の少年で、フリーの傭兵だったところをリトルウィングに入社。以降、社内の優秀なキーマンとして任務をこなしている。入社した目的は生活費用という名目が表向きだが、その実では彼女が欲しいという願望を持ち合わせている。身の丈を理解し、度々にチームメイトとの仲を取り持つ、自分の妹となった幼女に対して兄の世話心を発揮するなど、人情溢れ

る人間である。レベル200と豪語する彼はそれに見合う実力も持ち合わせているが、自分からそれに関しての過去を話すようなことはしない。本人は自覚していないが、平和的な自分と正反対の人格を持つ、いわゆる二重人格者である。

- ・パートナー（オリジナル）
- ・名前（現在募集中）
- ・種族（闇の集合体）
- ・性別（よう　　よ）
- ・年齢（不明）
- ・身長（推定100cm）
- ・体重（自由自在）
- ・性徴（つるぺたん）
- ・服装（ワンピース・ツインリボン・ラッピーサンダル）
- ・特徴（髪型（長髪・ツインテール・シルバー）・瞳（色・ブルー））
- ・性格（純粹無垢・いたずら好き・お茶目）
- ・設定（本作品に登場する主人公のガイド役。存在そのものがダークファルスであり、闇の集合要素である。数々の事件により世界のフォトンバランスが崩壊し、この世界に降臨したとされる。本来のダークファルスは封印されており、彼女は別世界のダークファルス。1000年に一度現われるはずの彼女が同世界に存在することで、世界崩壊序曲の影響を示唆している。大いなる光の影響を受けているとされるアルトに助けを求め、以後リトルウィングでの生活に馴染む。アルトが相手なら対消滅するはずの悪の部分を否定せずにいることが出来る。



## 考案プロット1（前書き）

10 / 1

現在、検討している考案プロットその1です。

ややストーリー成分が増し、代わりに日常パートが少なくなっています。

未設定部分に関しては今後の対応とします。

## 考案プロット1

### 一期の内容

- ・主人公とパートナーの幼女
- ・エミリア・ルミア・ナギサの三人からのハーレム
- ・他キャラ（サブ）からの常時ハーレム
- ・三人を交互に展開し、それ以外のエピソードを交えて24話構成
- ・一期に関して言えば、ライバルや別キャラは存在しない。

- ・キャラ固有イベント（メインヒロイン3人）
- ・全員参加イベント（ストーリー）
- ・サブエピソード（余談）

### ストーリーサイクル

- ・キャラ・サブ・キャラ・メインの順にストーリーを展開する四話サイクル

- ・キャラ固有イベントが1つ。（検討）
- ・サブエピソードが1つ。
- ・全員参加イベントが2つ。（要検討）

- ・22〜24話は例外的に最終話へのメインストーリー。（変更あり）

- ・1〜4話のみ変則的にメイン・サブ・キャラ・メインとします。（変更あり）

### 合計24話構成

- ・キャラ固有エピソード9回（エミリア3回・ルミア3回・ナギサ3回）
- ・エミリア（3話・9話・17話）ルミア（5話・11話・19話）ナギサ（7話・13話・21話）

- ・サブエピソード6回（七天の護法4回・ハルナ2回）
- ・（2話・6話・10話・14話・18話・22話）
- ・ストーリーイベント9回（1話・4話）（8話）（12話）（15話・16話）（20話）（23話・24話）

## ストーリーイベント

- ・幼女の記憶を取り戻すまでのお話
- ・何故そうなったかの話
- ・痴女集団の話
- ・欲望の象徴を支配するもの
- ・幼女の捕獲&消滅
- ・主人公が女をこますからいけない!! 幼女という理由の排除
- ・ボスは元アルトの恋人、男に対する妬みや嫉妬
- ・愛することとは、選び抜くこと（アルト説）
- ・ダークファルスは利用されていた。ラスボスは幼女、表向きボスは彼女。
- ・彼女は幼女からダークファルスの概念を構築していると言われる、何らかのフォトンを奪っていた。
- ・それは人の精神を助長するフォトン。ゼロ・フォトン（エロ・フォトンとはアルト談）
- ・アルトと別れた後、以前に幼女を捕獲して人体実験を行っていた。
- ・元々はそんな性格ではなく、別の男ボスが彼女をそそのかして闇フォトンを注入した。
- ・男の目的は幼女の捕獲。そして、自分が新たなダークファルスになること。
- ・最終的に男と女がくっついて幼女を助けて帰還。
- ・幼女は自分の居場所を尋ねる。アルトは、幼女の悩みを解決して、今日も女の子に追われる日々だ。

## 【メインストーリー】

- ？
- 1 主人公、リトルウィングに入社。女性から歓迎の嵐。
  - 2 ジェクスから送られてきた新しい依頼によってフォトン開発所から幼女を救出。
  - 3 記憶喪失の幼女によって力を与えられる。幼女と生活。ハーレムの開始。
  - ？
  - 4 最近、リトルウィングの男性が次々に行方不明になっている事件。
  - 5 潜入捜査。女性だけの秘密組織。そこで女性を救出。
  - 6 実は、彼女も記憶喪失だという。かくまうことに。
  - ？
  - 7 ジェクスが会いたいという。ゼロ・フォトンについて。
  - 8 女性がゼロ・フォトンに興味を示す。今度はガーディアンズで事件発生。
  - 9 ルウやマヤ達と協力して男性陣の救出。
  - 10 結局、数人のガーディアンズがさらわれてしまった。
  - ？
  - 11 住宅街の一部にモンスターが侵入したとの情報。
  - 12 退治に行く。順調に物事が進む中、怪我をした男性がいた。
  - 13 助けて話を聞く。そうこうしていると、また新たなモンスター。
  - 14 それが終わった瞬間、突如リトルウィングに出現した謎の敵。
  - 12 アルトは戦うが、敵がダークファルスの力を使用していると幼女が言う。
  - 13 逃げ出す。一体何者なんだ……。
  - ？
  - 14 一向に見つからない秘密組織のアジト。
  - 15 大型イベントで男手を使用するという情報。
  - 16 アルトを含めた女性チームが秘密裏に警備。



- 17 ・モンスターと組織が現れて会場で暴れる。その中にいた指揮官を発見。
- 18 ・逃げる指揮官を追って謎の施設へ。倒すがフェイクだと知る。
- 19 ・脱出を図るが、唯一のエレベータは男には致命的な重量制限があつた。
- 20 ・みんなして服を脱いで脱出。怒られる。
- ？
- 21 ・ジエクスに再度フォトン開発施設を調べて欲しいとの依頼。
- 22 ・調べに行くとか何かの破片が。そこで他の場所でも研究を行っているという場所へ向かう。
- 23 ・調べてもらう。どうやら、これはゼロ・フォトンの欠片らしい。
- 24 ・そうしていると、襲撃。再び、仮面の男が姿を現す。
- ？
- 25 ・秘密組織の奇襲。リトルウィング抗戦。
- 26 ・怪我をした女の子を助ける。
- 27 ・実は以前にかくまった女性は黒幕だった。
- 28 ・代わりに幼女がさらわれてしまった。
- ？
- 29 ・幼女を助けに敵の本拠地へ。
- 30 ・最終メンバーはアルト・エミリア・ルミア・ナギサの四人。
- 31 ・愛を試される。
- 32 ・何とか辿り着いたアルトだったが、全員が捕らえられていた。
- ？
- 33 ・男が出現。以前助けた男だった。
- 34 ・女が男をボコる。そして、アルトと決戦。
- 35 ・だが、アルトの勝利。女は逆上して幼女に手をかけるが失敗。
- 36 ・ダークファルスの意味が覚醒する。それを撃破。
- 37 ・幼女を救出して、全員で帰還。
- 38 ・幼女と一緒に新たな人生のスタート。ハーレムは続いていく。

【サブストーリー】

『七天の護法』

- ？
- 1 ・ 出かける前にナギサに待たされるアルト。だが、もしもじして答えない。
  - 2 ・ 秘密の部屋へとやってきたアルト。
  - 3 ・ ここではあらゆる萌えの情報を買うことの出来る場所。
  - 4 ・ 早速、みんなで持ち出したアイテムを競売にかける。
  - 5 ・ 色々と抗議。
  - 6 ・ 最終的にヒューガとシズルが共同購入。
  - 7 ・ 帰ってきたアルトはナギサに間違えて交換していたと言われる。
  - 8 ・ 爆死する二人。
  - ？
  - ？
  - ？

『涼宮ハルナ』

？サブストーリー1回目

第二話「リトルウイングの憂鬱」

- 1 ・ この中に変態、怒変態、超変態がいたら私の所に来なさい、以上。
- 2 ・ そんなメッセージがリトルウイングに送られてきた。
- 3 ・ それを見てみると、ある人物が登場。涼宮ハルナである。
- 4 ・ 新しい宣伝動画に女の子を1人借りたいというハルナ。SNS 団。
- 5 ・ 断ると、前もって捕獲しておいたエミリアにエロいことをするという。
- 6 ・ 仕方なく決闘に持ち込む。勝負は三本先取。

- 7・相手の顔面に白い色の水鉄砲クリームをかけた方の勝ち。
- 8・結局相打ちで終わり、ハルナと別れる。
- 9・友情が深まったハルナは、いずれ再戦すると言う。
- 10・そして、リトルウイングはべつとべとの白い液体まみれになつてしまったのだ。

？サブストーリー2回目

第十四話〃リトルウイングの困惑

1 1・

1 2・

1 3・

1 4・

1 5・

## 【キャラストーリー】

『エミリア編』

？キャラストーリー1回目

第三話〃

？キャラストーリー2回目

第九話〃

？キャラストーリー3回目

第十七話〃

『ルミア編』

？キャラストーリー1回目

第五話〃

？キャラストーリー2回目

第十一話〃

？キャラストーリー3回目

第十九話

『ナギサ編』

? キャラストーリー 1 回目

第七話

? キャラストーリー 2 回目

第十三話

? キャラストーリー 3 回目

第二十一話

## 考案プロット1 サンプルストーリー（前書き）

サンプルストーリー

1話の序盤ですが。

## 考案プロット1 サンプルストーリー

A c c e s s - 1 -

クラッド6・リトルウィング

今日はリトルウィング入社日。

期待を膨らませて入社する俺の名前はアルト。アルト＝シュバイツァーだ。自慢じゃないが、そんなじょそこのガーディアンズよりは、余程器量があるつもりだ。

フリーの傭兵として活動していたが、それも今日から変わる。

何、何故入社したのかだって？

フツ、そんなことを聞くなよ。健全な男子なら誰にでもある考えじゃないか。

それはつまりだな。

ゴホン。

女の子にモテまくりたいからに決まってるじゃないか！

第一話 - 俺の立場がこんなにハーレムのわけがない -

アルト

「な、何だこれ……」

リトルウイングへと足を運んだ俺は目の前の出来事に言葉を失った。広がりを見せるペンタゴンの形をした室内に、鮮やかな飾りつけと『男子歓迎』の幕が掲げられていた。

パンツ！ と鳴らされるクラッカー！

女性A

「リトルウィングへようこそ！」

女性B

「アルトさん、これから宜しくお願いしますね〜！」

小奇麗で可愛げのある衣装を身に纏った女性少女お姉様方がずらつと並ぶ列を作って俺を歓迎していた。た、確かにこれは俺の望んでいたことかもしれないが、一体どうなっているんだ。

俺は動揺しつつも、そこらへんの事情を聞こうとする。

女性A

「はいはい！ 一名様ご案内！」

女性C

「ほらあ、アルトくん。早く、早く〜！」

アルト

「うわっ、ちょ、ちょっと……！」

そんな暇もなく、俺は色とりどりに輝く女性達に連れられて、リトルウィングの事務所へと運ばれていった。



クラウチ

「あん？ 何だオメエ、随分と華やかだな。

まるでリゾート地区の帰りみてえじゃねエか？」

アルト

「ア、アンタがクラウチ・ミューラーか……これは一体  
どうなっているんだ」

俺は頬に唇の形をした赤い口紅の跡を幾つも残したまま、この  
責任者であるらしい男ビーストの前で抗議した。首にさげられた花  
飾りがしゅらんと揺れる。

クラウチは椅子をくるりと回して、こちらを見つめてきた。

クラウチ

「ハッ！ そりゃオメエ、アレだよ。カッコイイ男子が入社して来  
たら

誰だって歓迎のひとつもしたくなるモンだろうが。つまり、お前  
さんは

格好良い。そう思われてんだヨ。良かったじゃねエか。ガハハッ  
！！」

アルト

「何だと……」

俺の胸が僅かな高揚感を示す。マジかよ、いきなりそんなんで良いワケ？ 何か夢オチでしたとか、そういうんじゃないだろうな。

自分の頬をつねってみるが、中々にじんじんとした痛みが走る。どうやら、夢では無さそうだが。

そんな疑問を、クラウチはすぐに解消してくれた。

クラウチ

「知ってるか。今、このリトルウィングは急激な男手不足なんだヨ。一応ここは軍事会社だからな、女と言っても腕のたつ奴らばかりだ。」

だからこつちからすりゃ、仕事には不満はねえし苦勞はしてネエ。しかし、色恋沙汰はそうはいかねえ。言ってる意味、分かるよなあ？」

アルト

「っ、つまり……」

俺はごくりと生唾を飲んだ。何気なく吐かれた言葉だったが、その意味を肯定するものはひとつ。

クラウチ

「リアルハーレム、つつうこつたな」

アルト

「マ、マジですかぁー！っ！？」

ニヤツと無精ヒゲの下で不敵な笑みを漏らすクラウチに、俺の心臓はどんどんと脈打ちはじめる。考えてもみなかった「ハーレム」という言葉から伝わる響き。普通に生きてちゃそうそう味わえない世界の裏側に、いともあっさりと触れようとしているのだ。

これが、喜ばずにいられるだろうか、否！

アルト

「いよっしゃあああああッ！！」

俺は拳を突き上げて歓喜に打ち震えた。だってハーレムだよ、ハーレム！ 煌くように可愛い美少女達がよってたかって酒池肉林で

すよ！？　ワ・イン片手にウチ・ワで扇がれる日もそう遠くないんじゃないのか！

事務所の中にいる俺は周囲から不思議な視線で見られた。だが、もうそんなことはどうでも宜しい。目的が手段に変わる日も近いんだからな。

クラウド

「まア、俺は再婚しちゃったし、仕事さえちゃんとやってくれりゃあ何も文句はネエ。まア、若い内だからな。青春を謳歌しとけよ」

アルト

「フツ……さすがにリトルウィングの責任者だ。良き理解者であるな。」

レベル200の俺でも感心することがあったと思えば、こういうところから

感謝パワーが蓄積されていくというわけだな」

クラウド

「せいぜい気をつけてくれヨ。何せ、想像以上に大変な状況かも知れねエからなア……」

アルト

「大変な状況？」

クラウド

「ああ。さっき言ったコトはまあ、半分冗談なんだが、半分はマジ

なんだ。

つまり、男手不足には原因があるってエことさ」

アルト

「お、おい。待て。じゃあ、それを解決したらリアルハーレム崩壊になっちゃうんじゃないのか？」

クラウチ

「そりゃあオメエさん次第だな。何せ、カワイイ女はカッコイイ男に惚れる。」

カッコイイ男はカワイイ女に惚れる。

相手が好きになるのは、どっちも似たような理由だろ？  
器が試されてんのサ」

アルト

「フツ、確かにな」

俺はクラウチの用意していた依頼データを携帯端末に受信する。  
出力すると、端末を中心とした小型のスクリーンが空間に出現し、  
精細な情報を紡ぎ出していく。

その中に、上空から撮影したと思われるスクリーンショットが掲載されていた。半開いて煙を巻き上げる研究施設のような場所だ。

クラウチ

「依頼主は『J』と言う名の男からだ。依頼内容は、フォトン研究施設の警備。」

クラッド6の工業区で新しい実験を行うらしい。

この中でも、一番施設に近いリトルウィングのメンバーに依頼が回ってきたってワケだ」

アルト

「フム……」

クラウチ

「そこで、まずは傭兵時代に『スターライト・フェンサー明星の二刀使い』と呼ばれていたお前の実力チェックと

行こうってワケだ。まあ、時間も内容も厳しい仕事だ。これを断ったとしても

オメエには何も追求しねエよ。ケド、オメエさんが女性から支持を得ようってんなら、

このくらいの事件はパパッと解決してもらいテエもんだな」

アルト

「成る程な……分かった。早速、行ってくる。何、心配はないさ。何たって俺は、あの『スターライト・フェンサー明星の二刀使い』なんだからな」

頼むぞ、というクラウチの言葉とともに、俺は部屋を後にする。

ウィーンと開く自動扉を開放して、再び熱気に包まれた空間へと舞い戻った。

やはり、そこには有名人の追っかけのような女性達の群れがあっ

た。さすがに現状を理解してしまった今では、当然のように視線を集められると気恥ずかしいものがある。

女性A

「あつ、戻ってきたわー！」

女性B

「アルト様あゝ、私をパーティに誘ってえゝん！」

女性C

「ダメよ、あたしが一緒に行くんだからね!!」

アルト

「ま、待てっ！ 俺はまだそんな急に物事を決められないんだ！ 後にしてくれっ!!」

紅潮した頬を隠しながら、俺は黄色い声援をあげる彼女達の前から姿を消した。猛ダッシュで地下にある出航所を目指す。幾らなんでも、さすがにあんなにたくさんの女性に声をかけられると、ちょっと怖くなってしまうでしょう……？

ワープ装置が俺をフォトンの粒に包んでいく。

まずは、余っている時間に小型端末でリトルウィングの人員チェ

ツクと依頼内容を再確認する。場所はクラッド6研究区・フォトン研究施設。『J』という人物の素性は、やはり謎のままだ。

しかし、いくら俺に託されたミッションとはいえ、仲間が欲しいのも事実。でなければ、フリーの傭兵を卒業した意味も薄い。

ワープ装置に転送されて、俺はシップの深い場所へと降りてきた。少し落ち着いた場所で、宇宙空間の映る窓とベンチ、もう少し進んだところには、軽食店やら売店がひっそりと経営をしていた。

仲間探しついでに、少し売店でメイト類でも買っていくか。そう思った矢先、奥の狭まった通路の方から、口論する声が聞こえてきた。

何かあったのだろうか。気になって近づいていくと、視界が鮮明になっていく。

そこには、金髪でショートヘアの少女と、長い黒髪をした少女の二人が会話をしていた。

A c c e s s - 2 -

こじんまりとした商店街の向こう。奥へと続く通路の中で、二人



の少女が口論をしていた。

金髪の少女は赤い服にネクタイ、スカートと少しラフめな今風の着こなしをしている。覇気があるのか無いのか分からない感じだが、とにかく勢いのある印象。

逆に、黒髪の少女は落ち着いた表情で凜とした様を見せている。白を基調とした服装に黒生地のスッキング。片目には眼帯をしていた。

この二人もリトルウィングのメンバーだろうか？ 俺は、さり気なく様子をつかがいながら、彼女達のいる場所へと足を近づけていった。

アルト

「……………」

目の前まで寄った俺の姿に、彼女達もようやくと気づく。金髪少女の方が先に声をかけてきた。

?????

「あつ、アンタさっきの広間にいた新人クンじゃない。

大変だったでしょ、今すんごい男手不足でさ、もう男が入ってくる度に

こんな感じで大騒動。いくら困ってるって言っても、耐え切れなくなつて

辞めちゃう子とかもいるしさー。みんなも少し節操持つて欲しいよねー」

アルト

「成る程な……クラウチの言っていた大変という意味が分かったような気がするよ」

???

「そうそう。最近は特に年の差まで構わずに追っかけが出るもんだから、

ユートのヤツもビビッちゃってね。どうしたもんかなーってさ」

確かに、これは女耐性のないピュアな人間なら一網打尽だろうなあ。かく言う俺でさえ、少し引いたくらいだし。まあ、女の子に追われるっていうシチュエーションそのものは良いんだがな。

隣にいる黒髪の少女も話しかけてくる。

???

「……見たところ、相当な使い手のようだな。身体から滲み出る才

ーラが

一般人のそれとは似ても似つかんぞ」

アルト

「……………」

エミリア

「こらナギサッ！ 入ってきた新人クンに、いきなりそんなコト聞いちゃダメだよ！

ごめんねっ、別に悪い子じゃないからさ、これからも仲良くしてあげてね。

そうだ、あたしはエミリア。エミリア・ミュラー。んで、こっちがナギサ」

ナギサ

「すまない。宜しく頼む」

アルト

「ああ、こちらこそ宜しく」

早速、俺は彼女達とパートナーカードを交換した。傭兵の名刺みたいなものだ。

にしても、すぐに俺の経歴を感知するとは…………この子もきっと、相当な修練を積んでいるんだろう。

アルト

「悪いな。とにかく、緊急の依頼というわけではないんだが、せっかくフリーの傭兵を

終えたから、ヒトと一緒に行動したいんだ。早速ですまないが、一緒に

ミッションへ参加してもらう訳には、行かないだろうか？」

エミリア

「ん、別にいいよ。丁度、依頼とか無かったし。ナギサも行くですよ？」

ナギサ

「ああ」

エミリア

「よっしゃ、決まり！ んじゃ準備して、五分後にもう一度集合ね」

アルト

「ああ、分かった」

一旦、俺はエミリア達と離れた。近場の売店で用を足し、補給物資やらを買い込んで店を出ると、休憩所のような場所で、ナギサという少女が宇宙空間の見える窓から外を眺めていた。

特に用事があったわけじゃないが、細かいところも良く分からな  
いし、それとなく世間話でもしようかと思って近づいた、すると

風を裂いて、何かが鋭い曲線を描いた。それは、刹那的な速さで接近し、俺の顔面に向かって鮮やかに飛んできた。だが、彼女の一瞬の動作を裸眼で見切った俺は、ずっと二本の指を突き立てる。

彼女が繰り出した剣の刃を、俺は指先で受け止めていたのだ。

ナギサ

「　　良く、見切ったな」

アルト

「……いや、僅かに対応が遅れた。ナギサさんがナイフじゃなくて、もっと別の

獲物を使っていたら、危なかっただろうな」

ナギサ

「フッ、そうか……」

彼女は微笑んで、ナイフを鞘に収納した。咄嗟のこととは言え、これが恐らく彼女が今まで経験してきたものに対するひとつの答え。戦場の中で磨かれたスキルなのだろう。

軽い挨拶を終えると、ナギサさんが口を開いた。

ナギサ

「君は、どうしてリトルウィングに入社しようと思ったんだ？」

アルト

「……女の子とイチヤイチャしたかったからです!!」

ナギサ

「……？ 良く分からないが、それはリトルウィングの社員が、男性に対して積極的にやっているもののことか？」

俺はさっきの女性達のことを思い出した。

アルト

「い、いや、俺は出来れば、もう少しソフトな関係をですね……」

ナギサ

「ふむ。どうやら、君は他の人間と違うのだな」

アルト

「他の人間？」

ナギサ

「ああ……」

彼女は窓に手を添えてゆっくりと口を開いた。

表情の薄い彼女の影が、窓に映し出される。冷静で大人っぽい顔立ちだが、どこか儚げな印象のある表情で、どこか遠いところを見ているような感じだ。

ナギサ

「以前、ある男に教わったのだがな、良く分からないが、男性は美少女を見れば

ときめかずにはいられないらしい。だから、入社した男は、大抵この状況を利用して

女に何らかの干渉をしてくる」

アルト

「……例えば？」

ナギサ

「そうだな。例えば、このようなことだ」

アルト

「……えっ、ちょ……！？」

俺は突然、ナギサさんに手を掴まれた。繊細な指先が俺の手に絡んでくる。

手の甲に重ねて押さえられた掌は、彼女の豊満な胸に当たるように、上からそつと生地を圧迫するように押し付けられた。柔らかな感触、手が痺れを起こすような感覚に酔いしれる俺をよそに、彼女はぎゅっと押さええている手に力を込めてきた。

俺は急な状況に、戸惑いを隠しきれなかった。

ナギサ

「入ってきた男は、こちらがスキを見せるとすぐにこのようにして、何故か

私の胸に触れてくる。その時、何故か私は普段感じている以上の悪意を肌で受け止めているんだ」

アルト

「ナ、ナギサ、さん……ッ」

ナギサ

「けど、安心したよ。どうやら君は、本質的には穏やかな人間であるらしい。

これからもリトルウィングで活動を続けてくれ」

アルト



「あつ、は、はははいつ!？」

真つ赤になった俺は、余りにも彼女から伝わってくる感觸にどきまぎするので、手を離そうとした。そこで、少し後ろの方から声がした。

エミリア

「……何、早速アンタもそういうキャラなワケ？」

アルト

「いや、ちちち、違う! 誤解しないでくれ!  
た、確かに入社した理由は女の子とイチャイチャする為だ、が  
」

エミリア

「問答無用おおーっ!！」

「こがばぎゃん!!」

俺は顔面に根強いパンチを食らって悶絶した。

何か、これから大変なことになるそうだ。そんなことを考えて、

俺の意識は暗闇に落ちた。

**第五話？ - 暗闇の部屋 - (前書き)**

幼女の名付け親募集、あと数話で締め切り予定！

## 第五話？ - 暗闇の部屋 -

暗闇の中で、そつと炎の明かりが灯された。ゆらゆらと蠢く紅い灯火のみが、幽遠に蔓延る闇の支配下の深遠さを体現していた。

灯火の僅かな音、そして、その中には幾つかの人物の姿が見えた。表情には影が生み出されており、判別することは難しい。だが、彼らの声だけが、暗闇の世界でぽつりと響き始めた。

???

「フフフーン……集まったのはこれだけか……」

微かに映る銀色の髪をした男が、感情の薄い抑制のある声で呟く。

次に、蒼髪を散らす男が、それに答えた。

???

「3人か。まあ、俺は別にいつものことだから気にしないと言えば気にしないがな。戦地での情報収集がヤツの得意分野だしな」

???

「フツ、確かな。あいつの行動力は我ら『セブンス・ガードナー 七天の護法』の中でも最も優れている。悔しいが、それは認めざるを得んな。そのことについては貴方が一番良く知っているのではないか？」

銀髪の男は、もう一人の似たような髪色をした男性に言葉を投げた。だが、銀髪というよりはやや白髪に近く、薄暗い部屋の中でも分かるような肌の白さと特徴的な眼鏡のフレームが、彼の印象をより明確なものにしていた。

???

「無論ですよ、彼がそういう人間だって言うのは、昔から百も承知ですからねえ。やれやれと言う感じでもありますが、中々に頼りにはしていますから。それよりも????君、例の物……本当に持ってきて頂けたんでしょうか」

???

「ああ……」

スツ、と蒼髪の男の懷から差し出される一枚のスクリーンショット。そこには、一糸纏まとわぬ姿で入浴中の年頃の美少女が。流れるような黒髪を優雅に掻きあげてシャワーの湯を身体で受け止めている巨乳の女性……ナギサという美少女の入浴シーンが映されていた。

突然、そのスクリーンショットを見た後ろの男2人が雄たけびに近い驚愕きょうがくの声をあげる。軽やかに鼻息で自らの謙虚さを男らしくアピールした蒼髪の男と、必死に食いつく2人の男。

???

「く、くそつ貴様！　こんなに激レアなスクリーンショット……  
一体どうやって入手したと言うのだ！……」

???

「中々やりますね……これは相当の価値のある品物です」

???

「ええい、湯気が！　湯気が邪魔をして肝心の部分が全く見えん！  
おい????、薄消しの加工処理は出来ないのか!？」

???

「これは絶妙すぎて何とも……いえ、彼女の全身を機械を使い  
ドット単位で描写し直せば、あるいはライン程度は明細なものに  
なるとは

「思います……このままであるから価値があるとも言えます」

???

「ぐう……言いたいことは分かる、分かるが……!!  
目の前にこんな育った……お、お、おおっおおっばば、ばーい！  
があると言うのに、何も手が出せんとは……ッ!」

蒼髪の男は、名残惜しむ2人の前からスクリーンショットを離していった。再び、懐へとしまわれる。

???

「これは俺が命がけで入手したスクリーンショットだからな。そう簡単には渡せないさ。欲しいのなら、これに見合う現物かもしくは……」

???

「金……ということですね」

???

「そうだ。最低でもこのくらいはもらわないとな」

すると男は、折りたたんでいた自分の指をひとつ、ふたつと開いていく。二本の指が、直線を描くようにピンと広げられた。

すぐに嬉々とした笑みを浮かべて声を荒げたのは、銀髪の男の方だった。

???

「フッフハーン！ 200メセタか、良いだろう、そんなに安い金額なら





???

「ふざけるな！　そ、そそ、そんな金額、払えるわけが無いだろう！  
この間だって、コミ　でインヘルト社の軍資金をたっぷり使っ  
てきたら

ジジイに小遣い3か月分没収とか言われたんだぞ！？　払えるわ  
けがない！」

???

「ほう……なら、この話はなかったことにして良いんだな？」

???

「待ってください！　1万メセタでどうですか！？　確かにそれには  
それだけの価値がある！　1万で、何とか……ッ！！」

???

「フッ、まるで分かっていないな。お前たちは、これを別のものと  
勘違いしているんじゃないか？」

???

「何………どういうことだ？」

蒼髪の男は、再度スクリーンショットを取り出した。そこには、  
やはり入浴中のあられも無い姿のナギサが映っている。恍惚とした  
表情とすらっと流れる曲線美が、灯かりに照らされて一層美しく輝  
いている。

???

「お前らが普段から目にしているのは、所詮社会で慣らされた二次的な産物のもの。全て代すべき不純物に過ぎん。二次元がどうこうと

言っているわけじゃない。今までのものがリアルから生まれた二次だと

するのなら、これは二次から生まれたリアル……つまり、現実的存在する

美少女の裸体を撮影したもの、ということになる。更にこれは世界を崩壊

へと導く意味を含んでいるんだが、仮にこれが『二次の二次から生まれた

リアル』だとするなら？ 分かるだろ、意味がさ……！」

2人の男は呆然とした。二次の二次から生まれたリアル……それは、どの世界に於いても存在し得ることのない究極のリアルであり、ハッキリと言うなら二次元の女の子なのに実在の世界にいて、そんな女の子の入浴を撮影してきました、と言っているようなものだからである。

無論、これらの全ては混沌というアフターファクターを孕んでいるので、誰にも理解できることのない禁断の要素だ。故に、彼らの脳内には物凄い価値のある作品ということだけしか分からなかったが、それでも、いつかこの世界を超えた先に広がる黄昏の世界に行けば、きっと理解し合えるのだろう。

とにかく、意気込みを感じた2人は、おおいに納得する。

???

「そういうことだ。まあ、そんな話は抜きにしても、これは俺らの選考基準の中でもランクA++に相当するスクリーンショットだな」

???

「……僕が、2万で買いましょう。これからの、僕と君との協力関係を」

示す為に」

???

「ほう……物分りがいいな」

???

「待て????。貴方だけ独占しようと言っのか、そんな宝物を。1万ずつ出そう。そして、必要なときに2人で分け合えばいい」

???

「どうやら決定したようだな。では、取引は明日……場所は適当に決める。」

それじゃあな」

蒼髪の男が、暗闇の部屋で立ち上がった。そのままカツカツと歩

みを進める。その背中を彼らが引きとめた。

???

「待て。まだ、これからの議題が終わっていない。そこで交渉なんだが

俺も貴様と今後もこのようなレア物を取引して欲しい。俺はいつでも

買うつもりだ。だから……」

???

「次のステップに進めと？」

???

「僕の方からもお願いします。ここまで来てしまえば、もう後戻りは出来ない。貴方の示す力が、頼りなんです！」

???

「それに、お前は七天の護法から抜けることは出来ん。分かっているな？」

???

「無論だ。抜けるつもりも無い。それではな……」

歩み出した男の背中に再び声が走る。

???

「ま、待ってくれ！ もうひとつ、俺からの最後の頼みだ！

……危険だということは承知している。

だが、それでも俺は                    の                    をして欲しいんだ！」

???

「分かった。だが、やって見ないとわからん。

それなりに期待しておいてくれ、じゃあな」

男は部屋を去っていった。その後も、ゆらゆらと動く灯火が、  
2  
人の男を包んでいた。

テーブルに残された、一枚のスクリーンショットとともに。

## 第五話？ - リトルウイング・事務所 -

### 【リトルウイング・事務所】

幼女

「お兄ちゃん、お兄ちゃん！」

アルト

「ああ、幼女か。今戻ったぞ」

お帰りなさい！ とにこやかな笑顔で答える幼女の頭を数回撫でる俺。ここはリトルウイングの事務所。いつもの俺の居場所というわけだ。そして、いつものように駆け寄ってくるエミリアとユート。

エミリア

「ちょっとアンタ、何の連絡も入れないで  
一体どこに行ってたのさ！」

アルト

「俺は別に自由を束縛されたわけではないし、悪いことなんて  
いいいい一切考えていない。だから少しくつろがせてくれ」

ユート

「何で、どもってるんだ師匠？」

俺はよっころと、空いているソファ―に腰掛けた。やはり、このソファ―は快適だな。他のみんなも同じように対面のソファ―に座る。

エミリア

「まあ、別にいいけどさ。それよりも、今日はなんか変な依頼受けちゃってさあ、もう散々だったのよ」

ユート

「ウェディングドレスを着たエミリアが、ニートで親の金すすって生きている七光りの坊ちゃんと遺跡で一日デートする依頼のことか？」

エミリア

「そうそれ！　何か、脂汗ベッタベタで気持ち悪かったし、執拗に手を

握ろうとしてくるし、おまけにスカートの中に手を入れようとしてくるんだよ！　もうサイアク……ユートに尾行してもらって何とかモンスターが出たときは退治してくれたんだけど、そんな時まで

ヒトにセクハラしようとするし……」

アルト

「はっはっは。中々面白そうじゃないか。その場に居たら撮……  
じゃない、愉快的場面を鑑賞できたのにな」

俺が笑い飛ばすと、何故かムツとした表情で睨んでくるエミリア  
がいた。どうしたというのだ？ まさか、これがプレッシャーとい  
うやつか……？

アルト

「あ、いやまあ。ほら、あれだ。意外とそいつも本気で  
エミリア女史のことを好きだったかも知れないぞ。お前も黙って  
いれば

十分にアレだし、別に悪くないのかなとより考慮している俺が…

…」

エミリア

「む、本気で言ってる？」

アルト

「何がだ？ そいつがエミリアのことを好きかもしれない  
という話か？」

エミリア

「……はあ。別に、もういいよ。なんか疲れたから  
シャワー浴びてくるわ」



アルト

「あつ、おい？」

エミリアは俺の声が聞こえなかったのか、はたまたスルーしただけなのか、そのまま事務所を出て消えていつてしまった。うゝむ、俺は何かいけないことをしたのだろうか。

アルト

「エミリアのやつ、そんなに嫌だったのか？」

ユートも一緒に行ったんだろ？」

ユート

「うゝん。確かに嫌そうだったけど、今の表情は僕も初めてみたぞ。相当、怖かったぞ」

アルト

「ふ、むう……」

俺が悩んでいると、ウィーンと扉がまた開いて、今度は別の人物が姿を現した。

ナギサ

「……ん、どうしたアルト。浮かない顔をしているな。何かあったのか？」

ナギサさんは、かつかつと歩いてきて、さっきまでエミリアの座っていた場所に落ち着く。ぼふんと子気味良い音を立てて、彼女のまろやかな尻がゆっくりと埋まった。

アルト

「いやあ、なんかエミリアのやつがメチャクチャ怒っているみたいでさ。俺はレベル200だが、今のあいつにはとても勝てそうにないのです。ナギサさんは何か知らないですか？」

ナギサ

「ふむ……そうだな。ああ、それと敬語はやめてくれ。ずっと前から言おうと思っていたのだが、お前にそれを言われると妙に堅苦しいというか、何故かむずむずするのだ」

アルト

「そ、そうですか……じゃなくて、そうか。それはすまない」

俺は反射的に頭を下げていた。そういえば、俺はどうしてかナギサさんにだけは敬語を使ってしまった。まあ、何となく彼女の理知的な雰囲気圧倒されて敬語を使っていたんだと思うが。

それはさておき、とナギサさんが足を組みかえる。ついでに少女が丁寧にもコーヒーを入れて持ってきてくれた。さすが幼女だな、このコクのある高級感溢れた香りが、何とも幼女の下着の匂いを…。

幼女

「させてないからね」

アルト

「うつす……」

さすが幼女、なんかもう突っ込みの鋭さはピカ1になってきたな。ピカ1と言えはかの有名なピ○チュウ氏を思い出すな。昔は良く読んでいたとあるポ○モンのマンガに出てくるイエローというあどけない少女が好きだった。2文字目と3文字目に親近感を覚えるからか……？

ナギサ

「さて、アルト。お前はさきほど、エミリアの様子がどうだと言っていたな」

アルト

「ええ、言いました。いや、言った」

ナギサ

「ふふっ……私には見えるぞ。エミリアの考えていること、アルトの悩み、その全てが……」

アルト

「な、何とっ……!」

どこか妖艶に口元を吊り上げてほくそ笑むナギサさん。彼女から発せられるオーラは、既に悟りの領域へと到達しているような気がしないでもない。

ナギサ

「私もこの数日、色々な依頼やチエルシー、ウルスラ、クラウチやワイナールにまで話を聞いてみたのだ。ズバリ、愛とは何ぞや、と!」

アルト&ユート&幼女

「『な、何だってー!!』『』『』」

そこにいた全ての人物が驚愕の声をあげる。のは頭でありオームではない。それどころか、彼女は自信ありげに髪を掻き分けた。

おかしい、こんなのナギサさんじゃない。などと呟いてみるが、別にそこまでナギサさんに詳しくない事実を思い出して、少し悲しみに暮れる。

ナギサ

「つまりだな、エミリアは誰かに恋をしている……！  
誰かは全然分らない……！」

アルト

「おわっち」

少女

「ぷっ」

ユート

「おおー！？」

反応は人それぞれだったが、何故か急に少女がテレパシーを送ってきた。

少女

『お兄ちゃんから前に聞いたけど、お兄ちゃんってナギサさんのこと好きなんですよ？』

アルト

『ば、ばかつよせ。お、おお、俺はそそそんなナギサさんのことがすすす、すすす好きだなんて、そんなそんなそんなことは』

幼女

『お兄ちゃんのばーか。まつ、別にいいんだけどね。わたしは別にダークファルスだし、他人の色恋沙汰を眺めて一人楽しませてもらう』

のも面白いし。他人の不幸は蜜の味って言うしね』

アルト

『ほう……幼女の非行は蜜の味、と』

幼女

『わけわかんないけど、分かる気がするよ。ほんとお兄ちゃんって恋愛ごとになると奥手なのに、エッチな話は大好きだよ。まつ、中二病感染者なんてみんなそっか』

アルト

『フッ、さすがに幼女は分かっているな』

幼女

『ぜんぜん、褒めてないけどね！』

アルト

『うぐう』

ズズズとコーヒーをあおるナギサさんに、ユートが声をかける。

ユート

「なあナギサ。エミリアは誰のことが好きなんだ？」

ナギサ

「……む。さて、どうなのだろうな。私はチエルシー達から恋のてくにつく？ とやらについてある程度の話は聞いたが、エミリアの

気持ちは分らん。もしかしたら、アルト。お前のことが好きなかもしれない？」

アルト

「うぐつ、ナ、ナギサさん……！」

幼女

「ぷぷつ」

俺の中で、ナギサさんに描いていた繊細な想いにヒビが入った。これって間接的にフラれたというか、そもそもナギサさんが俺のことを全く意識していなかった件が浮上してくるんだが。

幼女

『まっ、今更感はあるけどね』

アルト

『うるさいな少女は、ガムテープで縛ってトランクに放り込むぞ。  
まあ、紳士でレベル200の俺は少女相手にそんなことはしない  
が』

ナギサ

「まあ、私にはこれ以上のことは分からないが、とりあえず  
頑張ってくれ。ではな」

颯爽と歩き出すナギサさんは、部屋から出て行った。そして俺も、

少女

「あれ、どこ行くのお兄ちゃん？」

アルト

「ああ……ちょっとした依頼の件でやらなきゃ  
いけないことがあつてな」

少女

「……そっか」



納得した少女が、とてとてと俺の後ろをついてくる。

アルト

「ん、どうした？」

少女

「レベル2、それが今回の闇フォトン発現だよ」

アルト

「えっ、マジ？ 何か事件あるわけ？」

「って言うか少女は、これから俺のやろうとしていることを全部読んでるんだよな？ その上で言っているのか？」

少女

「ふっふっん、勿論だよ。まあ、色々とハプニングはあるかもしれないけど、何かあったら手伝うかもしれないよ」

アルト

「く、くそっ。何だか今日の少女はエグイな。もしかして俺ってもう既に何かしらのフラグとか立てた訳？」

少女

「さあてね」

そう言うと、少女はふわふわと飛んで、ユートの元に戻っていった。ちょうどチェルシーさんやクラウチが事務所にやってきて、談

笑をし始めたようだ。

アルト

「むう、ハプニング、か。悪いことが起きなければいいが……」

俺は事務所を後にした。とりあえず、今回の目的は1つ。

ある人物（某インヘルト社の銀髪変態息子）から依頼された

『あの痴女であるエミリアの恥ずかしい動画（90秒）を撮影してくれ』

の目的を達成する為に、俺は彼女の部屋へとこっそりと向かうのだった。

第五話？・リトルウイング・社員通路・（前書き）

シズルの呼び方は悩みましたが「俺」にしました。  
僕が俺様でも良かったんですけどね（´・`・´）麻呂とか……

## 第五話？・リトルウィング・社員通路・

### 【リトルウィング・社員通路】

俺はエミリアの恥ずかしいシーンを動画撮影する為に、まずはエミリアの部屋へと向かっていた。丁度あいつは入浴中、今のうちに部屋に侵入すれば、いくらでも隙はある。

俺は懷からデジタルカメラを取り出した。ズームと光源をチエツク、バッテリーと動画撮影予定時間も把握し、ヒモ付きのカメラを首からぶら下げた。

かつかつと通路を進む。だが、俺の中に別の感情が沸き起こっていた。

だが……本当に良いのだろうか。いくらエミリア女子とは言え、あれでも普通の女の子だ。良心的な呵責なアレが、果たしてそれでいいのかと訴えているような気がする。

暗くなつた頭を下げていると、目の前に知っている顔の人物がいた。通路の壁に腰を預けて、手と足を組んでいる銀髪の少年だった。

???

「フツ……どうした。貴様ともあるうものが、随分と逃げ腰なのだな？」

アルト

「誰かと思ってみてみれば……ル〇ーシュじゃないか」

シズル

「シズルだボケエ！ 全く……ヤツと一緒に『アノ写真』で賢者モードを

終わらせて来てやれば、こんな体たらくとはな、失望したぞアルト」

アルト

「うつせーよks。早く青のうんちゃらシストに戻れよ。  
あの番組時間的に見れねーんだよボケ」

シズル

「貴様の都合など知るか！ 俺は早くあのような高画質画像を求める人間の性は大好きです」

アルト

「何か異国の翻訳文章みたいな喋り方だな」

シズル

「と、とにかく！ お前はおとなしく、あの小ざかしいエミリアを  
はずかしめるのにふさわしい動画を撮影してくればいいのだ！」

アルト

「ふうむ……」

わざわざリトルウイングまで来たシズルはやけに乗り気のようにだ。何かエミリアに人一倍敵意を持っているようだし、どうしたものかな。

悩んでいると、シズルが大きな溜息を吐いた。

シズル

「……クソッ、もういい。貴様に期待した俺が馬鹿だった。後は俺一人で

任務を遂行する。七天の護法の一人として。お前はそこで腐っている！

見損なったぞ、俺と貴様は性欲にかられた馬鹿仲間だと思っているたのに……！」

アルト

「……………」

シズルが怒って俺のカメラを奪う。……俺は、自分の気持ちのやり場に困って呆然とすることしかできなかった。俺の……俺の本心は一体どうしたいと言っのだろうか。

俺はエロいのか？ エロくないのか？

最初の目的を思い出せ。俺の目的は、そう……リトルウィングに入って女の子と……。

そうしていると、急に不思議な悪寒が全身を駆け巡った。

ドクン！ 爆ぜるような心臓の高ぶりに俺は放心する。何か、嫌な予感がする……俺はこんな時でも何か解決策を講じてくれそうな幼女にテレパシーを送った。

アルト

『 幼女、おい幼女 』

幼女

『 あっ、お兄ちゃんだ、やつほー。今ね今ね、チエルシー達とみんなで

麻雀やってるの。同じのばっかり集めてるんだけど、なんか河見たら

どうこう〜とか言われるんだけど…… 』

アルト

『 染めすぎだ。とりあえず字牌整理してピンフでも狙っておけ。違う、そんな話じゃない。幼女お前、今回はレベル2とか言ってたよな？ 』

幼女

『うん、それがどーしたの？』

アルト

『いや、何

ぐあっ！？』

突然、先程とは明らかに違うレベルの痛みが胸を貫いた。全身が焼け焦げるような激しい熱を帯びていく。軋むような身体の痛みに、意識が朦朧とし始める。

アルト

『ま、まだ……ハアハア……！ 聞いていなかったが……レ、レベル2の

症状って、何だ……？』

幼女

『クスクスッ。やゝ言っただけだったっけ？

レベル2の症状は、人間に憑依するクラスの闇フォトンだよ。

一時的に脳を支配してコントロールを奪われるの。

あつれゝ、もしかしてお兄ちゃん苦しいの？ おっかしいなゝ、

闇の

フォトンの影響下に置かれるのは、自身の意思に反して不純な動機を持って

いるときだけなんだよねゝ。つまり、自分の本能に逆らった者が闇フォトンに



憑依されるの。お兄ちゃんがえっちなままなら大丈夫だと思ったのに。

……アハハハッ

アルト

『幼女……グッ……お前、もしかしてこうなることを知ってたんだな？』

わざと俺に教えなかった、な……？』

幼女

『えゝ、わたしはお兄ちゃんの困ってる顔見るの大好きなんだもん。つまらない平和なんて興味ないじゃない』

アルト

『どういう……こと、だ……』

幼女

『お兄ちゃん、もしかして自分が恩恵あるからって闇フォトンの影響におかれなと思うってたの？』

アルト

『つまり……俺は……』

幼女

『やったあゝ！一色に染まったよお兄ちゃん。ねえ聞い……お兄　ちゃ　』

アルト

『染められた……という、こと　か　』

俺の意識が深い闇の中へと落ちていく。昏睡するような眠りの淵に  
いざなわれ。

俺は気を失った。

**第五話？ - リトルウィング・事務所 - (前書き)**

これからは一人称＋三人称アリになります。

三人称一人視点ではないです。

アルトさんが勝手に……（、、）

幼女の名付け親、もう少しで締め切ります！

## 第五話？ - リトルウィング・事務所 -

幼女

「…………あれ？」

じやらじやらと麻雀牌がかき混ぜられる音を聞きながら、幼女が周囲を見渡した。事務所には、チェルシー・クラウチ・ウルスラ・ユート・幼女の五人がいた。現在、ユートが一時的にメンツを抜けて四人で卓を囲んでいる。

ユートが食い物にされたのは言うまでもない。

ウルスラ

「ロン！ ダブルリーチ一発ドラ1 国士無双。 32000ね。  
クラウチ、貴方死んだわよ」

クラウチ

「ハアアアアア！？ おいテメエちよつとマジでフザケンなよ！  
！！

一巡目だぞ馬鹿ヤロウ！！！！」

ウルスラ

「キタものは仕方ないでしょ。それとも何、もしかしてここでその汚いパンツまで脱ぐつもりなの？」

クラウチ

「クソツタレ……絶対積んだだろ……ガクツ」

脱衣麻雀をやっていたクラウチは、見事敗退。チエルシー、ウルスラは一着も脱がず、アワレにもクラウチとユートが丸裸にされた。ちなみに幼女は通常ルールだ。

チエルシー

「オウ、ウルスラを敵に回すと、アトで恐ろしいコトになるヨー。シャツチヨサン、終わったらパフェおごってネ」

クラウチ

「ええい、くそつ。わあつたヨ！ 次だ、次！  
オラ、とつとと準備しやがれ！！」

ウルスラ

「そう言えばクラウチ、貴方このあいだ商店街エリアのデパートに行ったとき、ずうつと『エレベーター』ガールの尻ばかり見ていたわね」

クラウチ

「うぐっ……見てたのか」

ウルスラ

「フツ。まあ、結託はしていないから安心なさい。さっきのは本当にマグレだったんだから」

チエルシー

「ワタシ、エレベーターガール、ヤツテみたいヨ。」

こちらは、地下3フロアにナリマース。…… 幼女ちゃん、暗い顔して

一体ドシタ〜ノ？」

幼女

「あ、ううん。何でもないよっ……！」

笑いながらも、幼女はずっと扉の方を見続けた。

幼女

『お兄ちゃん、お兄ちゃん……』

幼女はテレパシーを送る。だが、アルトからの反応は無かった。

幼女

（おかしいなあ。お兄ちゃんと連絡が取れないよ。

一人称視点も切断されてるし、ホントにどうしちゃったの？）

幼女が俯きながら配牌を覗く。四向聴からのスタートだ。まずは邪魔な三元牌を切る。

幼女

（お兄ちゃん……いくらお兄ちゃんが闇フォトンに囚われても大いなる光の力を継承しているあの人が、身体の全てを乗っ取られる

わけがない。ホントは一時的なだけで、すぐに闇フォトンの方が耐え切れずに

蒸発すると思ったのに）

筒子の一（丸いやつ）を切ると、どこからかポンという声が聞こえた。が、幼女の耳元には入っていないらしい。

幼女

（……やっぱり、お兄ちゃんのこと心配！  
わたしが行って助けてあげなきゃ！）

幼女が力んだ瞬間、事務所の自動扉が音をあげて開かれた。

そこに居たのはナギサだった。

ナギサ

「ハアッ……ハアッ……！」

クラウチ

「フム……ん、ナギサじゃねえか。血相変えてどうしやがったんだ？」

「って、うおおお！？」

ナギサは何故か全身ズタボロだった。いや、外傷は特に見受けられなかったのだ。衣服がビリビリに引き裂かれているだけで。そのせいか、妙に艶かしい姿の彼女だった。

チエルシー

「ナギサ、大丈夫ナノ！？」

ユート

「ナギサ！ ひどい……一体、誰がこんなことを……！」

ナギサ

「ア、アルトが……！ 誰か、アルトを……止めてくれ……！！！」

幼女



「……お兄ちゃん……ッ!？」

ユート

「師匠!？ 師匠に何があつたんだ!？」

フラフラとやってくるナギサを介抱するチエルシー達。

そして

ドッゴオオオオオン!!!

クラウチ

「ぶおっ!？ な、何だあ!？ あっ、牌が!？」

凄まじい轟音とともに、事務所の扉が突如爆発した。突風にあおられて麻雀卓が吹っ飛ぶ。黒い煙とでこぼこ穴の開いた扉は、もはや扉としての機能を果たしてはいなかった。壁ごと大穴の開いた凄惨な光景である。

そして、そこには一つの影があつた。

???

「ウアアアアアアアッ!」

謎の人物が雄たけびをあげる。

煙がやがて、溶ける様にかすんでいった。人影のシルエットが鮮明化する。

幼女

「お、お兄……ちゃん……!」

アルト

「ウ”ウ”ウ”ウ”……ウ”アッ……!!」

そこには、魔獣のような眼光を走らせる、アルトの姿が存在した

第五話？・リトルウイング・事務所・（前書き）

アルト第二人格登場。

おかげでエロシーンの幅が広がります（＊、＊）

幼女の名付け親募集、締め切り間近　　！

## 第五話？ - リトルウィング・事務所 -

幼女

「…………お兄ちゃん…………！」

アルト

「ウグルルルル…………ッ」

濛々と立ち籠<sup>こも</sup>る煙から姿を現したのは、部屋を出て行ったはずのアルトだった。姿形こそ変わらないが、そこからは尋常ならざる闇のオーラが溢れていた。

眼光が事務所にいる人間を食らい尽くすかのように放たれている。

ユート

「師匠、師匠！ 一体どうしたんだ！？」

クラウチ

「やめるユート！ アルトはもう、さっきまでのアルトじゃネエ！ きつと何か…………悪意ある存在に憑依されているんだ…………！」

アルト

「フッ…………悪意ある存在、それは俺のことか？  
なあクラウチよお…………！！！」

ウルスラ

「……喋った……!？」

その場にいた全員が、アルトの豹変した正確に驚きを隠せない。  
裂けるような口元の笑みを見せて、アルトは喋り始めた。

アルト

「貴様らぁ……もしかして俺が、闇のフォトンに操られて  
いるとでも思っているのかぁ？　だとしたら、それは大いなる誤  
解だ。」

俺は望んでこの力を受け入れた。それは、何を意図しているか分  
かるか？」

チエルシー

「……新しいシャツチョサン、言ってる意味がわからナイヨー!？」

アルト

「闇フォトンの力によつて、俺の深層意識の中に存在している  
もう一人の自分が目覚めた……今まで、平和ボケで甘ちゃんだった  
別人格を海の底に沈めて、な……!」

幼女

「お兄ちゃんの、別人格……!？」

クラウチ

「オメエ、二重人格者だったのか！」

幼女

（まさか、お兄ちゃんに別の人格が内在していたなんて……全然気づかなかった。ううん、もしかしてわたしが、お兄ちゃんの人格を理解できていなかっただけ……？）

幼女はアルトの身体に流れる闇フォトンのエネルギーを感知した。

幼女

（……！　闇フォトンが、逆にお兄ちゃんの身体に支配されてる！？　闇フォトンのエネルギーがきっかけで、心の中に閉ざされていた人格が覚醒したんだ。今のお兄ちゃんはお兄ちゃんじゃない……？）

325

クラウド

「オメエの目的は何だ！？」

クラウドが、幼女の不安を加速させる言葉を放つ。

アルトはニヤリと笑った。

アルト

「フフッ、フハハハハハハッ!!」

俺の目的を知りたいのか。このグラール太陽系という世界で

唯一、我が肉体を圧倒的な高揚感で支配する、あの感覚……それは……!!」

全員が息を飲む。そして

アルト

「全世界の美少女俺の嫁計画ダアアアアアッ!!!!」

全員

「……………ッ!?!」

アルト

「どうだ、恐れいったか!?!」

「フヌハハハハハッ!!」

ナギサ

「……………恐れいったと言うより……………」

チェルシー

「……………むしろ」

幼女

「いつものお兄ちゃんだね……」

事務所が、何故か妙に親近感のある敵意になごやかになる。

アルト

「お前らは何も分かっているようだな……。この俺が別人格になったことが……ッ！」

ユート

「どういうコトなんだっ、師匠！」

アルト

「今までの俺は妄想が先行する理系タイプのことこそイケメンだった」

ナギサ

（自分で言うか……）

アルト

「だが、ヤツはあくまでおこぼれをもらっ『ラッキースケベ』……そして俺は、そんなあいつの苦悩と欲求から誕生した『アタッカー』タイプの別人格。それがどういう意味か分かるだろ……！」



チェルシー

「と、というコトはっ!」

クラウチ

「その気になれば、前の人格よりも……」

幼女

「積極的にイヤラシーンを狙っていく可能性があるということ……  
!」

アルト

「フッ……やっと分かったか。言っておくが、俺はこれまでの人格のように

手ぬるくはないぞ。女と見れば見境なしに……

揉むるっつつっ! 触るっつつっ! 撫で回するっつつっつつっ!

!……

グワハハハハハハハッ!」

ユート

「ダメだっ……今の師匠は、完全に脳を支配されてる……ッ!」

ユートが目をそらす。アルトはビッを指をさして言った。

アルト

「フン、そんなことを言っていられるのも今のうちだ。俺が  
リトルウィングの全実権を握ったとき、俺の理想的な法案を

制定してやるっ……」

チエルシー

「それはドンナ法案なのー？」

アルト

「ハッ、聞いて驚けそして漏らせ……ッ！」

リトルウィング新法案第一条、

『美少女は俺の前を通りかかった時にその場で靴下を片方脱いで献上』しろオ！

ただし、その際は前口上として、

『アルトさまぁ……私の脱ぎたて靴下くんかくんかして下さあい……』

と言っのを忘れるな！ ちゃんと『をつけるのも忘れるなよ……ッ！』

アルトの爆弾発言に、その場に居た全員が硬直する。

幼女

「……（お兄ちゃん……そんなに靴下欲しかったんだ……）」

クラウチ

「……（その法案に、俺も参加させてくれエ……！）」

ウルスラ

「……（私も、美少女に入るわよね……？）」

ユート

「……………（師匠は匂いを嗅ぐと強くなるのか……………!?）」

チエルシー

「……………（ストックキングじゃダメなのかなア……………?）」

ナギサ

「……………（ちょっとやってみたいな……………）」

大小に差はあるが、誰もがアルトの驚異的な法案に驚愕していた。

アルト

「フハハハッ……………どうだ、素晴らしいだろう。」

本来ならば今すぐに、と行きたいところだが、俺にはやるべきことが

あるのだな。ここで退出させてもらおう。

さらばだ、トオアッ!！」

アルトは飛翔するように、闇の残影を描いて通路へと消えていった。

クラウチ

「クソオ、今のあいつは暴走していやがるッ！！  
どこに行きやがった！」

幼女

「今のお兄ちゃんが行きそうな場所……そうだ！  
エミリアが自室で入浴中だった！！」

ウルスラ

「急がないとまずいわね。でないと、早くもこの作品が  
R - 18入りしてしまうわ……！」

ユート

「エミリアの部屋は社員通路の右側をずっと進んだ奥だッ！  
早く行こう！」

ナギサ

「……私は法案成立してもいいんだが」

アルトを追って、全員が事務所を駆け出していった。

幼女も最後尾について飛び出す。

幼女

（お兄ちゃん……お兄ちゃんは一体何をしでかすつもりなの……？

あの人格が最終的に考えている目的って……！）

リトルウィングでは、今まさにアルトを巡った事件が起ころうとしていた

第五話？ - 社員通路 エミリア・ルーム - (前書き)

先日買ったゲームをプレイすると、あることに気づいた。

???

「私は人間ではない、精霊の主」

あれっ、クノーさんクノーさんじゃないか（、、）  
そんなユートは、僕の前でイフリートを召喚して敵を瞬コロしていきました。

ちなみに初回特典かなんかで封入されてたマスコットはミラでした（^^）

ああ、久しぶりの魔神剣は楽しかったですよ！

第五話？ - 社員通路 エミリア・ルーム -

???

「ふんふんふん」

湯気の上がる室内で、誰かの鼻歌が聞こえた。勢いよく噴出されるシャワーを浴びている金髪少女 エミリアの姿だ。一糸纏わぬ格好で身体を清めているが、湯煙が邪魔すぎてまるで裸が見えない。

正方形の小さなバスルームには、シャンプーやリンス、ボディソープなど、身体を洗淨するための道具がそろっている。そして、室内からはどこかで聴いたことのあるような曲が響いていた。

流れているのは、エミリアが普段かけている天使の羽つきヘッドフォンから。タオルと一緒に棒に架けられている。だが、肝心の本人は入浴だと言うのに、どこか浮かない表情をしていた。

エミリア

「ふう……何さ、アルトのばか、むつつり、鈍感……！」

そりゃ、あたしはそんなに可愛くないし、ナギサみたいに胸はないし、

ルミアみたいに世話好きじゃないけどさ……。だけど、もう少しくらい

振り向いてくれたっていいじゃない……」

エミリアは、そつと唇から愚痴を零した。その表情には薄っすらと影があり、期待している現実との差に苦悩しているかのようだ。エミリアも一人の少女であり、乙女なのだ。淡い欲を持たないはずもない。

唇を尖らせたあと、自分の短い髪先を指でいじくる。

エミリア

「もしかしたら、アルトって髪の長い子の方が好きなのかな……  
今まで意識したことなかったけど、やっぱり男子ってそういうのに憧れとか

持つてるよね……」

彼女の瞳は、どこか涙ぐんでいたかもしれない。しかし、それに気づくものは誰一人として存在しない。シャワーの流れに任せて、彼女から落ちた全ての雫が水泡へと帰したからだ。

恋に身を捧げる少女は頭からいつぱいの湯を浴びる。その瞳は髪先に隠れて見えることはなくなった。



エミリア

「アルトの……ばか……」

最後に、そんな一言を呟いた。

場所は変わる。とても暗い場所だ。

そこからは、入浴中のエミリアの姿が見えていた。しかし、シャワールームの扉は確実に閉まっている。部屋の外にも『覗くな厳禁！』と書かれたウオッタ（グラール太陽系での一般的な用紙）での張り紙がされている。

では、どこからその映像が流れているのだろうか。

そこでは、僅かにジューツという機械の音が暗闇の世界を演出している。光る中央の物体、シャワールームの採光から判別できるのは、それがビデオカメラということだった。

レンズの輝きはエミリアの頭上、バスルームの天井にある通気口からのものだった。そして、その中にはビデオカメラを構えて撮影を行っている銀髪の少年、シズルの姿があった。

シズル

（ふん……中々どうして、成長途上の良いカラダじゃないか……デユフフ。）

だがやはり、肉体的審美欲に響かないな。まあ、こういった生意気女が好み

な人種に焼いたディスクを高額で回せば良い稼ぎにはなるだろう。あとは、これを材料にエミリアを脅して、は、恥ずかしい格好とか要求したらどうなるんだろうか……）

イヤラシイ顔つきをしたシズルの鼻からは赤い液体が一筋の流れになっていた。用意されたグラフィックだけは美的なのに、どうしてこうも彼は三枚目が似合うのであるうか。

エミリア

「ふう、身体洗っちゃおうかな……よいしょっと」

エミリアは腰を曲げて近くにあったバスチェアに座り込んだ。そして、大股開きで下方部を覗いている。誰もいないせいか、開けっぴろげな行動はやけに大胆不敵だった。

無論、その影響は通気口の中から覗いているシズルにもピンポイントで強襲される。

シズル

「ぐ、ぐはあっ!？」

エミリア

「……音? 気のせいかな」

シズル

(い、いかん……あの小娘め。なんて節操のない格好をしているんだ。

どどうせ俺の知らないところで、男にあやつて股を開いているんだろう!

だ、だめだ……僕は恥ずかしくてこれ以上見ていられない!!)

いずれにしろ、見つからずに動画撮影を続けるシズルだったが、これ以上は自身の鼻が耐えられそうになかったのでやむなく撤収。動画撮影自体は成功を遂げた。

シズル

「ふう……何とか収まったが、それにしても僕の顔面がまさか血だらけに

なるとは。エミリアの癖に色香を使うとは、中々やる……！」

シズルは手に入れたメモリーのチップを手のひらで投げて遊んでいた。すると、そのチップが瞬間的に通り過ぎた黒い影によって奪われる。彼が手中を見たとき、既に影も形も消えていた。

シズル

「くっ……誰だ、僕のレア物を盗んだヤツは……！」

銀髪を散らしてキツと正面を見据える。長く続く通路、そこに居たのは豹変したアルトだった。

アルト

「よォ……初めましてだなあ……！」

シズル

「フハハン……ビデオを撮り損ねて、ついに気でも触れたのか。よしてくれよ、

何だ、その妙に小ざかしいオーラは。もしかして、僕の考えた最強の煉獄と

一戦交えようとも言っのか?」

アルト

「一戦交える……だあ? ハッ、てめえじゃこの俺には半永久的に勝つことは出来ねえよ! レベル200である本当の能力を最大限に引き出せる

俺には、絶対になあ……!」

シズル

「随分と威勢が良くなったもんだな。何かのおまじないでもかけたのか?

普段は冷静沈着みたいな顔して、フタを開けてみればこの通り、やはり貴様も

薄汚いドブネズミと一緒に言ったと言っことが」

アルト

「ハハッ……!」

シズル

「余裕の表情かい? 良いだろう。前々から七天の護法の中でも、新参の癖に

デカイ面していたのが気に入らなかったんだ。今日で決着を

」

その瞬間、通路の中で大きな閃光とともに、巨大な爆発音が地面を駆け巡った。

チエルシー

「アルトはドコに行ッタノ!？」

ユート

「あっちみたいだ！ 向こうで大きな爆発音がしたぞ!!」

クラウチ

「クソォー、修理代がかさんで女の子のいる店に行けなくなったらどうしてくれるんだヨォ……!」

ウルスラ

「……結婚した相手の横で言うセリフじゃないわね……!」

ナギサ

「アルト……一体どうしたと言うんだ」

幼女

「…………お兄ちゃん」

アルトを追って通路を駆けたみんなは、爆発のした先へと向かった。そして、そこにあったのは。

アルト

「よォ、遅かったなァ……………」

幼女

「お兄ちゃん……………」

アルトがよこしまな目つきで一蹴する。

そこにあっただのは、全身ぼろぼろで横たわるシズルの姿と、それを椅子代わりにしているアルトの姿であった。

第五話？ - 社員通路 エミリア・ルーム - (後書き)

やっぱり僕にしました(笑)



第五話？・リトルウイング・社員通路・（前書き）

おおやべえ、意味わかんねえ……（、、；）

## 第五話？・リトルウィング・社員通路・

幼女

「お兄ちゃん……！」

アルト

「アア、お兄ちゃんだあ？ テメエの大好きなお兄ちゃんは  
深い眠りについてんだよ。今日からは俺が台頭してリトルウィン  
グを

席巻してやるぞ、ハハハハハッ……！」

狂気に満ちたアルトが甲高い声をあげると、下で横になっていた  
シズルが意識を取り戻す。

シズル

「うつつ……くそ、油断した……まさか僕が遅れを取るなんて」

アルト

「ハン、だから言っただろうが。俺にや勝てねえってな。  
まあいい。こいつはテメエらに返してやるぜっ！」

シズルの首根っこを掴みあげたアルトは、思い切り背中を蹴飛ば  
してクラウチ達のいる方向へと追いやった。慢心創痕のシズルは再

び意識を失って瞼を伏せる。

ユート

「師匠、師匠はこんなことをして心が痛まないのか！  
いつもの師匠なら、虫も殺さないほど優しいのに！！」

ウルスラ

「いえ、待つて。もしかしたら、彼は自分の深層意識の存在に  
気づいていないのかもしれない。自分が二重人格者であることを  
今の今まで知らなかったとしたら……」

チエルシー

「ウーン、でもどうしてアルトにはそんな人格が……？  
幼女ちゃん、何か分からナイノー？」

幼女

「ううん、全然分らないよ……普段は全然そんな片鱗を見せなか  
ったし

闇のフォトンの影響としか……でも原因は分かってる」

ナギサ

「原因？」

幼女

「お兄ちゃんは、自分の『性欲』をコントロールできないんだよ。  
きつとそういう体質の人間で、だから別人格を作り上げてまで抑  
制しよう」と

思っただ。でも、それがここにきて裏目に出てる」

クラウチ

「つまり……」

ナギサ

「その『性欲』とやらを充足させれば、元のアルトに戻る。

というわけか……しかし、その性欲とやらは何だ？ 一体どのようにして

対処するべきものなんだ？」

幼女はじつとナギサを見た。彼女の膨らんだ胸の上にある表情が不思議そうに見つめ返している。

ナギサ

「どうした？ 私の顔に何かついてるのか？」

幼女

「ナギサ、お兄ちゃんを何とかしてあげて。きっとナギサならお兄ちゃんの精神を取り戻すことが出来るから」

ナギサ

「私が？」

幼女

「うん。きっとナギサがお兄ちゃんに『キス』をしたら、元のお兄ちゃんに戻れると思う」

チエルシー

「チョット待ッテ。本当にナギサで大丈夫ナノー？」

クラウチ

「アアン、どうしてだ？」

ウルスラ

「私もチエルシーの意見に賛成ね。正直、ナギサと彼の精神パラメータ値は

そこまでのレベルには到達していないと思う。二人の間に何か大事なモノが

あれば違うと思うけど、私生活を見れば大体分かるわ」

チエルシー

「ソウね。ナギサチャンは、アルトのことをドウ思ってるノ？」

ナギサ

「ふ……む」

黒髪の少女は腕を組んで黙考した。だが、彼女は首を振った。

ナギサ

「……私も多少は経験を積んだ。きっとこれは『恋』というものに相当する

事象であるはずだが、残念ながら自分の中には、彼をそこまで気

に留める材料が

存在しない。いや、嫌いというわけでは無いのだがな」

ユート

「うーん……ぼくは何か忘れているような」

幼女

「ごめんねナギサ。でも貴女ならきつと出来る。もうナギサしか頼れる相手がいないの」

ナギサ

「ふむ、分かった。君がそこまで言うのなら、その可能性というもののに

賭けてみよう」

ナギサは全身ずたぼろの服を着たまま、アルトの正面に向かった。不敵な笑みを漏らすアルトと視線がぶつかる。

アルト

「ハハッ、よりによって女を俺の前によこすとはな。

これは俺に犯してください、と言ってるようなものだな。おとなしく俺がテメエの肉体を甘美してやろう!」

ナギサ

「アルト……私とキスを

」

彼女が言葉を続けようとしたとき、通路の後ろにあった扉が開かれる。いつもの服装に身を包んでやってきたのはエミリアだった。

エミリア

「もーっ！ 何かさっきから外が騒がしいんですけどー！！  
ヒトの部屋の前で何やって……」

急に姿を見せたエミリアを、アルトが強襲した。彼女を身体を抱き寄せて人質にしたのである。

エミリア

「こ、こらっアルト！！ え……アル……ト？」

彼の表情を見たエミリアにも、それが別人であることが分かったようだ。みるみるうちに表情が変わり、そこには不安げな眼差しが漂っている。

アルト

「今の俺はアルトであってアルトじゃねえ……残念だった」

パン！

弾かれるような音を奏でたのは、アルトの頬を叩いたエミリアの手だった。

アルト

「あ……？」

ナギサ

「エミリア……ッ？」

騒然とする中、リトルウィングでの物語は終局へと駒を進める。



## 第五話？・リトルウイング・社員通路・（前書き）

何というカオス……。そして五話終了（、、）

今回は多分ナギサさん戦闘モード。そして、ルミアの登場も……。！？

幼女の名付け親、 9 / 1 2      2 3 … 5 9      締め切りです！

## 第五話？・リトルウィング・社員通路・

盛大な音が通路の中に木霊した。アルトはエミリアの平手打ちを食らっていたのだ

エミリア

「いい加減にしてよね……！ あたしはあたしなりに自分の気持ちを伝えようと頑張ってきた。なのに、あんたはどうしてそんな風に自分の中にある本当の気持ちを人任せにしちゃうの……？」

アルト

「き、貴様……何を言っている……！」

エミリアの吐き出すような言葉に、アルトを初めとした全員が、何もできずにただ黙っていた。そうさせるだけの想いが、彼女から伝わったからだろう。

ナギサ

「エミリア……」

そして、その影響は一部始終を見ていたナギサをも感化させてい

た。放心した表情で、二人のやり取りを眺めている。まるで、舞台の劇を覗くような客観性を瞳に秘めて。

エミリア

「だって、そうじゃんか……！ あたしばかり悩んで、あんたは肝心なときにそうやって自分を殻に押し込めるつもりなの……？ 卑怯だよ、ずるいよ、それって……！」

アルト

「……………ッ！」

ナギサ

（エミリア、お前は……）

ナギサは直感的に気づいた。そして、その言葉の意味を理解した少女は、ふいに開いた唇を閉ざした。それを口に出してしまうことへの怖さだったのか、答えは彼女にしか分からない。

鋭い眼差しでアルトを睨みつけるエミリアは、溜め込んだ息と一緒に、自分の想いの丈を精一杯の気持ちを込めて彼に放った。

エミリア

「だって、あたしはさ……あたしは……ッ！  
アルトのこと、ずっと気になってた。いつもは冷静でいるように見えて

どこか抜けてて頼りなくて。でも、いざつてときはきつと助けてくれる。

そんなアルトの心に、あたしは惹かれてたのに……！」

アルト

「お、俺は……」

エミリア

「あたしは……アルトのことが好き」

アルト

「……俺のことを、好き……？」

目の前にいた少女から伝えられたメッセージ。

少年は、心のどこかでその言葉の意味を半ば夢見心地のような気分を理解していた。

エミリア

「アルト……んっ……」

アルト

(………熱い………)

気づいたとき、彼の口元には少女の紅く濡れた唇が重なっていた。押し当てられた瑞々しい蕾から、柔らかい感触を通して人の温もりを感じ取ったのだろう。いつしか少年の表情からも棘が消え、純粋な心の接近に身を任せていた。

それと同時に俯いて影を残す少女、ナギサは踵を返した。

幼女

「ナギサ……？」

ナギサ

「すまない、少し疲れたようだ。  
部屋に戻る事にする……」

ナギサの背中が、一人何かを感じさせて通路から消えていった。

幼女

（あつ……お兄ちゃんの中から、闇フォトンの存在が消えていく……）

落ち着いた顔を取り戻した少年は、少女に向き直った。

アルト

「すまないエミリア女史……俺はどうかしていたのかもしれない」

エミリア

「アルト……お願い、あたしを貴方の彼女にさせて。  
でなきゃ、あんたのこと、嫌いになっちゃう……」

話の続きはここで途切れている。

状況を見守っていた観客たちが、全てその場を離れていたからだ

Now Loading

翌日。

リトルウィングにある食堂の一角で、丸いテーブルを対面にする  
少年少女の姿があった。

アルト

「お、おい馬鹿よせ。いかんせん現在の俺は危機的状況に立たされている。

未だかつてこれほどまでに世界を震撼させる出来事があっただろうか、

いや、ない。それほどまでにレベル200であるリトルウィング  
期待の新人を

混乱の渦に陥れるこの現場は、明らかに会議室で起こっているはずもなく、

俺はひたすらにどうしていいか分からずに

」

エミリア

「はい、あゝん」

アルト

「ん、んぐつ。ん……まあ、あれだ。普通に美味しいと言わざるを得ない。

だ、だがこの展開はなんだ。俺は何故ここに居る？ 俺は場違いではないのか？

それとも基地の外ににいるというヤツか？ 誰か教えてくれえ！？」

エミリア

「むう……アルトは、あたしと一緒にゴハン食べるのがそんなにイヤなわけ？」

ああ、そうだね。別にあたしなんかと一緒にいてもさ……」

アルト

「い、いやそんなことは断じてないぞっ！　楽しい、楽しすぎるぞ  
！！」

……して、これは俗に言うお茶会というヤツで良いのかな？　かな？」

エミリア

「ブブー。ハズレです。これは、あたしとアルトの……デ・エ・ト。」

健全なカップルが二人でする恋の証明だと思っくんよ、うん」

アルト

「ほ、ほお……つまり、そういうことか……」

エミリア

「うんっ、そゆコトっ

はい、もう一口あ~~~~ん」

二人でそんなことをやっている、遠くから人影が現れた。

シズル

「くっ……お前ら、昼間から何をそんなにイチャイチャして……！  
うらやまけしからんからとっとと蒸発したまえ！　ふんっ……！」



アルト

「何だシズルか。そうだ、この間のメモリーチップは無くしてしまったのでな。」

新しい動画を撮影しておいた。格安の2000メセタでいいぞ」

シズル

「フン……まさか、ピーー動画ではあるまいな？  
だとしたら僕は貴様を許さない、絶対にだ！！」

アルト

「大丈夫だ、安心しろ。中身は少し毛深いビーストのコだが、フェロモンたっぷりの人材を撮影してある。どうぞ七天の護法で鑑賞したまえ」

シズル

「ほ、ほう……ごくり。で、ではお言葉に甘えて頂くとしよう。  
僕はすぐにでもこの動画に問題がないか詳しくチェックすることにした。」

では、いずれまた会おう！！」

そう言つと、急いでシズルは食堂を後にした。風が頬を突き抜けていくのが伝わる。

そして、振り返ると。

エミリア

「はい、あたしにも。あ〜ん」

アルト

「う、うむ……」

仲良く食事を続ける二人の姿があった。

が

????

「……………ッ」

アルト

(……………あれは、ナギサさん……………?)

壁の向こうに消えていくナギサの後ろ姿を、アルトはじっと見つめていた。

暗闇の一室。

蠟燭の炎が部屋を薄暗く照らす中で、別の輝きが満たされていた。それは、機械に時間を刻んでおり、内容を映し出すために秒数を力ウントしていく。

そして、それを覗く二人の男の影。

???

「さすがインヘルト社の生きる中二と言われる男ですね。彼からちやんと

新しい動画を受け取ってくるとは……さすがです」

???

「フハハーン、それはいい……ッ！」

「はあはあ……ッ！ さあ、早く美しい女の姿を……!!」

謎の小躍りを交えながら、二人は映し出された動画を目に焼き付ける。

そして、

「ウギヤアアアアアアアアアアアア!?!?!?!?」

そこに映っていたのは、全裸姿でくねくねと腰を曲げるクラウチの姿であつた

## 第六話？・リトルウィング・自室・（前書き）

第六話は前編と後編を予定しています。

とりあえず、今回の主要人物は、

ナギサ・エミリアにルミアと四話で登場したラナリーが改めて参戦します。

五人目のヒロインはまだしばらく後です。

あと、ワイナールとミカも近々顔見せする予定です。

七天の護法はゆっくりとエピソード増やしていきます（笑）

## 第六話？・リトルウィング・自室・

まどろみの渦中、俺はどこか判然としない無意識のほとりで周囲を見渡していた。

白い雲の上で横たわる自分の姿。それを遠巻きに眺めているような気分。大の字で仰向けになって見上げる空はとても澄んでいて青く、広大な世界の清々しさを全身で受け止めていた。

アルト

「ああ……なんて気持ちいいんだ」

上質なベッドのように優しく撫でてくる雲と、吹き抜ける穏やかな風が、俺を夢見心地の感覚に心酔させてくれる。これは夢なんだ。そう思えるほど頭が柔らかくなるまでに時間はそうかからなかった。

綿菓子のようなふわふわの生地を腕ですくいあげると、それは手を離れてふんわりと浮き上がり、もっともつと高いところに飛んでいった。まるで、旅をする鳥のように優雅に、そして滑らかに。

どこか安心させてくれる感覚に身を酔いしれさせながら、俺はふと首をあげて遠くを見た。

???

「おい」

そこには、塵気楼のごとく白い霧の中から映る人影。諸手を広げて自分のもとへ近付いてくる女性の姿。どこか母性を感じさせてくれて、落ち着いた感じのする女の子。

長い黒髪を風になびかせて俺の前にやってきた彼女 ナギサさんは、何故か全身裸だった。良く見れば俺も裸になっていた。

ナギサ

「アルト……」

アルト

「ナギサさん……」

ナギサさんは子犬のようにじっと俺を見つめてくる。潤んだ瞳の中心に俺の姿が映っている。彼女は俺の胸にそっと身体を預けてくる。腕が絡んでくる。お互いの鼻先が触れる距離。

雲の流れる空の上で、俺とナギサさんはひとつだった。

ナギサ

「アルト……お前の全てが欲しい。私を抱きしめてくれ」

アルト

「ナギサさん……俺は、俺は……！」

段々と距離を狭めてくる黒髪の美少女。俺は

↓ Now Loading ↓

アルト

「……………夢か」

俺が目を開くと、そこは自室のベッドの上だった。いつも起床する時間より少し早かったが、俺は小型端末にセットしてあるアラームの予約を止めた。



自室の窓は普通なら宇宙空間しか見えないが、そういった昼夜のない概念を嫌う人種も多いので、窓には画像を展開するための機械が置かれている。自分の部屋も例に漏れず、綺麗な青空を描いたビジョンを展開させていた。

なので、見た目的には朝、という感じになる。時刻もそれと同等だ。

俺は布団を少しめくり、新鮮な空気を取り入れる。基本的にはパンツ一枚。それが寝るときの格好だ。クラッド6のようなコロニーでは、室温も一定に保たれているからだ。無論、意図的に気温を下させることもできる。

腰をあげるには多少早いが、たまには幼女でも連れて散歩をしよう。そう考えて、俺はいつも隣で睡眠している幼女を起こそうとする。ちなみに幼女はパンツ一枚じゃないぞ、ちゃんとパジャマ姿だ。

アルト

「幼女。幼女、朝だぞ、起きるんだ。でなければ朝から元気な俺の息子が

迸る情熱で幼女の顔面にカルピスのオープンプライスだぞ（？）」

俺は布団の中に手を入れてまさぐる。幼女は寝相が悪いからな……この間も、俺の股間に強烈なキックをかましてきて悶絶死するところだった。幼女に蹴られて死ぬのなら本望かもなと考えたのは秘密だ。

がさがさ、ごそごそ……。

両手を使って本体を探す。すると、

アルト

「あん？」

ぷにゅん。

ソフトな感触とふつくらと震えるような音がした。……幼女って、こんな触り心地だったわけ。疑問に感じるも、俺は握る手に力を込めてぎゅっと掴んだ。

???

「あッ……ッ」

その時、艶かしいくぐもり声が耳に届いた。続いて、んう……という鼻にかかったような甘ったるい声も聞こえる。いったい、なんなのだろうか。幼女はいつの間に、こんなに大人っぽい声を捻り出せるまでに成長したのか。

まあ、子供の成長は早いものだ。そもそも幼女が成長する存在なのか皆目不明だが、そういうことにしておこう。

アルト

「おゝい、起きろ」

俺は幼女の肩を掴むように、自分の触れている何かを大きく揺さぶった。が、しかし、不思議な音がする。ゆさゆさ、とかじゃない。どちらかと言えば、たゆんたゆんとか、ふにゆんふにゆんとか、何ていうかこう、ボリユームのあつて、いささか掴み心地が良くて、ずっと触っていたくなるような。

???

「ふぁ…… あんっ……！」

今度は幼女のような何かがビクンと跳ねた。

……どういうことだ？ 明らかに幼女と質量に差がある。もしかして、ボイス付きの抱き枕かダッチ○イフでも知らずの内に購入してしまったのか？ 恐る恐る布団を剥ぎ取る。

アルト

「……………は!？」

ばたん！ 半分まで捲りあげた布団を再び戻す。俺は余りの光景に呼吸を乱していた。一拍置くと、やがて安息とともにアルトお……という自分と呼ぶ声が聞こえる。

何故か、妙に聞き覚えがあった。

聞き覚えというよりも、もつと別の何か。そう、どこか俺の知らないところで起きていたはずの物語のような、自分のことなのに分からない奇妙な感覚が俺を襲う。

だが、この声質だけは覚えていた。それは普段から耳にしているからである。記憶の蓄積。大人びているのに子供っぽい。けれど、女性らしさがあって、どこか甘えたくなるような。そんな女性の声。

ナギサ

「ん……アル、トお……」

アルト

「ナ、ナギサさん……??？」

第六話？・リトルウィング・自室・（前書き）

アウト、セーフ、よよいのよい！（＾　＾　）

まあ、一応15～17・9ぐらいの間には入ってるでしょう（笑）

第六話？・リトルウィング・自室・

ナギサ

「すう」

アルト

「.....」

間違いない、今ここで眠っているのは確実にナギサさんだ。だが、一体どうして俺の部屋にいるんだ？　っていうか幼女はどうした。居ないんだが！？

俺はそおくと視線を寄せつつ、もう一度布団をぺらりとめくる。

頭のとっぺんだけ飛び出しているナギサさんから、純白の布団を剥ぎ取っていく。

まず最初に彼女のおでこが見えた。色白で綺麗な肌をしている。そして貝殻のように閉ざされた双眸。深い睫毛が特徴的で、ガラス細工のような芸術ささえ感じる。次いですらりとした鼻筋から鼻先、柔らかそうな頬、顎をつたって首筋へ、丸みを帯びた肩先、次第に上半身が姿をあらわ

アルト

「……………」

単刀直入に言おう、全裸だった。

布団の中から出現した女神様は、何故か一糸纏わぬ裸体を俺の前にさらけだし、深々と寝息をたてている。未だかつて、俺の人生の中でこんなハッピーニューイヤーンの出来事があっただろうか。

暗くて良く見えないが、俺の瞳の中にはハッキリとした二つの膨らみが映っている。何かしらの淫猥ピンクが明日へのトウモロ（？）みたいな美しいトッピングも見えそうだが、残念ながら暗くて良く見えない。全くもって良く見えない。大事なことなのでイカ略

まあ、うん。あれだ、端的に述べると美しい。白磁のように透き通った肌は肉付きもほど良く、悪戯に男性の心を刺激する魅力がある。特に縦長のヘソよりもう少し先、綺麗な曲線を描いてしなやかに伸ばされた脚線美が、何ともいやらしい……。

触ればふにふにとした感触のありそうな、少しむちつとしたフトモモが、シーツを股に挟み込んでいる。擦りあわされた部分から、じかに布の感触が伝わってきそうだ。羨ましいやつめ。今日から俺が布になりたいと叫んだのは言うまでもない。



いや、こんなまじまじとナギサさんの裸体観察をしている場合じゃないかった。むしろ、もうずっとこのままでいいやとか思ってたしまうが、布団の中からもっこりと塔を築いている俺のロストブレイカー（Sグレード・ソード）が、大切な何かをロストしそうなので、まずは一度深呼吸。

落ち着いて物事を整理しよう。

まず、ここは俺の部屋。それは間違いない。見慣れた私物がたくさんある。時間は朝方、普通に眠って起床したということだ。そして、肝心なのは幼女だ。いつも同じ布団で寝ているはずなのに、今日に限って姿が見えない。こんな朝っぱらからどこに行ったのか。

それとも、わざわざ部屋から出て行ったのか。

で、一番の問題は、何故ナギサさんが俺の部屋に、しかも一緒に布団の中に、それも全裸で居るのかということだ。っていうか、妙な違和感が……。

俺は自分の身体をチェックしようと改めて布団をめくる。うん、何だかスースーするなと思ったら、やっぱりパンツはいてなかった。モロモザイク必須だよ！？

つまり、俺全裸。ついでにナギサさんも全裸。俺は慌てて辺りを見渡した。

あつた。俺のパンツが。

昨日まで履いていたはずのパンツは、無残に脱ぎ捨てられて床に落ちていた。赤と青の線が入ったトランクスだ。だが、それならまだいい。俺だって裸で寝るときくらいある。

だが、その隣にあるものは何だ。

同じように床に散らばっていたのは、いつもナギサさんが着ている白を基調とした服だった。普段からこういった部分はかなり几帳面なはずのナギサさんが、思いつきり乱れた着衣を床に脱ぎ捨てているというのは、いささか不自然だ。

加えて、彼女のスカート。蒼い髪飾りに、ビリビリに裂かれた黒生地ストッキング。純白に重ねて薄く青色を塗ったような淡い色のブラジャーとパンツ。しかもパンツはヒモパンだ。

これって、アレか？　つまり……俺がやったのか？

俺は呆然として彼女から見捨てられた衣類と下着を眺めていた。

パンツの隙間に妙な湿り気があるような、そうでないような。まあ、色んな理由で結構濡れているものらしいし、気にしないでおこうか。

最後に目に留まったのは、くしゃくしゃに丸めたティッシュが散乱していることだった。あれかい、俺のロストしたやつとか、ナギサさんからロストしたやつとかが、この中に染み込んでいるとか、そういう話なのかい？

自問自答するも、俺には昨日の記憶がどうも曖昧で不確かだった。えっと、昨日は何をしていたか……頭を悩ませていると、もぞつと俺の横にいる彼女が動き始めた。

布団をぱさりと落として、彼女はむくりと身体を起こしていた。やや虚ろで眠たげのある表情が可愛い。僅かに毛先が跳ねていたり、髪の毛が口に入っていたりするナギサさんを見て、妙にくすぐったい気分になってくる。

ナギサ

「ん……おはよう……」

アルト

「お、おはつ、おは、おはよう、いじめます……ッ！」

というか、まずは前を隠して下さい……。

俺はそつとナギサさんの肩上から布団をかけてやった。

## 第六話？・リトルウィング・自室・（前書き）

近いうちに、この作品の突貫工事 and 大幅改善をするかもしれない。

内容は基本的に変更しませんけどね（、、（

## 第六話？・リトルウィング・自室・

ナギサ

「ふむ、アルトの部屋に常備されているコー・ヒーは美味しいな。豆が違うのか？ 随分とフルーティーで、この抜けるように高貴な香りと

透き通った甘味が心地よいな」

ベッドに座り足を組んでいるナギサさんは、唇にカップをあてがう。ずずつと流し込まれるコー・ヒーが、彼女の口元から温かみのある溜息をつかせていた。

いや、まあ……。それは別にいいんだが、問題なのはこのナギサさん、未だにタオル一枚を身体に巻いた格好であるということ。足を組んでいるおかげで、彼女のしなやかな太股が直視できてしまう。傷ひとつない、美しい肌だ。

更に、タオルの隙間から覗けそうで覗けない彼女の股部分。暗闇さんちよつと仕事しすぎだと思っただが、どうだろうか。

アルト

「ああ、この間買ったモカを焙煎したやつですね。豆もそうなんですけど、

美味しく入れるにはドリップの敷き方とかお湯の注ぎ方を変えてやれば

意外とスッキリした味になりますよ。数回にわけてお湯を注ぐのがポイントだと

思います。雑味を流さないようにお湯を入れて、アイスコーヒーとかにするんなら

常温放置だと鮮度が落ちるのもあるんで、冷やしておいたりとか

ナギサ

「ほう、成る程な。そのモ力とかいう豆は手に入りにくいのか？」

アルト

「ブルー・マウンテンよりはまだ。ただ、どっちも人気のある豆だし、甘味が

強いので女性にはモ力を勧めたいなあとは思いますがね」

ナギサ

「分かった。私もこのコーヒーは実に気に入った。今度、リトルウイングの

珈琲豆専門店にでも行ってみるよ。ところで……」

アルト

「えっ？ ……うわっ！？」

ナギサさんはコトンツとカップを置いたかと思うと、急に俺の首に腕を回してきた。ナギサさんの端正な顔が急接近してくる。

ナギサ

「敬語はやめろって言っただろ。私とアルトの仲じゃないか。それとも、アルトは私のことが、嫌いなのか……？」

アルト

「あつ、いや、それは……ッ！」

途端にいとおしいまでに瞳をうるうるさせてくるナギサさん。絡みつくように濡れた眼の威力に、俺は思わず荒い鼻息をあげてしまう。というか、いかん。このままでは、また状況に流されてしまう！

俺は、甘いささやき声をあげてくるナギサさんの肩を押して、身体を引き離れた。

アルト

「いやっ、お、おお、俺は別に、あの、レベル200とかそういうの関係なしに

ナギサさんには個人的に興味があるというか、ほら、お付き合いって段取りが

あるでしょう？ とか、ちょ……おま、これマジでSYレにならんしょみたいな、

そんな状況が妙にもどかしいかったり恥ずかしかったりはするんですが、とりあえず

質問があるのですが、宜しいでしょうか……！？」



ナギサ

「フム、なんだ。言ってみてくれ」

アルト

「ごくり……ッ。ではお言葉に甘えて直球で……」

ナギサ

「うむ」

アルト

「その……」

ナギサ

「何だ」

アルト

「お、俺は……その」

ナギサ

「ああ」

アルト

「ナ、ナナナ、ナギサさんと……」

ナギサ

「うんうん」

アルト

「つ、つまりその……だ、男女」

ナギサ

「男男女女」

アルト

「男女……じゃなくて、あの」

ナギサ

「ふあゝあ」

アルト

「ぐっ……！」

だ、ダメだ！ 俺には難しすぎてとても言えない……！ その上、ナギサさんは欠伸までしちゃってるし！

俺はぶんぶんと首を振り、現実と向き合おうとする。

いや、待てよ。もしかしたら、俺の勘違いかもしれない。ほら、偶然部屋を間違えたとか、それでこんな状況になったりとか。ははははっ、いや、そうだよな、そうに違いない。

俺は現実的に一番可能性の高い「偶然の積み重ね」という理由を受け入れて、気持ちを前向きにさせる。うん、そうだ、そう考えればそんなに悪い状況ではないじゃないか。

焦った表情をスロットマシンのように一回転。暗い表情、渋い表情、怒った表情、いいや、笑顔だ。俺は笑顔のままでもいいんだ。別に悪いこともやましいことも一切ない。彼女は偶然、俺の部屋で自室と勘違いしちゃっていつもどおりに服を脱いだけなんだ。俺も偶然パンツを脱いだけ。

同じベッドで偶然一緒に裸で寝て偶然ティッシュを使い捨てて偶然ストッキングをビリビリに引き裂いて偶然一緒に起床して偶然二人でコー・ヒーを飲んでいるんだよ。

そうだよ、これはきっと、全部偶然なんだ！

落ち着いたところで、俺は隣にいる自室と間違っちゃって未だに夢の続きを見ているだろうお茶目なナギサさんに、優しく言葉をかける。

ふふん、そうだよ。きっと寝惚けているか、収集がつかない状態になって彼女自身どうしていいか答えが分からずに、器量のある俺の判断に委ねようという考えなんだ。そうに違いない。

全く、ナギサさんは可愛いなあ。

そうと決まれば結論はひとつ。俺はナギサさんに恥ずかしい思いをさせないように、細心の注意をはらいながら、高笑いを作る。腕も後頭部に置いて、顔を思い切りほころばせるんだ！

アルト

「あはははっ！ やだなあ、ナギサさん。ここは俺の部屋で、ナギサさんは」

瞬間、くすんでいた彼女の口角が不適に釣りあがった。

ナギサ

「ヤッたと、思うぞ？」

アルト

「そうそう、ここは俺の部屋で

ゑっ？」

はにわのような顔で硬直する俺をよそに、彼女は足を組み替えてカップを手に取り、コー・ヒーを一口する。

ずずず……。

ナギサ

「ふう、美味しいな。夜明けのコー・ヒー」

彼女はそんな俺を見つめて、にっこりと笑顔を見せてつけてくれる。

……。

……ヤッた……だと？

俺の思考回路は全て切断され、その『ヤッた』という単語を完全に記憶の海から排除する。もう既にその言葉が、グラール語なのかすらも分からない。グラール語でおk。

こ、これは、ど、どうすればいいんだ……？

俺は、生唾を飲み込んで恐る恐る彼女に問いかけた。

アルト

「あ、あの……ヤッたって、言うのは……」

ナギサ

「@！」

アルト

「えっ、何ですって？」

ナギサ

「@！　だ。うん？　何だ、変換（？）が」

アルト

「いや、多分、一文字ずつ区切ったら大丈夫かな、なんて……」

ナギサ

「セ、ツ、k」

アルト

「ごめんなさいもういいですういすありがとうございますとうございましたほんとうに」

ありがとうございますたいへんさんこうになりましたじゅうぶんわかりました

からもうこれいじょういのはやめてくださいー！」

待て、待て待て。

待て待て待て待て。

[illegible]

マジかあ

!?

つまり、まだハッキリと、脳が受け入れられないんだが、それは。

俺、ナギサさんとエッチなことしちゃった

!?

アルト

「あ、あああ、あのあの、お、おお、俺……！」

ナギサ

「何だ？　もしかして、続きがしたいのか？」

昨日あんなに激しく求めあつたのに、しょうがないヤツだな君は

.....  
L

アルト

「あああ、いいい、いや、いや、あの、あああのの、そそそそ」

肩先からしゅるりとタオルを降ろしていくナギサさん。

彼女の綺麗な肌が俺の眼前で次第に露出されて

と、急に部屋の奥で音がした。

ギューーン、という自動ドアの開く音だった。

エミリア

「おいすー、朝ですよー。すがすがしい朝ですよー、みずみずしい朝ですよー。」

って言うか、アルト。ちゃんと部屋のロックくらいしなさいよね。これじゃ、まるであたしが不法……侵入………」

アルト

「ああああ、うううううう、おおおおお、ええええええ」

ナギサ

「フッ……」

エミリア

「……………」

アルト

「だだだだだ、どどどどど、でででででで……」



部屋に入ってきたのは、エミリアだった。

そして、果然と立ち尽くすエミリア。穏やかにコー・ヒーを飲むナギサさん。

凍結した、俺。

これは、あれなんですか。

きっと、俗に言う。

修羅場ってヤツですか

！？

……つづく。

## 第六話？ - リトルウィング・自室 事務所 -

どうも、俺だ。アルト〃シュバイツァーだ。

現在、俺は二人の女性の間に挟まれて汗水を垂らしている。何の汗かって？ まあ、ちよつとしたアレだよ。

何か、俺はあるうことがどうやら一仕事終えてしまったらしい。仕事内容は多分、ナギサさんとのプライベート・サクセス。そしてそのことについて話し合いたいと言うのが、それを目の当たりにしたエミリア女史とのプライベート・ディベートだ。

まずは入念な議論をしたいとのことで、場所を移してリトルウィングのメンバーに意見を伺うらしい。そんなわけで、俺とナギサさん、エミリア女史は三人で事務所を目指して歩いていった。

犯罪者になったかのように気まずい状態のまま、俺はエミリアが用意した縄で手首を締め上げられながら、半強制的に連行されている。その後ろをナギサさんがついてくる感じ。

アルト

「ふ、ふむ。エミリア殿、依頼内容によっては確かにモンスター相手にもこのように素材収集として縄で捕獲したり、実地での長期滞

在の

為に縄で縛ったコルトバの肉をクンセイにすることも良くあった俺だが

この状況は一体どんな」

エミリア

「うるさいっ！ あんたは何も喋らなくていいの！  
おとなしくついてきなさいっ」

アルト

「ふぐう……ッ」

根をあげてしまいそうなほどエミリアに罵倒されつつ、俺は俯きも進展して、かくりと首を落としている。どうしてこうなった、と叫びたい。

そんな俺を見ていたナギサさんが、後ろから穏やかな笑みを込めた表情をして喋りかけてくる。

ナギサ

「辛そうだな、アルト」

アルト

「ナギサさん……」

気遣いを見せてくれる彼女だが、その様相は妙に色っぽくて艶っぽい。ていうか、何でそんなに嬉しそうなんですか、ナギサさんは。

ナギサ

「フッ……安心しろアルト」

アルト

「えっ？」

ナギサ

「仮にお前がどんな扱いになっても、私はアルトのことを一途なまでに信じるぞ」

アルト

「ナ、ナギサさんっ……！」

ナギサさんは純真な瞳で俺の心を焦がしてきた。むしろ、ナギサさんに悪びれた様子が全くないのは何でなんだ……いや、違う！ ナギサさんは悪くないんだ、きっと俺に怠慢があったからいけないんだ。

俺は顔を落として自分の考えに喝を入れる。

時折、すごい形相で後ろを覗いてくるエミリア女史にたじろぎながらも、俺は事務所へ辿り着いた。

- N O W   L o a d i n g -

幼女

「あつ、エミリア、ナギサ、おはようっ！  
お兄ちゃんもおはようっ！」

アルト

「……こんなところに居たのか」

事務所へ行くと、朝早くから、チエルシー、バスク、クノー、それに加えて幼女と言ったメンツが仲睦まじく談笑をしていた。ちなみに、バスク（男キャスト）とクノー（女ヒューマン）はリトルウイングのメンバーだ。詳しくは公式かゲームを参照してくれ。

この四人、朝からモノ・ポリーしてやがる。モノ・ポリーとはボードゲームの一種で、不動産の取引により資産を肥やすゲームのこ

とだ。大事なはこのゲームの最大の目的が資産を増やすことではなく、相手を破産させることにある。

一見して汚いゲームのようだが、実社会の本質を体現していそうなこのゲームを、何故か少女はことのほか気に入っていた。ダークファルスだからだろうか。

余談だが、モノ・ポリーとはグラール語で「独占」を意味する。

少女

「あつ、しまったっ」

少女はマス目に従って自分の駒を移動させる。止まった場所はチャンスカードのマス。ランダムで色んなラッキーが起こるものだが、少女が引いたのは「刑務所行き」のカードだった。

あう、と泣きながら少女の駒はコルト箱（ブタ箱）に連行された。資産的には結構余裕もあるし、物件もまだ独占企業がほとんどない。いやまあ、別にそれはいいんだが。

少女

「あゝん。わたしの大事な駒がコルト箱に連行されちゃったよう。う。しくしく……」

アルト

「なあ、幼女」

幼女

「ひぐっ……うん、どしたのお兄ちゃん……？」

泣きじゃくる幼女に、手首を縛られたままの俺が尋ねる。

アルト

「その駒さ。なんか俺そっくりの見た目してるんだが、どういうことだ？」

幼女

「あははっ！　だってこれは、お兄ちゃんに似せて作ったんだもん！　ほらほら見て、小っちゃいお兄ちゃんみたいで結構可愛いんだよ！　あつても、お兄ちゃんのアレはそんなに小さくはないもんね……ッ」

ナギサ

「うむ」

アルト

「お、おいやめろ。今これ以上状況を圧迫するな！

「というか、ナギサさんも助長しないで下さい！  
その話題を続けると、エミリア女史が」

エミリア

「あたしがどうなるって言うのサ」

アルト

「あつ、いや、ちつ、ちがうんだ！ ま、待ってくれ！」

慌ててエミリア女史の機嫌をとる。うわー、よしてくれよこの雰囲気。胸が引き裂かれそうだ。俺が悪いのかもしれない、何か俺に問題があつて、それが理由でこうなっているのかもしれない。けれど、この状況はあまりにも苦痛すぎるんじゃないやありませんこと……？

バスク

「フム……ここはひとつのエリアを重点的に制圧するべきだな。  
独占企業こそが、周りを鎮圧する有効な手段だ」

クノー

「なら、私は冷静に残っている物件を買い漁るか。こういった入念な  
下積みが、今後を大きく左右するんだ」

チエルシー

「ワタシは、一極集中ヨ！ でっかいお店をドーンと大きくしちゃ  
うヨー！」

愛情は、育めば育むホド大きく育つモノネー！」



幼女

「わたしは、ビバ行き当たりばったりで!!」

みんな、それぞれのやり方でボードゲームを楽しんでいる。が、楽しんでいるのはいいんだが、刑務所に入っている俺激似の駒以外にも、気になるものがあつた。

まず、バスクさんの抱えている駒。ありやどう見てもナギサさんだ。指人形サイズにデフォルトされたナギサさんは目がくりんくりんで可愛く描かれている。つか、二頭身だ。

次に、クノーさんの持っている駒は、茶色いロングヘアにリンゴの葉っぱみたいなアクセサリが頭から生えている。服はまさにガーディアンズ女性制服。ルミアだな。少しほころんだような笑顔をしている。

お次は、どう考えてもエミリアの形をした駒だ。一人だけやけにデカイ建物を持っているが、他のどこにも物件を持っていない。が、誰かが当たったらしく資金がたんまりと置いてあつた。

幼女

「踏んだのはお兄ちゃんだけだね」

アルト

「うおおおいつ!？」

っていうか、アレか。これは幼女なりの俺へのあてつけ  
というやつなのか」

幼女

「そんなことないもん。わたしはお兄ちゃんのこと大好きだよ！  
これは、貸したモノに対する返済、だよ！」

アルト

「返済……？」

一体、どういうことだ？」

幼女

「とにかく、議論を始めちゃおうよ。  
お兄ちゃんを中心にした、プライベート・ディベートをねっ」

幼女は、くすくすと不気味な笑いを示した。

## 第六話？・リトルウィング・会議室・（前書き）

ユニーク数（累計閲覧者数）1万アクセス達成しました！

皆様の心優しき閲覧の数々によってこの作品は成り立っています。

これからもひとつ宜しく願います！

近々、累計アクセス数も10万達成しそうです（、、）

## 第六話？ - リトルウィング・会議室 -

リトルウィング会議室。

本来なら事務所の奥にあり、特別な事例でしか使用することはない。だが、それはたったひとつの緊急会議により封じられた門への喚起を求められる。

物々しさと洗練された内装が、人々の視界いっぱい禁断のヴェールを解放する。

議題にあがる重要人物の名前は『アルト・シュバイツァー』。

さあ、ディベートの始まりだ。

〔 N O W   L o a d i n g 〕

アルト

「なあ、縄を解いてくれる気は……」

ナギサ

「かまわんぞ」

エミリア

「だめ、絶対にだめ！」

幼女

「アハハッ……！」

会議室へと連行された俺は、相変わらず苦しい体勢のまま椅子に括りつけられていた。何ていうか、こう、保管庫の中でゆっくりと煙で燻られるハムの気持ちが少し分かったような気がする。

会議室には、エミリア、ナギサ、チェルシーに幼女。それと修行から帰ってきたユートに、バスク、クノー、クラウチ、ウルスラ。オマケにシズルと付き人のメイドさんに、○ラゴン・サカーイにバランスポールの人、T隊長に能登○沙、リエタナカ、○夜ちゃんにグラールチャンネル5のお姉さん、せがた○四郎に○川元専務、リトルウィングに駐在している色んなスタッフの方々にマガシ・ピザの店長、ガーディアンズのメンバー少数、ルツ司祭にガーディアンの支部の方々、グリーングリンファームのお姉さんにイルミナス結社の残存部隊、ヴィヴィアンにSEED・アーダイト、ラピ子にアリス、ミヤウ、ネイ、オラキオ、スレイ、ファル、その他のアルゴル太陽系の皆様、サリサ、オギ、レーヴェ、カイ、アナにナウラケー

キ店の三姉妹、ボル三兄弟にタイラー味、カストル&ボルックスにバーニイ、アッシュ、ルピカ、キリーク、スウ、エルノア、ウルト、ジャンカルロ・モンタギュー、その他大勢のPSOメンバーの方々とグラールの原生生物に青いハリネズミやらネギを持った歌姫などが一挙に集まっていた。

……これ、どこから突っ込み入れりゃいいんだ。

まず、情報知らないヤツと来る必要のないヤツと住む世界の違うヤツと時間軸違うヤツと製作スタッフとイレギュラーが多すぎるだろうが。初音ミ〇は俺の嫁でもいい。

良くこんなに集めたなと思う反面、これは公開処刑か？ と疑問を表さずにはいられないんだが。回答次第では、もしかして俺の萎縮しきったトルネード・ステインガー（Sランクスピア）が大勢のエキストラの前で切除されたりするんだろうか……。

恐怖にすくみあがる身を抑えて、溜まったツバをごくりと飲み込む。

ざわ……ざわ……と続く喧騒の中で、変な小槌と鐘を持ってきたクラウチが、それを使って甲高い音を奏でる。

チンチーン。

クラウチ

「オラア、静粛にしろオ。第一回リトルウィング緊急会議、初めるぞぉ」

議題に沿ってクラウチが資料を読み上げる。

クラウチ

「あゝ、ええとだなあ……まず、このアルト・シュバイツァーの現状を説明する。女の子狙いでリトルウィングに入社したのはいいが、エミリアに恋心を抱かせた挙句、そのままあなあにしてナギサとヤツちまったらしい。アルトは否定しているが、ナギサ本人は抱かれたと証言して止まない」

急にどよめきが増す。ナギサとヤツたのかよ……とか、あの爆乳を揉んだのか……とか、あいつと俺は七天の護法の仲間だと思っていたのに……とかだ。

すると、一斉に各所から挙手の嵐が巻き起こる。まずは、被害者？ であるエミリア女史の意見だ。

エミリア

「はい、はい！ リア充は即刻死刑にするべきです！」

アルト

「ちよっ……！」

クラウド

「ハイハイ、まだ決まってねえから！ つつか、俺にやあそんな権限はねえ！」

まア……あれだ。とりあえず、当人がどう思ってるか聞くのが一番なんじゃ

ねえのか？」

クラウドのおっさんはクイツと視線を傾けてくる。それに合わせて、他のみんなからも注目。

どう思ってるかって言われてもなあ。

アルト

「お、俺は別に……その……まあ、正直に言つと何もしてないって  
いうか……あれ」



クラウド

「ン、どうした？」

アルト

「いや、今更なんだが、昨日からの記憶が曖昧というか……」

クラウド

「ほオ」

またも人垣は俺の証言を聞いてどよめきを増す。

クラウド

「つまり、昨日から今朝までのことは何にも覚えていねえってコトか？」

アルト

「ああ……」

クラウド

「ふうむ……で、ナギサはどうなんだ？」

お前は昨日から今朝までの状況をどう把握している？」

ナギサ

「私は……昨日からずっとアルトの部屋に居たぞ」

エミリア

「異議あり！！！！！」

エミリア女史が勢い良く声を荒げた。

つつか、何だよそのフレーズ。

エミリア

「ナギサの言ってるコトは嘘！　だって、昨日はみんな一緒にアルトの

部屋から帰ったもん！」

クラウチ

「ほオ……どういうことだ、ナギサ？」

ナギサ

「それは……」

チエルシー＆幼女

「ちよーっと待ったあー！！！」

突然、プリキュアもびっくりもコミュニケーションポーズで言葉を遮ったのはチエルシーと幼女だ。

幼女

「その証言、受け入れるにはまだ早いよっ！」

チエルシー

「コレが何ダカ、分かるネー？」

チエルシーの手中に収められていたのは、レンズの付いた小型のビデオカメラだった。

チエルシー

「コレは、昨日アルトの部屋に設置サレテアッタ、監視カメラの映像ヨ」

幼女

「昨日から今朝までの映像をバッチリクッキリ映してある丸秘映像だからね！」

クラウチ

「成る程な。んじゃま、とりあえずそれを拝見して決めるとするか」

アルト

「……いつ、カメラ付けたんだよ」

何だかんだでビデオを見せられるハメになってしまった俺。こうして、俺とナギサさんヤツちまった事件（仮）の実情が明かされることになっていく。

## 第六話？・リトルウィング・会議室・

画均一な壁側の背景に、まるでテレビ売り場のようなずらっとしたモニター群が浮上する。そして、会議室の中央に一際目立ちたがり屋な広さのあるモニターが。

俺はエミリア達がモニター準備に気を取られている内に、縛られたままの格好でそつと幼女に小声で尋ねてみた。

アルト

（なあ……もしかして、この全部のモニターにビデオの映像を流すのか？

じゃなくて、こんなにモニターがある場所だったんだな、会議室って）

幼女

（うっん、そうじゃないよ。昨日からわたしがクラウドに頼んで、こつそりと

用意してもらったんだよ）

アルト

（……それって、やっぱりいつもの幼女の予知能力かなんかか。

今の俺の考えもお見通しだよな、幼女には。だったら分かるだろ、俺は

ナギサさんに『手を出しじゃない』、みんなにそう伝えてくれよ！）

幼女

（うーん、そうしたらお兄ちゃんは、わたしに一年間365日ずっとケーキを

買ってくれるの？）

アルト

（誰が買うか！　ただでさえ最近では依頼の入りが薄くて収入も厳しいのに。

まあ、1ヶ月に1回くらいなら、俺は構わんが……）

幼女

（ぶーっ。それじゃやだよ。交渉決裂だねっ。それに、前にも言ったと思うけど

わたしはお兄ちゃんの困った顔を見るのが好きなんだよっ！　お兄ちゃんって

困れば困るほど可愛い顔するんだもん……フッフ！）

アルト

（ぐっ、汚いさすが幼女汚い。いくら温故知新（？）な俺でも某ブ○ントさんの如く

力カツと怒りが有頂天になるところだ。ケーキをおごってやろう）

幼女

（もう遅いですよーだ。でもさ、お兄ちゃん昨日のこと覚えてないんでしょお？

じゃあ、まだどうなったかは分からないもんねっ！）

アルト

（うわっ、リアルに汚ねえっ！　くそっ、こうなったら昨日の俺が

本当にナギサさんに

手を出していないことを（自信ないけど）映像でもって証明してやる！）

幼女

（あははっ、その言葉、忘れないでねっ！）

間を空けることなくセッティングの終了した俺の運命の提起は、ヴィイイインという、うねる様な低音の後に続いていった。

【 R E C P M 8 : 0 0 - アルト部屋での風景 - 】

室内では、チャブ・ダイを囲って談笑する四人の若者の姿が。

エミリア

『ヘーイ！ あたしの勝ちーっ！ ふっふっふ、軽量級限定勝負ならもう負けはないわねっ！』

アルト

『ぐぬぬ……俺のク○パが自分のホームコースで負けるなんて。エミリア女史はもう少し通路にバナナ5本バラまくのを止めた方が俺の

精神安定上とても助かるので宜しくお願いします』

エミリア

『えっ、アルトのバナナって剥かないと食べられないの!?!』

アルト

『どういう話ですかぁー!?!?!?!』

俺の部屋が写されている映像では、その中で俺とエミリア、ナギサ、幼女が4人で○リオカートをプレイしていた。

俺の部屋では、大体いつも似たようなメンツが常駐している。大抵、夕食やら風呂、夜まで続く依頼とかを終えて、20時過ぎくらいからチラホラと集まってくるのだ。

会話はなおも続行される。ガチャリと冷蔵庫を開けたのは幼女。

幼女

『お兄ちゃん、コーラ切れちゃったよー!』



アルト

『案ずるな、今日、クラッド6の商店街で安売りしてた2リットルのヤツを数箱ほど』

まとめて買ってきた。好きなだけ飲んでもいいぞ』

ナギサ

『私は最近、紅茶にハマっていてな。紅茶は無いのか？』

アルト

『ありますよナギサさん。ナギサさんが好きだって聞いていたので、ストレート』

ミルク、何でも揃えてますよっ！』

ナギサ

『ほう、ありがとう。早速頂こうか、御代はマッサージでも良いか？』

アルト

『えっ！？』

エミリア

『む……！アルトお、早くキャラ選択してさっさと決めちゃってよね！』

アルト

『あ、ああっ……悪い悪い！』

クラウチ

『ふうむ。今のところコレと言って目立った部分はネエなあ……』

ウルスラ

『貴方には、そう見えるのね』

クラウチ

『あアン！？ 何だよ、悪イのかヨ！！』

チエルシー

『マアマア、落ち着いて続きを見マシヨウヨー！』

アルト

（おい幼女……もうこれ以上は大丈夫じゃないのか？）

幼女

（まっさかー！ まだまだ、夜はこれからだよっ！）

アルト

（ふうむ……）

【REC PM9:00】

エミリア

『ねー、今日入る映画なんだっけー』

アルト

『ん〜と……去年放映してたやつ你再放送だな。アクション映画だ』

ナギサ

『濡れ場の多い映画だったと記憶しているがな』

エミリア

『ナギサって、結構変なトコで記憶力いいよね……』

アルト

『えっ、あの映画って濡れ場が本編じゃないのか？』

エミリア

『えっ？』

ナギサ

『そうそう、何故か惑星パルムにある超高層のラブホテルを貸切にして』

撮影していたりと、無駄に凝っているんだよな』

アルト

『オマケに、その濡れ場シーンが15分ほど続くという凄まじい映画だ。』

しかも、結構ヤバイシーンが多いんだよな……』

エミリア

『えーっ！ あたし、濡れ場とか嫌いなんだけど！』

ナギサ

『ほお、じゃあエミリアはもう部屋に帰るのか？』

アルト

『あ、ああ、帰るのか。そうだな、エミリア女史は連日かかった長期依頼が

終了したばかりだろう？ 無理しない方が良さと思うんだが』

エミリア

『むー……なんかさ、どことなく素っ気無くない？

特にアルト』

アルト

『い、いやっ、そんなことはないぞ！？

俺はエミリア女史の健康を第一に考えてだな……』

エミリア女史が俺を睨みつけてくる（映像を俺が見ている）。ねめつけるように俺を見回した後、やっと諦めたのかエミリアはすぐと身体を引っ込めていく。

すると、ナギサさんが徐に腰を上げた。

ナギサ

『つまみが切れたな。持ってきたル・ダッゴの足があるから、それを切り分けて

刺身にしよう。ちょっと台所を借りるぞ』

アルト

『俺も手伝いますよ、ナギサさん』

映像に映っている俺は、逃げるようにして足早にエミリア女史の下から退散するのだった。

固定カメラなので、映像はここで途切れている。後はひたすら、肘についてテレビを眺めているエミリアと携帯ゲーム機で遊んでいる幼女の姿だけだった。

クラウチ

「おい、あいつらが戻ってこねえぞ!」

チエルシー

「心配しなくても大丈夫ダヨー！」

幼女

「お兄ちゃんの部屋には、トイレ・風呂場・洗面台の裏・テレビの後ろ・椅子の隙間

えとせとら！ 合計24箇所もの隠しカメラが設置されてあるからね！」

アルト

「おいおい……」

本人の許可なく隠しカメラ24箇所も設置する方が問題あるだろ、  
と思いつつも、モニターの映像は台所へ向かった俺とナギサさんの  
シーンに切り替わっていった。

## 第六話？・リトルウィング・会議室・（前書き）

ナギサ成分が多いけど、ストーリーが続くことに色んなキャラに焦点を当てるつもりなんで、あんまり気にしないでね（´・`・´）

（ 10 / 15 風邪でダウン中、もう少ししたら投稿します ）

第六話？ - リトルウィング・会議室 -

【 REC PM9:15 - アルト部屋・台所 - 】

トントンと包丁がまな板を叩く音が聞こえる。柔らかい仕草と白無垢で繊細そうな指先は、男のものとはどこか趣が違っているようだ。包丁の刃先が吸い付くように、ル・ダッゴの足にスイツと切り込みを入れていく。

均等に切り分けられたル・ダッゴの足を、今度は俺が用意してあった皿に盛り付ける。こうやって、二人で共同作業をしていると、何だかとても温かい関係になったような気さえする。

画面の向こうで緩んだ表情を見せる俺は、きっとそう思っているに違いない。

ナギサ

『どうだ、似合うか？』

アルト

『あ、ええ、とても……』



裾を両手で掴んで、メイドのようなお辞儀をしているナギサさん。肩上に紐を通して、服の真ん中にポケットのある衣装。家庭用の調理エプロンを着こなした彼女は、少しだけ頬を赤らめていて、それが妙にくすぐったい可愛らしさを醸し出していた。

こうしてみると、いつもの戦地に向かうような鋭い目つきも、彼女のいとおしさの一部だと思える。やっぱりナギサさんは、戦闘よりもこっちの方が似合っているんじゃないだろうか。

飾りにタン・ポポを添えて、四人前のル・ダッゴの刺身が完成する、ツルツとした透き通った印象のある具材に、出来栄は上々といったところ。さして難しいものではないけども、十分に納得のいく仕上がりだった。

嬉しそうな顔をして洗い物をする彼女の横顔に、俺は見惚れていた。

すると、その様子に気づいたナギサさんが、ちらりとこちらを覗いてくる。

ナギサ

『……どうした？ 私の顔に何かについているのか？』

アルト

『あ、いやっ、別に何でもないんです……ッ!』

苦笑して言葉を濁すが、何か変な勘違いでもしたのか、僅かにほつぺたを膨らませて上目遣いで俺を見上げてきた。

ナギサ

『……アルト。もしかして君は、私が料理のできないダメ人間だと思っていただろう?』

アルト

『えっ!? いや、そんなことは……ッ!』

ナギサ

『ふむ……まあ、そう思われるのも無理はない。何せ、私のように女性としての魅力に欠ける人間は、総じて料理が下手なものらしいからな。』

まあ、気持ちは分かる。元々、料理は作るよりも食す方が好みではあるしな』

アルト

『ナギサさん……』

ナギサ

『……ワイナールと二人で旅をしていた頃は、自給自足の生活をしていたからな。』

人付き合いも苦手で、周囲を避けるように生活していたから、よくワイナールに

怒られていたものだよ』

ナギサ

『ナギサちゃん。そんなんじゃ、いつまで経ってもまともな人間になれないよ”

……と、な』

どうという言葉を返していいのか分からず、もどかしそうな表情をしている俺。ナギサさんは言葉を切って洗い物の続きに没頭する。

俺も昔は一人旅をしていたから良く分かる。

孤独というのは寂しいものだ。特に、その感覚は夜が更ければ更けるほど、自分の心を空腹と同じくらいの飢えと渴きで満たしてくる。

宙にかき消えるはずの言葉を拾ってくれる存在がいるだけで、それだけでも、人は見えない自分の心に対して報われたと感じるのだろう。だから、彼女にとってワイナールという人物の存在が、宇宙のとばりで唯一輝く、彼女の中の光だったに違いない。

妙にしんみりした雰囲気になったからか、画面の中にいる俺は皿

を手にして、食卓へ運ぼうと動き出し始めた。が、それを彼女の言葉が制した。

ナギサ

『おっと、忘れていた。別のものも用意してあったんだ』

アルト

『別のもの？』

がさがさと冷蔵庫から包みに入った縦長のものを取り出す。開封された中身はブルーフィーターと呼ばれる銘酒であった。

アルト

『酒か。随分と奮発したんですね』

ナギサ

『チエルシーからもらった』

アルト

『お姉様が？』

俺は首を傾げていた。クラウチならともかく、チエルシーさんが

お酒をくれるなんて。ちなみに、お姉様という呼称は格ゲー勝負で負けた罰ゲームとして呼ばされているからだ。

ナギサ

『ああ。何でも、店に来る馴染みの客がくれたらしい』

アルト

『成る程、それですか』

納得した俺は、お酒を受け取って食卓へ足を運ぶ。

ナギサ

『アルト……』

アルト

『何ですか、ナギサさん？』

ナギサ

『いや、何でもない……』

アルト

『……………？』

……何だっただ、今の間は。

彼女も包丁とまな板を洗い終えたらしく、残っている皿を手にして食卓へ向かう。ナギサさんは、一体俺に何を伝えようとしていたんだろうか。

場所は再びチャブ・ダイの元へ戻る。

## 第六話？ - リトルウィング・会議室 - （前書き）

お待たせいたしました。

少し前から引いていた風邪もすっかり半分くらい完治したので、と  
りあえず投稿です。ホイッと。

全く関係ないけど、東方のキャラだと魔理沙が好きです。  
弾幕はパワーだぜ！

第六話？ - リトルウィング・会議室 -

【 R E C P M 9 : 3 0 - アルト部屋・チャブ・ダイ前 - 】

アルト

『悪い、お待たせ』

エミリア

『んー。ひょつろほほいほ。はひゃっへはのは（ちよっと遅いよ。何やってたのさ）』

アルト

『ん、いや。少し手間取ってな』

ポテ・チを口に咥えて返事をするエミリア女史。アクション映画の方は、派手な逃走シーンで盛り上がっているようだ。

幼女は相変わらず携帯ゲームをいじっている。

アルト

『幼女、それP P？ なんか、少し形違うないか？  
どっちかと言うと、黒いームボーイカラーのような』



幼女

『ん、これゲーム・アだよ。SAGEから出てる昔の携帯ゲーム機』

アルト

『ああ、そっぴゃあったな。あんまり売れなかったヤツ』

幼女

『ぶー、ーク？と同じくらいの性能は出てるんだよ！  
それに、ゲーボーイよりも早くカラー液晶化してるんだから！』

アルト

『電池6本使う上に、やたら消耗早いけどな』

幼女

『海外だとSAGEは人気あるんだよ！』

アルト

『どこに対する海外だよ……』

幼女といつものスキニッヅをはかったあと、四人で映画の鑑賞を始める。何てことのない、いつもの風景だ。特にこれといった変化があるわけでもないが、そんな日常に退屈していたと言えそうかもしれない。

無意識のうちに、頭の中では思っていたのだ。

自分の環境に新しい波が欲しい、と。

【 R E C P M 9 : 4 5 】

映画も中盤に差し掛かってきた頃だ。この作品名物の濡れ場シーンが満を持して（？）流れ始める。ベッドインしたビーストの男性とニューマンの女性が互いの刺激を求めてなんとやら。

やけに狂乱的な勢いでお互いのまぐわいを求め続ける一日限りのハッピーエンド。そこにどんな意味があるのか、今の自分にはまだわからないけども。

しかし、それはそれだ。そんな番組を、花も咲き誇るひとときのピュアロマンスに包まれないまどきの若い女の子（リトルウィング ぜえ）と一緒に視聴するなど、恥ずかしくないわけがないだろう！

妙にそわそわしつつも、俺はこのとき、いささかわだかまりの残る彼女、エミリア女史のことをしきりにチラ見していた。

『あたしは……アルトのことが好き』

誰かが口にした言葉だった。

あれ以降、俺は彼女との距離感に疑問を抱いていた。彼女は少し前とは違った笑顔で俺に接してくれるようになったものの、それはやっぱり俺の考える理想とは違うもので。

……前にも一度、こんなことを考えたことがあったような気がする。一体、いつだっただろうか。

誰に？

俺はふいにナギサさんの方を向いた。何故だか、さっきナギサさんが口にしようとしていた言葉の続きが気になるような気がする。彼女は何を言おうとしていたんだろうか、俺は彼女のことをどう考えているんだろうか。

自分自身のことなのに、率直な自分の気持ち理解できない。こんなこともあるんだろうか。

エミリア女史とナギサさん。

少なくとも、今の俺にはどちらとも触れることも躊躇ってしまうほど、なんていうか遠い存在で、そんな彼女達が、俺にどういう態度を取って欲しいのかも、正直わからない。

ただひとつ言えることは、彼女達が俺にとって何らかの形を示そうとしていることだ。そして、俺はそれに対してある特定の『答え』を出さないといけない。

しかし……。

幼女

『ナギサ、ナギサ！！ 私、ナギサと一緒にいたいれ行きたい！  
ねえ、連れてってよお！！』

ナギサ

『夜は危ないからな、いいだろう。一緒に行こうか』

幼女

『わあい！  
それじゃ、行ってくるねお兄ちゃん！』

アルト

『あ、ああ……？』

俺に手を振る幼女と、もう片方の手を握るナギサは、二人でトイレへと向かっていった。つつーか、ロックもかけてるし、部屋内で危ないってこたあねえだろう。ナギサさんを連れて行く理由もわからんわ、いつもは一人で行ってる癖に。

と、そんな悩みの種の張本人から声が届いた。

幼女

『ちよっとトイレが水関係のトラブルで故障するから、10分ほどナギサと修理してるね。後はよろしくやっていいんだよ！』

アルト

『おい、ちよっと待て。まるで意味がわからんのだが』

その後、幼女からの返事はなかった。間違い電話で勝手に切られたときのように、やりきれない気分のまま俺はむすっとして向き直り、テー・ブルに置いてあるオ・サケを一気に煽る。

喉元に熱いものがたぎってくるのを感じたあと、ふいにエミリア女史が俺の方を向いていることに気がついた。

アルト

『ん、どうしたんだ、エミリア女史？』

エミリア

『……………』

が、こちらにも返事がない。何なんだよ、みんなしてどうもこつ隠し事が多いのか。妙にまじまじとした視線で見つめてくる彼女は、次第にこちらへと身を接近させてくる。

え、いや、接近させてくる。じゃないだろ、何だよいきなり。いや、近いんです。具体的により一層、現状況を説明すると、俺の左斜め横に座っている彼女がテーブルに肘をかけて、じりじりと俺の前へと近寄って来るんです。

綺麗に手入れされた金色の髪の毛からは、ほんのりと自己主張する洗剤の香り。真っ直ぐに見つめてくる瞳には穢れという概念がなく、そして唇はぷるるんとノッていて瑞々しい。

つまり、あれだ。普通に可愛いんじゃないか、ということ……！そして、エミリア女史の手のひらが俺の手の上にゆっくりと重なって　って、ええええええええっ！？

触れた手の感触。

手の甲に添えられた彼女の手は、自分の手よりも若干体温が低く感じられる。だが、その指先は男の自分よりも繊細でやわらかく、触れているだけで心臓の高鳴りが止まりそうになかった。

アルト

『え、え〜っと、ど、どどつしたんでしょうか、エミリア女史…  
…』

エミリア

『……わかってるでしょ。誰もいないんだから、昨日の続きしよう……』

アルト

『き、昨日の続き……ッ!？』

頬を染めて微笑んだエミリア女史は、そんなことをつぶやいていた。

……という状況が、現在目の前の動画では行われていた。

脳内通信がくる、幼女だ。

幼女

『随分、熱中してたけど大丈夫？  
クスクスッ、そろそろ心配になってきたんじゃないの？』

アルト

『ま、まだまだこれからだっ！』

とは言ったものの、かなり心配になってきた。

理性を保ってくれ、俺……ッ！



第六話？・リトルウィング・会議室・

【 R E C P M 9 : 5 0 】

アルト

『ど、どうしたんだ、エミリア女史……ッ!？』

エミリア

『……どうしたんだ、じゃないでしょ。アルトのばか』

唐突なダメ出し。更に顔を近づける彼女に、俺はたじろいだ。

エミリア

『むゝ、やっぱり、アルトはあたしのこと、なんとも思っていないんだ?』

アルト

『そ、そんなことはないッ!!』

エミリア女史は物凄く魅力的で明るさと可愛さ溢れる魅力的なキャラクター――

だと、原作では分かり易く解説されており、非常に魅力が伴っているかと……ッ!』

エミリア

『……何で、魅力って単語を3回も使ったのさ』

アルト

『い、いい、いや違う！ 誤解しないでくれ、エミリア女史が可愛いと』

言うのは本当だっ！ だ、だからもう少し離れてくれっ』

エミリア

『ふっん』

やや怪訝な表情で考え込むエミリア女史。何とも言えない間が、とても精神を圧迫してくる。やがて、答えが出たのか唇を開いてこう言葉であらわした。

エミリア

『なら、あたしにキスしてみてよ』

アルト

『えっ！？ キ、キス……だと……！？』

こくりと頷いたエミリア女史だったが、その後すぐに『キス』という言葉の重みを実感し始めたのか、徐々に頬を染め上げていく。むっとした顔つきに茹で上がったような感じが何とも愛くるしい少

女のいじらしさをアピールしている。

だが、そこはエミリア女史も譲れないのか、震える瞳を閉じて、スツと唇を差し出してきた。

エミリア

『ちよつと、早くしてよ。ずっとこうしてるの、結構恥ずかしいんだから……』

アルト

『い、いやあ。早くとおっしゃいまして……』

深く唇を寄せてくる。避ける。寄せてくる。避ける。

結果、彼女に半ば押し倒されるような感じで、身体ミッシェンコンプリートの自由を奪われてしまった。あとは自分の唇を重ねるだけで作戦完了だ。

アルト

（って、そんなワケに行くか……！）

別に俺とエミリア女史は『交際宣言をしたわけではない』のだ。だから、ここで俺がキスするのは、ちよつと意味合いが違ってくる。

無常にも時間は過ぎていく。こういう時に限って時計の針は力チコチ力チコチと五月蠅く茶々を入れてくる。時刻は21時56分、幼女の言うとおりなら、あと4分くらいは時間がある。

俺だって男だ。目の前で美少女に唇を差し出されれば、もうこっちのもんだと言わんばかりに熱い抱擁と貪るような情熱を唇に込めて……いや、そこまでの自信はなかった！ せいぜい、震えながらキスをするくらいはやってると思うが。

むしろ、誰もいなければ、それはそれで素敵な状況になるかもしれないしな！

とにかく、ここを一押してしまえば、エミリア女史は今よりも俺に好意を抱いてくる可能性があるということだ。キスするだけで儲かるボロい商売だと思ってしまうたら、歯止めが利かなくなるかも。

相変わらず時計は煩わしい音を奏でている。だが、それ以上に俺は腰が抜けて動けなかった。

時刻は21時58分。もう、戻ってくる頃だろう。

と、その時。

ふいにエミリア女史の目尻から暖かい水が……。

エミリア

『……やっぱり、あたしじゃどうしようもないってことなの？  
あたしって、そんなに魅力ないの？』

アルト

『……………いや』

エミリア

『だったら、キスくらいしてみせてよ。それくらい簡単でしょ』

アルト

『……………う……だが……………』

どうする俺。このままだと、エミリア女史を悲しませてしまうだけだ、しかし。

アルト

『エミリア女史……やっぱり俺は、今すぐにどうこうとか、そんな女史の心意気に

素直に賛成することができないんだ、だから……』

エミリア

『……ッ！… うるさーい！

うるさいうるさいうるさーいッ！…！』

急に怒声をかましてきた少女は、思い切り俺の体を押し倒した。

エミリア

『そんなんじゃ納得できない！ いいよ、そこであんたはじっとしてなさい！

あたしが勝手に、キ、キキキス！！ するからあ！！！！』

アルト

『えっちよまつ、ままま、待ってえ……！！！』

無理矢理に俺の腕を拘束してキスを迫ってくる。つーか、上着脱がされそうなんだが、どういふことなんだよ！！ 必死で抵抗して（なすがままでも良いと思えてきたが）危機を脱却する。

すると

エミリア

『こらっ！ 逃げるな』

ンぐッ！？』

突然、エミリア女史は寄生をあげた。何事かと思ってみれば、口にビン（オ・サケ）が差し込まれているではないか。たつぷり詰まったアルコールが砂時計のように上から下へと流れていく。

大体三分の一くらい流し込まれたところで、顔を真っ赤にしたエミリア女史は空ろな目で卒倒した。

ナギサ

『ふむ、何やら楽しそうだったな、アルト』

アルト

『ナ、ナギサさん……これには事情が』

ぐむう！？』

俺は同じように酒瓶を口に突っ込まれ強引に飲まされる。ごぼごぼと熱い滴りが喉を通過し、気がついた頃には瓶の中身はすっかり空になっていた。

きゅぽん。

アルト

『ナ、ナギサ……さ……』

俺は酔いに身体を翻弄されてよろめいていた。その姿を妙に影の残る仕草で見下ろすナギサさんと後ろからついて来ていた幼女の姿。

ナギサ

『どうだ、目が覚めたか？』

君のやるべきことを思い出すんだ。さあ……』

アルト

『お、俺の、やるべきこと……』

その直後、急に電気が消されて画面が真っ暗になる。それに続いて、しゅるしゅると衣擦れみたいな音が始まった。

話し声が聞こえるが、何を喋っているのか判然としない。ただ、



その後は妙に生々しい掠れ声とベッドの軋む音だけが響いていた。

沈黙しているのはクラウチ。ちなみに、大半のギャラリーは飽きて帰ってしまった。残っているのはいつものメンバーとシズルくらいものだ。

クラウチ

「……で、何ダ。アルトは覚えてネエ、ナギサはヤツたと言ってる。エミリアは強制わいせつ未遂の上に結局カメラは肝心の部分が映ってねえと」

チェルシー

「オウ、私もビックリヨ」

エミリア

「違う！ 絶対にヤツてない！！ アルトがそこまで根性あるとは思えないもん！」

ナギサ

「いいや、ヤツた。間違いなく、確実にヤツた。私の身体は感触を覚えている！」

エミリア

「ウソ！ そんなの証拠にならないわよ！！」

エミリアとナギサさんはお互いの意見をぶつけあって激しい論争に身を投じ始めた。そして、埒が明かないと悟ったのか、そこ矛先は自分のもとへ。

エミリア

「……で、アルトはどうなのさ！！  
本当は何もしてないんでしょ！？」

ナギサ

「あんなに激しく求めあったのに、忘れたと言うのか。  
照れなくてもいいんだぞ？」

アルト

「いや、俺は……」

しどろもどろで答えに迷う。そこで通信が。

幼女

「クスクスッ、やだお兄ちゃん。本当に何も覚えてないんだ？」

まっ、それも当然だよ。だって、昨日の夜、ナギサもお兄ちゃんも、どっちとも

手を出さなかったんだもん。それどころか、お兄ちゃんは泥酔してて、指一つ触れずに爆睡

してたからね。覚えてないのも無理ないよッ

アルト

『な、何だと！？ クソッ、はかったな幼女ッ！？

じゃあアレか、今までずっと未遂だったのを知らない振りして黙ってたって

言うのか！？ 何でそんなことしたんだよ！！』

幼女

『だって、そんなこと言われても、わたしはナギサに頼まれてお手伝いしてただけだし』

アルト

『ナギサさんに……？ どういうことだ？』

幼女

『そのままの意味だと思うけどねッ。まっ、脚本はチエルシーなんだけど、いわゆる

既成事実ってヤツ？ でっちあげでも信じれば本物になるって言うコトだけど

お兄ちゃんには通じなかったね。でも、お兄ちゃんが悪いんだよ。今までの状況をなあなあで済ましてきちゃったから、ここに来て問題化しちゃったんだもんね』

アルト

『俺の……？』

幼女

『薄々感づいてるんでしょ？ 答えはお兄ちゃんにしか出せないんだよ、フフツ』

そう告げて、幼女は言葉を終えた。

確かに、自分でも分かっている。どう転ぶにしても、浮かびあがった問題に対してけじめを付けなきゃいけないことは。

正面で睨み付けてくるエミリア女史とナギサさん。

だが、どちらの想いも受け取るには、今の自分には必要レベル値（攻略本推奨）が足りていないような気がするんだ。だが、そうしたら一体どうすれば……

……？

「これは、随分と派手な状況になっているのですね……シユバイツアーさん？」

……？

「やつほー旦那！ お・ひ・さ・しい〜」

俺が悩んでいると、会議室の中に見覚えのある人物が来訪した。  
現れた二人の人物はいつしか出会ったことのある、そう

アルト

「ルミア、ラナリー……ッ！」

エミリア&ナギサ

「……ッ!？」

ルミア

「リトルウィングの皆さん、お久しぶりです。この状況は何なのか  
もちろん説明してくれるんですよね……?」

そう、かつての事件の時に一緒に活動をしていた彼女達の姿だった。

## 第七話？・リトルウィング・通路・（前書き）

累計アクセス10万達成いたしました！

これもひとえに稚作を読んで下さる読者様のおかげです。宜しければこれからも読んで頂けると幸いです。

## 第七話？・リトルウィング・通路・

俺がリトルウィングの会議室でクラウチ達と昨日の出来事（ナギサさんとヤツチャいそうになった事件）について話をしていると、室内にルミアとラナリーがやってきた。

と、ここまでが前回までのあらすじになる。が、しかし、ナギサさんとエミリア女史からの挟撃にあって進退窮まっているのが実状だ。

一体、どうしたものやら……。むしろこの状況を説明してもいいものだろうか？ そんな俺の意図をものともせず、お姉様ことチエルシーさんが、二人に会話を始めた。

チエルシー

「単刀直入に言ウト、アルトの浮気性が原因で問題にナッテルノヨ  
ー」

アルト

「妙に誤解を生みそうな発言ですね……」

それを聞いたルミアとラナリー。ラナリーは妙に頷いた物腰で納得しているものの、ルミアの表情はみるみるうちに陰しくなってい

く。

ルミア

「……そうですね。別に私には関係のない話だとは思いますが、少し節度を持って親睦を深めたほうが宜しいかと思えますよ、シュバイツァーさん？」

とてつもなく冷たい表情で微笑むルミア。こう、あれだな、明らかに軽蔑されるとシヨックを超えて不思議な楽しさを感じてくる。学校で女子生徒に話しかけた時に『誰？』とか『いたの？』と言われる時のような高揚感を覚えるね。

だが、俺も誤解されたままそんな表情をされるのは我慢できない。何とかして疑念の眼差しを払拭させなければ！

アルト

「いや、違うんだルミア。これには深い事情があつてだな……」

ルミア

「信じられません」



先制のボディーブローが精神にヒットした。どうあっても信用できないらしい。

どうしたもんか、そんなことを考えていると、ラナリーが口を挟んできた。

ラナリー

「ふ〜ん、そうか、そうなんだ。成程ね、旦那ってそういうのなんだ」

ルミア

「ラナリー？」

ナギサ

「どういうことだ？」

疑問を投げかけるナギサ。ラナリーはつかつかと歩いて、アルトの前まで近寄った。口角をあげる彼女は、急に俺の後ろから手を回してきた。

ラナリー

「つまり、ボクがもらっても良いってことだよねっ！」

アルト

「えっ、えええええッ!？」

その場にいた全員が驚愕の声をあげる。それもそうだろう、俺も動揺を隠せない。もらうとは、その、そういった関係を承諾する、ということのはずで。

勿論、彼女達は反論をする。

エミリア

「ちよっ、何なのアンタ！ 急にしゃしゃり出てきて、勝手に決めないでよ!」

ナギサ

「確かに納得のいく話ではないな」

ルミア

「ラナリー！ ふ、不謹慎ですよ……!」

色々と揉め始めた状況の中、俺は自分の身の危険を感じていた。そんな時、後ろで縛られていた腕が自由になった。振り返ってみれば、

アルト

「ユート……？」

ユート

「おう、僕だ」

そこに居たのは（まるで出番の無かった）ユートだった。

ユート

「どうして師匠が追い詰められているのか、僕には分からないけど。師匠は困ってるんだろ？　だったら、今のうちに早く逃げ出してくれ！！」

アルト

「わ、分かった。すまないな、ユート。今度プリンおごってやるぞ」

頷いた俺は、他のみんなが気づかない内にこっそりと忍び足で会議室を離れる。が、すぐに見つかってしまう。

エミリア

「あつ、逃げようとしてる!!」

アルト

「ぐっ、早速バレたか!」

ユート

「大丈夫だ師匠!　ここは僕に任せて、師匠は早く遠くへ逃げるんだ!!」

身を挺して壁となつたユートに背を向けて、俺はリトルウィングのどこかへと全速力で脱走した。行き場は決まっていな。ただ、とりあえずどこか遠くへ逃げられれば、落ち着いて考える時間ができる。それだけ考えるので精一杯だった。

アルト

「ハアッ……ハアッ……ふう、何とか撒いたか」

どことも知れない、普段通らないようなリトルウイングの通路。俺は額に滲んだ汗を手の甲で拭い、肩から力を抜いて息を吐き出した。

だが、同時にユートのことも心配になる。別に大丈夫だとは思うが、拷問とかされてないだろうな。無垢な少年の素肌を覗く年頃の美少女達とか、彼女らに邪な感性がないことを期待したい。

多分、俺の部屋はもう誰かの監視つきになっているだろう。部屋には戻れない。そして、問題なのが幼女だ。さっきから通信を試みているのに、ちっとも連絡が取れない。何をやっているんだ、あいつは。

確かに俺の責任もあるかもしれない、だが、俺だって好きでこんなことしているわけじゃない。かと言って、あのまま言いなりになっってしまったら、俺の人生は変な方向に終わりを迎えて、変なスタートを切ってしまうかもしれない。

もう一言付け加えれば、俺はまだ女の子がどういう存在なのか知らない。だからこそ、俺は……。

???

「フン、随分と楽しそうじゃないか」

アルト  
「……誰だ？」

物思いに耽つてしていると、どこからともなく声が聞こえた。それは男の声で、通路の向こう側からかつかつと近づいてきていた。

アルト

「……シズルか。っていうか、お前もここに来てたのかよ。さっきの様子を見たら分かるだろ？ 俺は忙しいんだ、今はお前にかまっている暇は……」

シズル

「随分と味気ない物言いだな。僕が協力してやろうと言っているのに」

アルト

「なん……だと……今、何て言った？」

シズル

「協力してやろうと言ったんだ、フフフッ……！」

コイツは一体何を考えている。果たして、素直に信用してもいいものだろうか。眼前に現れた少年、シズルは不敵に微笑み続けるのだった。

第七話？・リトルウィング・通路・

アルト

「一体、どういづつもりだ……？」

シズル

「案ずるな。僕は貴様の味方だ」

そう呟いて、スツと手を差し出してくるシズル。

アルト

「何だ、これは」

シズル

「5000メセタでいいぞ」

アルト

「クソツ、やっぱ<sup>メセタ</sup>り金じゃないか……！」

シズル

「会社の金を私的に使い込んだのがバレただけだ。まったく、この程度で文句を言うとは、あのジジイめ……」

アルト

（それはそれでどうなんだよ……）

アルト

「まあとにかく、だ。今まで買ったプレミアものの同人誌とかがあるだろ。それ売ったら金なんていくらでも稼げるだろ」

シズル

「ふざけるな、どうして僕が自分のお宝を売らなければいけない！それに、あのクソジジイの他にもなく凶暴なメイドがいるんだ。あいつのおかげで、買った同人誌（主に18禁本）が軒並み処分される始末……ッ！　おかげで僕はまだ発見されていない隠し場所にある、残り少ないエロ本で自家発電するしかないんだッ！！貴様なら分かるだろ、このやるせなさがッ！！」

アルト

「ま、まあ……」

「気持ちは分かるが、俺にも金銭的な余裕はない。協力はしてほしいが。」

シズル

「だが、お前に選択をしている余裕はあるのか？　すぐにも追ってくるぞ、あいつらは」

アルト

「分かった……即金はないが、今度俺のコレクションの中から好きなものを持っていくといい。　　　系でいいか？」



シズル

「そこは            だろう。あと巨乳で、塗りは厚いものが好きだな。  
サークルの本があればなおよしだ」

アルト

「少し条件がキツいな、まあいいだろう。交渉成立だな」

シズルとの握手を交わして、行動を開始する。耳を済ませれば、誰かの足音が入り乱れてここまで聞こえてくる。見つかるのも時間の問題だな。

アルト

「で、どうするんだ。ここはリトルウイングの縄張りだ。地理に乏しいお前が、俺にどんな指標を拜ませってくれるって言うんだ?」

シズル

「フン、こっちだ」

俺はシズルに連れられるまま、通路を後にした。

【リトルウィング・雑貨屋『ローカル・レート』】

アルト

「ここは……」

俺は周囲を見渡した。薄暗く、やや古ぼけた印象のある室内には、今まで見たことのないようなアンティーク武器や、クリスタル水晶で創られたドクロまでもが飾られてある。独特な雰囲気をもつ魔法屋のような場所へと俺は案内されたのだ。

アルト

「リトルウィングにこんな場所があったのか……」

シズル

「地理に乏しいのは入社して間もない貴様の方ではないか。一般的な地図を把握しただけでは、こんなインチキ臭い店など見つけれないだろうからな」

???

「おいおい、ヒトの店に入って来ておいて、そりゃあ無いんじゃないのかい？」

小さなのれんをくぐって、一人の男性が姿を現した。やけに身軽そうでラフなイメージのある男だった。バサついたエメラルドグリーン髪の毛に、黒いサングラスをかけている。

シズル

「ロレット、情報に詳しいお前なら知っているだろう。こいつがアルト＝シュバイツァーだ」

ロレットと呼ばれた男は、清々しげに納得してサングラス越しにニコツと微笑んだ。

ロレット

「ああ、聞いているぜえ。リトルウィング中の美少女戦士を手玉に取って、豪遊しようって考えている新入社員の事だろ？ あゝあゝ羨ましいねえ、俺ももう少し若かったら、君のような人生を謳歌していたんだけどねえ、あっはっは！」

アルト

「……どういう噂だ。ロレットさん、この店は貴方の経営しているものなんですか？」

ロレット

「ロレットでいいぜえ、アルト君。それにしても君、見た目通りに優柔不断そうな顔してるねえ」

アルト

「そんなラフな格好をしている貴方に言われたくはないがな」

ロレット

「まあまあ、ここはひとつお互い協力関係に行こうぜえ」

アルト

「協力……？　そうだ、俺は貴方に助けられるようなことはしていない。一体何が目的なんだ？」

そこでロレットは、机に置いてある小型の機械からモニターを投影した。画面は透明なスクウェアで、リトルウィングの地図が載っていた。それと、赤と青で区分された点滅が。

ロレット

「なあに、簡単なことさ。この店の常連客になって欲しい。それが条件だ」

アルト

「この店をか？」

俺は辺りを見回す。中にあるのは、どれもが骨董品で、正直に言  
って俺の目を輝かせるような期待に満ちた商品は存在しない。ハッ  
キリ言うとかラクタ。そこらへんに落ちてる魔石ハートキー並にい  
らない。

ロレット

「今は説明する時間がないから、いずれゆっくりと教えるさ。まず  
は、俺とアルト君の今後について、話し合おうじゃないか」

そうだ、今でも彼女達が探しているのだった。意識を改めた俺は、  
腰を据えてロレットの話に耳を傾けていった。

## 第七話？・リトルウィング・通路・（前書き）

この作品はこの話をもって終了いたします。短い間でしたが、連載にお付き合い下さいましてありがとうございます。

そして、来月よりこの作品の第二期（半リメイク）として新たな小説を投稿いたします。宜しければそちらの方も読んでいって下さいね！

## 第七話？・リトルウィング・通路・

ロレット

「まずはこれを見てくれ」

俺は机に広げられた無地のウオッタ（紙媒体）に目を通した。それはリトルウィングの全景図で、その中にペンを走らせていく。

その中には、各所に点々とした幾つかの赤い目印が記された。

アルト

「これは？」

ロレット

「アルト君を確実に捕まえるための包囲網みたいだね。彼女達の状況は、知り合いのリトルウィング社員数人が様子を見てくれている」

シズル

「どんな感じなんだ？」

ロレット

「うーん、ほとんど関所って感じかな」

彼が指したのは赤い点で記された三つの箇所だ。それぞれに名前を書き込んでいく。

ロレット

「ここにナギサ君……それとこっちにルミアちゃん……んで、最後にエミリア君って感じかな」

シズル

「ユートは捕まったようだな。で、どうするんだアルトの大将さん。僕は別に貴様のことなどどうでもいいが、一応協力する約束だからな」

ロレット

「この三人の内、誰から説得するんだい？」

アルト

「そうだな……」

俺は黙考した。恐らく、もっとも怒っているのはエミリア女史だろう。彼女は一番最後に回すとして、ルミアも結構この手の話には厳しそうだからな……それに。

ナギサさんとちゃんと話しをして、昨日の出来事が本当かどうか確かめたい。



彼女がどう思っているのか、俺に対して何を想っているのか、それをこの目で確認するんだ。

アルト

「よし、決めた……ッ！」

ロレット

「じゃあ、説明宜しく頼むよ」

アルト

「ああ、まず」

Now Loading

リトルウィングの通路、曲がり角を越えた先に見えるのは、長い黒髪の美少女ナギサさんだ。腕を組んで、ずっと仁王立ちしている。

ナギサさん相手なら直球勝負で行くしか無いか……？

角の奥、ひっそりと身を潜めて遠くを覗き込む俺とシズルとロレツト。こうして見ると、何とも情けない格好だが、背に腹は変えられないというやつだ。

二人が見守る中、俺はゆっくりと身を乗り出した。

アルト

「ナギサさん……」

ナギサ

「来たか、アルト」

俺が来るのを待ち望んでいたかのように、笑顔を灯して答えるナギサさん。その表情は一点の曇りも無く、自分の信念を貫いているかのようにだった。

アルト

「ナギサさん、俺……ッ！」

途端、彼女の上唇が開く。

ナギサ

「アルト、私と勝負しろ」

アルト

「えっ……！？」

突然の彼女の言葉に、度肝を抜かれる。角の奥にいる二人にも驚愕の色が見えた。

アルト

「何故、どうしてなんですか、ナギサさんッ！！」

ナギサ

「剣を出せ、アルト。そして私と戦え！」

アルト

「ナギサさん……」

ナギサさんの目は本気だった。真剣に俺と一戦交えようとしてい

る。

そして、彼女のナノトランサーから身の丈ほどもある巨大な剣が編み出されていく。フォトンの粒子をまとい、絹さやのように流麗な線を描きながら、彼女の懐には自らの獲物である大剣「スティールハーツ」が握り締められる。

ビュン。

空を裂いた剣という名の楽器が音を奏でる。鮮やかな剣舞は、俺の眼前に刃先を突き立てていた。

ナギサ

「剣を抜かないつもりなのか？　ならば、こちらから行くぞッ！」

アルト

「ッ！！」

一瞬で間合いを占有した彼女は、体格に似合わないその強大な剣を振りかざし、上段から叩き付けた。その瞬間、バチンツと金属と火花が暴れ狂う音がした。

俺は無意識の内に、ナノトランサーから片手剣【エリュシオン】を紡ぎだしていた。

アルト

「ナ、ナギサさん……ッ！」

ナギサ

「ふふふっ、そうだ、それでいいんだアルト……！ さあ、私との一騎打ちだ……！」

思いがけない展開で、俺とナギサさんの戦闘は火蓋を切った。だが、絶対に伝えなきゃいけない、俺の今の気持ちを、俺のナギサさんに対する想いを……！！

俺の中で、彼女と戦うための闘志が熱く燃え滾り始めた。

## 第七話？・リトルウィング・通路・

ナギサ

「でやあああつ！」

剣戟が重く俺の握るセイバーに圧し掛かる。重量を生かした分厚い一撃は、線の細い彼女から繰り出されているとは思えないほどの威力を兼ね備えていた。

刃先が擦れ、微細に震えだす。俺の腕力に一步も劣らないナギサさんは、深く俺を押し出そうと武器に力を込める。

ナギサ

「さすがアルトだ……こんなに力量があるのなら、もっと早くに勝負を申し込んでいれば良かったと思うよ……ッ!！」

アルト

「ナツ、ナギサ、さん……ッ！」

剣を受け流して懷へと運んでいく。が、咄嗟に身を退けたナギサさんの機転により、振るった刃はすうっと宙をもがいた。彼女の服に僅かな切り込みが走る。

だが、さすがに歴戦の猛者だけあって、ナギサさんは強い。その剣裁きもさることながら、瞬きすることもなく、一点に相手の攻撃を意識するその鋭い眼光は、大抵の人間なら計らずとも隙を見せてしまっただろう。

迂闊に飛び込むことはできない。

しかし、それは彼女も同じなのだ。何と言っても、ここはリトルウィングの中だ。この狭い通路では、あの大剣が猛威を振るうことは少ないはず。

この通路はさして広いわけでもなく、せいぜいヒトが行き来するのに不自由しない程度のスペースしかない。かたや、ナギサさんの武器「ステイルハーツ」は、相手を叩き潰すために用意された巨大な剣だ。

そんな武器を自在に振るおうと思えば、この通路は余りにも狭すぎる。大剣の特性から考えて、突くことは難しいだろう。かといって横なぎに武器を払えば、通路の壁に弾かれるか、下手をすると壁に突き刺さってしまうだろう。

そうになると、斬り下ろすか、斬り上げるかだが……。

待てよ、通路の壁……そうか。

ナギサ

「……どうしたアルト、何がそんなに可笑しい？」

アルト

「いえ、ただね……」

何時しか俺の表情からは、笑いが零れていた。

アルト

「すごい、嬉しいんですよ」

ナギサ

「嬉しい？」

俺はこくりと頷いた。後ろで俺の戦いを静観している二人は、俺とナギサさんの会話に自然と耳を傾けている。



アルト

「ええ、何ですかね……俺、別に記憶があるわけでも無いのに、妙にナギサさんに親近感が沸くんですよ」

ナギサ

「昨日の話か？ やつとアルトも認める気になったのだな」

アルト

「ナギサさん、思い出してください。確かに俺には、いや、俺と貴女には記憶が残っていない。自分でも何言ってるのか分からないけれど、俺とナギサさんにはあったはずなんです、もっと別の繋がりが……！」

ナギサ

「アルト……」

彼女は静かに俺の姿を見据えている。

アルト

「ずっと、抱いてたんですよ。俺は、漠然とだけど、その……ナギサさん、貴女に、貴女を憂う感情……恋、なのかな……良くわからないけれど、そんな気持ちを」

シズル

（アルト……）

通路は不思議と静まり返っていた。まるで、星の引力に引かれて潮が戻されていくように。

アルト

「でも、どう伝えていいのかわからない、伝えるべきなのかわからない。でも今、ナギサさんと剣を交えてはつきりと感じたことがあるんです」

ナギサ

「……………」

アルト

「それは、ぶつかる剣の刃先から滲み出て来る、映された刀身の彼方から姿を覗かせる、ナギサさんの、心……………！」

俺の身体は震えていたかもしれない、こうして言葉を呟くことへの恐怖じゃなくて、もっと新鮮な気持ち。武者震いに近い、心休まるような感覚に。

アルト

「今までずっと、俺はナギサさんの……………いえ、自分の気持ちを受け止めることができなかった。こんな現実が訪れて、自分の心の扱い

方が分からなかったんです」

ナギサ

「アルト……」

アルト

「でも、今やっと分かりました。自分の気持ちをどう受け止めればいいのか、ナギサさんに何を伝えればいいのか。貴女に、それを感じて欲しい……見てもらいたい」

俺は強く拳を握り締めた。それに反応した刀身からは、フォトンの波がふんわりと浮き上がってくる。

アルト

「今までの俺を……そして、これからの俺を！」

ナギサ

「……いいだろう！ 次が、私とお前の最後の一撃だ！！」

もうすぐ、ナギサさんとの関係が見えてくる。

それがどんな運命になるかは、まだ分からない。

でも、いつかきつと

第七話？・リトルウィング・通路・（前書き）

まさかのシリアスパート。一話前までの騒ぎようがウソみたいだ。  
。。。）

## 第七話？・リトルウィング・通路・

ナギサ

「行くぞ、アルト！！」

アルト

「来てください、ナギサさんッ！」

ナギサさんは、腰を深く据えて疾走した。どんどんと距離を縮めてくる。

シズル

（まずいぞアルト……そんなヤワな片手剣では、武器ごと叩き潰されてしまうぞっ！）

ロレット

（詰め方が上手い。あれは受け切れる一撃じゃないぞ！）

確かに、今の気迫が灯ったナギサさんの攻撃をまともに受けてしまっただけ、ひとたまりもないだろう。ならば、先手必勝！

俺は、彼女が下段から振り上げようとする大剣のスピードよりも

早く、彼女の懷へ飛び込もうとした。

だが、

ナギサ

「甘いッ！」

急に、ナギサさんは両足を急停止させた。そして、そのまま剣が振り上げられる。同時に、俺の髪先が散った。

この攻撃はフェイク、相手の進行を妨げるための空振りだった。

ナギサ

「惜しかったなアルト、だがこれで終わりだ。食らえええええっ！」

頂点に達した武器が、勢いを増加させ下降してくる。

その瞬間

ナギサ

「何いッ!？」

俺は、彼女の視界から姿を消していた。そして、ナギサさんも気づくはずだ、この展開の内にはばら撒かれた、俺の切り札を……!

ここに居た全員が騒然と見つめる、視線の先には

シズル

「壁に片手剣が、突き刺さっているだと……ッ!」

ロレット

「いや、それだけじゃない、壁に剣を突き刺すことによって、彼女の進行方向を物理的に妨げている! あのまま遠心力に任せて突っ込むと、逆に彼女が剣の餌食にされてしまうっ!」

片手剣とはいえ、その刀身は70〜80R pほどはある。この狭い通路で剣を横に突き立ててしまえば、その空間の三分の一は使い物にならなくなる。



その隙に、俺は反対側へ身を寄せていた。

ナギサ

「くっ……対応が、間に合わないっ……！」

アルト

「これで、終わりですっ！」

素手となったら、あとはもうやることは一つしかない。

俺は右腕に力を入れて、がら空きになった彼女の懷に強打を叩き込んだ。

ナギサ

「か……はぁ……っ！」

アルト

「御免……ッ！」

彼女の身体が僅かに宙を飛翔する。剣は腕から抜け落ち、後方へと吹っ飛んだ華奢な肉体は、壁に激突して床に横転した。

アルト

「はあっ、はあっ……ナギサ、さん……」

咳き込むナギサさんの元へ駆け寄って、俺はそっと肩を抱きかかえる。

ナギサ

「いや、実に見事だったぞ……私の完敗だ」

アルト

「ナギサさん……」

ナギサ

「格闘術は心得があつたんだがな……お前の虚をついた機転に圧倒されて、目を釘付けにされたよ。武器には、ああいう使い方もあるんだな……」

アルト

「すみません、俺……！」

苦しそうに呻くナギサさんを見ると、自分の心が締め付けられたような苦しみに追いやられる。

でも、彼女は満足げな微笑みを残していた。

ナギサ

「アルト……お前は分かっていたかもしれないが、私は昨日の夜、お前を襲ったりはしていない……っ」

俺はふいに彼女の手を握る。

彼女は呆れたような碎けたような、そんな笑いをしてくれた。

ナギサ

「ふふっ……実は、泥酔して横たわったお前を気の赴くままに襲ってやろう、などと少し悪びれたことも思っていてな……」

だが、彼女は首を振った。

ナギサ

「なのにもかかわらずだ。酔って寝ているお前の手を握った瞬間、言いようのない感覚にとらわれたんだ……そして何故か、一瞬だけ見えた。お前と手を繋いで星空を眺めている、いつの日かも分らない夜のことをな」

アルト

「ナギサさん……」

握った彼女の指先は、少しすり傷があってごっごっとしていた。いつも剣を握って、戦うことでしか自分を見出すことの出来なかった、彼女の証なのか。

けれど、手のぬくもりだけは暖かった。確かな鼓動を感じる、ヒトのぬくもり。俺の中にも伝わってくる、いつかの光景。

ナギサ

「アルト、笑ってくれ……今日まで剣士であることを自覚してきた私が、たかが手ひとつ触っただけで……恥ずかしい……なんて想ったんだ。いい笑い草だよ……」

アルト

「ナギサさんは、立派ですよ。自分の意思を持って生きている。そ

れが、今のナギサさんなんだと……俺は思います」

ナギサ

「フッ……私は変わったのか……もう少し、お前の言葉を聞きたいなどと考えるとは」

アルト

「ッ！」

俺の言葉を聞きたい。ナギサさんの口から出た言葉が、とても綺麗に感じた。俺が生きてきた中で、きっとこれほど気持ちの高まる言葉はなかっただろう。

ナギサ

「アルト……お前にひとつだけ、謝らなきゃいけないことがある」

アルト

「俺に？」

ナギサ

「お前に、敬語はやめてくれと言ったのは覚えているか……？」

アルト

「敬語……ああ」

今朝、俺が全裸のナギサさんとコーヒーを飲んでいるときに口にしていた言葉だ。

ナギサ

「あの話は、やっぱり無かったことにする」

アルト

「えっ……？」

ナギサ

「じゃあアルト……お前は私のことをさん付け無しで呼べるか？」

アルト

「ナツ、ナギッ……ナギッ、ナギサ……さん」

ナギサ

「ぷっ」

ナギサさんは情けない俺に堪えきれない苦笑を漏らした。

ナギサ

「いや……私も同じだ。君のことをアルトさんなどと呼んでしまっ  
てはおかしいだろ？」

アルト

「あ、いや、それはまあ……」

俺だって、どうせなら女の子に呼び捨てにされる方がいい。

ナギサ

「だから、お前はお前らしく居てくれればそれでいい……でも、」

アルト

「でも？」

ナギサ

「ふ、ふふっ……こんな時でも、アルト。お前は保守的なのだな」

アルト

「うっ」

ナギサ

「いや、いいさ……でも、」

彼女は何かを決意するように、すうつと息を吸って、俺の瞳を見つめた。曇りのない、とても綺麗な彼女の瞳に俺の姿が映る。

ナギサ

「でも、でもいつか、私とお前が……その、こ、恋人同士になる日が来たとしたら……あの、呼び捨てで呼んでもらっても、いい……か……？」

アルト

「ナギサさん……分かったよ。ナギサさんがそれでいいなら」

ナギサ

「そうか……」

僅かに、その白無垢な頬を紅潮させている彼女の表情が安らぎに包まれる。

俺は立ち上がった。

アルト

「じゃ、俺行くから……」

ナギサ

「ま、待ってくれ……ッ！」



ナギサさんは、まるで少女みたいな声で俺を呼び止める。

ナギサ

「その、最後にお願ひがあるんだが……あの、最後に……もう少し手を握らせてもらえないか？　いつか、望みが叶うまでの記念にしておくから……」

アルト

「ん……」

感触を確かめるように、両の手のひらで触れられる俺の右手。自分よりも一回り小さい彼女の指先が添えられる。

ナギサ

「悪い、な……私の手は、お前が思うほど綺麗では無いかもしれん……今は、それが少し悔しく感じるよ」

繋がっていた指先がずるりと離れていく。俺はこの世界で出会った一人の孤高な美少女に別れを告げて、背を見せる。

これで終わりじゃない。そう何度も心で呟いて、寂しさを紛らわせる。

俺が去っていく光景を、彼女はじっと眺めている。

遠くない未来にある、幾つもの選択肢の中の、限らない希望の星空。その想いに届くまで、俺も彼女も、ゆっくりと広い宇宙の彼方を見上げていくんだ。

夢を、叶えるために

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0782v/>

---

超星恋憚インフィニティ-俺と少女のポータブル-

2011年11月24日18時54分発行